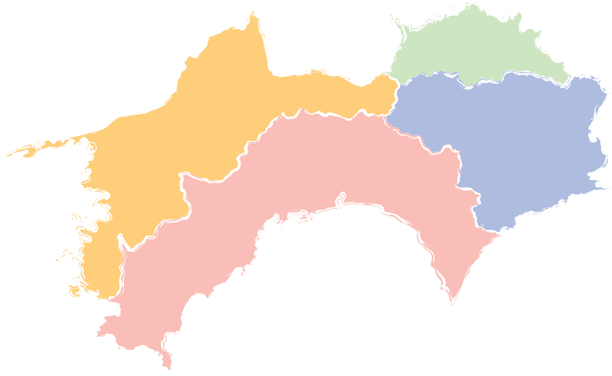
先人の教えに学ぶ

四国防災八十八話

先人の教えに学ぶ 四国防災八十八話

先人の教えに学ぶ

四国防災八十八話



発刊にあたって

国土交通省 四国地方整備局
局 長 **祢 屋 誠**

四国は、地形が急峻なうえ地質も脆弱なことから、常に水害や土砂災害の危険にさらされていますが、その一方で大規模な渇水にも見舞われています。日本国内の年間降水量の推移を見ると、地球温暖化の影響でしょうか、降水量の変動幅が大きくなり、豪雨と渇水の頻度が高くなっています。また、四国にとって大きな脅威である東南海・南海地震の今後三〇年以内の発生確率も大変高くなっています。

このような厳しい環境の中で、だれもが安全に安心して暮らせる四国を創ることが、私たち四国地方整備局の大きな使命の一つです。このため、水害や土砂災害対策、各種構造物等の地震対策、災害に強い道路ネットワークの整備等を効果的かつ効率的に進めているところです。

しかしながら、被害の最小化を図るには、これらの対策に加えて防災体制の強化や防災情報の共有等のソフト的な対策が必要です。このため四国地方整備局では、地域全体の防災力を強化するために、行政間の連携、行政と地域住民の連携、地域住民同士の連携といった視点で様々なソフト的な取り組みを進めています。

先の阪神・淡路大震災では、災害対策においては自らの身を守る「自助」、地域住民やボランティア等の連携による「共助」の果たす役割が大変大きいことを学びました。全国に先駆けて過疎化や高齢化が進展している四国では、これらの活動は特に大切であると考えられますが、地域全体で「自助」、「共助」を充実するには、防災教育や防災意識の向上が重要な役割を果たすことになります。

本冊子は、このような視点から、防災教育や防災意識の向上のための教材として活用していただけるよう、四国各地に残る災害に関する言い伝えや体験談を教訓集として取りまとめたものです。取りまとめにあたっては、「四国防災八十八話検討委員会」を設置し、専門的な視点からの検討をお願いしました。本冊子が災害に関心を持つきっかけとなり、地域の防災力向上の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本冊子の発刊にあたりご協力頂きました「四国防災八十八話検討委員会」委員各位ならびに体験談を応募いただきました方々を始めとする関係各位に、改めて厚くお礼申し上げます。

はじめに

四国防災八十八話検討委員会
委員長　村　上　仁　士

四国は台風常襲地帯といわれ、毎年のように豪雨による洪水や土砂災害、沿岸域における高潮や津波などの災害に見舞われています。また、これまで四国を襲ってきた東南海・南海地震の発生確率は、時計の針が進むとともに確実に高くなっています。

一般に、災害のリスクは、自然現象や事故などの危険要因と地形状況や防護水準等の脆弱性（素因）を乗じたものを社会の対応力で除すことにより評価することができます。すなわち、災害を誘引する外力が大きければ大きいほど、その結果としての被害も大きくなる可能性が高くなりますが、同規模の外力であっても、日頃の災害に対する備えのあり方によって被害の程度が左右されます。従って、地域の弱点を知り、適切な施設整備などのハード面での対策により防護水準を向上させることが重要となります。さらに、災害に関する知識や経験、文化などが反映される地域社会の対応力を充実することにより、災害のリスクを軽減することが可能になります。

現実には、経済性やフィージビリティーの観点から、全てをハード面での対策で対応することは困難ですので、災害情報をいち早くとらえ、住民が自主的に避難行動を起こすことができるような社会の対応力を向上させる取り組みを効果的に組み合わせることが大変重要になります。

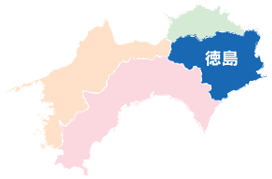
これまで多くの災害を経験してきた四国では、各地に災害に関する言い伝えや災害から生き延びた体験談が数多く残されています。これらの言い伝えなどを体系的に整理し、経験や知識として共有することは、地域社会の対応力すなわち防災力の向上に大いに役立つに違いありません。

四国の防災分野の研究者一二名で構成される「四国防災八十八話検討委員会」は、四国各地に残る水害、土砂災害、地震・津波、高潮、渇水に関する物語や言い伝えなどから、住民の心に響き、防災意識の向上や災害時の行動に活かすことができる教訓・防災話を抽出することを目的として設置されました。今回新たに住民公募によって集められた体験談も含めた膨大な資料からの抽出作業に当たっては、史実に基づくこと、今日的な教訓が含まれること、読者を惹きつけること、災害の種類や発生した時代などを考慮し、最終的に四国八十八ケ所に因んで八十八話を選定しました。

四国の防災文化の集大成とも言うべきこの冊子を通して、尊い犠牲を伴った先人の経験や知恵を自分の経験や知恵として是非役立てていただきたいと思います。災害に対峙しているのは他ならぬ私たち住民自身なのです。

もくじ

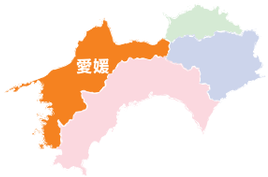
発刊にあたって ……1
はじめに ……3
1　ようこそ四国防災八十八話へ―この本の使い方― ……10
2　四国防災八十八話



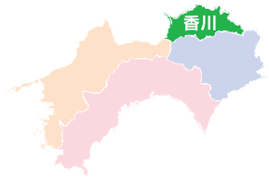
第一話　吉野川下流域の高地蔵 ……（徳島県吉野川下流域）18
第二話　蔵珠院（ぞうしゅいん）の洪水痕跡 ……（徳島県徳島市）20
第三話　川贄（かわにえ）さん ……（徳島県徳島市）22
第四話　印石 ……（徳島県石井町）24
第五話　愛宕地蔵 ……（徳島県石井町）26
第六話　割腹した稲垣監物と監物堤 ……（徳島県吉野川市）28
第七話　三王神社 ……（徳島県つるぎ町）30
第八話　日本一の水防竹林 ……（徳島県吉野川中流域）32
第九話　浸水時の知恵 ……（徳島県三好市）34
第十話　ひでり続きでほこり立つ ……（徳島県三好市）36
第十一話　危機一髪 ……（徳島県三好市）38
第十二話　百度石に刻まれた教え ……（徳島県徳島市）40
第十三話　目の当たりにした凄さ ……（徳島県徳島市）42
第十四話　お亀千軒 ……（徳島県徳島市）44
第十五話　九死に一生を得る ……（徳島県徳島市）46
第十六話　百畳敷のお寺 ……（徳島県阿南市）48
第十七話　万代まで続け、「万代堤」 ……（徳島県阿南市）50
第十八話　寅年の水 ……（徳島県阿南市）52
第十九話　大水がくるぞ ……（徳島県阿南市）54
第二十話　堰をめぐる上下流の争い ……（徳島県阿南市）56

第二十一話　亡き父の教え ……（徳島県阿南市）58
第二十二話　地盤沈下の苦しみ ……（徳島県阿南市）60
第二十三話　もどった　おやくっさん ……（徳島県那賀町）62
第二十四話　あの時すぐ逃げていれば ……（徳島県牟岐町）64
第二十五話　ごっついぞ ……（徳島県牟岐町）66
第二十六話　お母ちゃん行けんもん ……（徳島県海陽町）68
第二十七話　はよう逃げ、はよう逃げ ……（徳島県海陽町）70
第二十八話　両親からの言い伝え ……（徳島県海陽町）72
第二十九話　古よりの警鐘「震潮記」 ……（徳島県海陽町）74
第三十話　堤防が吹っ飛んだ ……（高知県室戸市）76
第三十一話　お別れぞね ……（高知県香美市）78
第三十二話　繁藤（しげとう）の豪雨 ……（高知県香美市）80
第三十三話　結いの文化 ……（高知県大川村）82
第三十四話　避難なんてできやせん ……（高知県高知市）84
第三十五話　非常事態宣言 ……（高知県高知市）86
第三十六話　裏山から土石流 ……（高知県いの町）88
第三十七話　寸志夫 ……（高知県土佐市）90
第三十八話　真覚寺（しんかくじ）地震日記 ……（高知県土佐市）92
第三十九話　先人が残してくれた教訓 ……（高知県土佐市）94
第四十話　弟のおかげ ……（高知県土佐市）96
第四十一話　みこしの漂流 ……（高知県須崎市）98
第四十二話　宝永津浪溺死之塚 ……（高知県須崎市）100
第四十三話　長女が津波に奪われた ……（高知県須崎市）102
第四十四話　突然の激流 ……（高知県四万十町）104

第四十五話　念仏堰……（高知県黒潮町）106
第四十六話　阿鼻叫喚の夜の避難……（高知県四万十市）108
第四十七話　燃え上がった火の手……（高知県四万十市）110
第四十八話　おろよ、おろよ……（高知県四万十市）112
第四十九話　再起不能か……（高知県四万十市）114
第五十話　義民・中平宗兵衛……（高知県四万十市）116
第五十一話　救ったのは人のつながり……（高知県土佐清水市）118
第五十二話　駐在さん、駐在さん……（高知県土佐清水市）120
第五十三話　驚天動地の津波高……（高知県宿毛市）122
第五十四話　総曲輪……（高知県宿毛市）124



第五十五話　逆倒竹……（愛媛県大洲市）126
第五十六話　水よけ場……（愛媛県大洲市）128
第五十七話　豫州大洲洪水噺……（愛媛県大洲市）130
第五十八話　人伝えの情報の大切さ……（愛媛県大洲市）132
第五十九話　避難用の舟……（愛媛県大洲市）134
第六十話　瀬戸内海の津波……（愛媛県大洲市）136
第六十一話　大谷川の水除け争い……（愛媛県伊予市）138
第六十二話　義民・窪田兵右衛門……（愛媛県砥部町）140
第六十三話　人名がついた重信川……（愛媛県松山市）142
第六十四話　大川文蔵と石手川改修……（愛媛県松山市）144
第六十五話　菖蒲堰の水争い……（愛媛県東温市）146
第六十六話　大崩壊物語……（愛媛県東温市）148
第六十七話　四度目の成功……（愛媛県西条市）150
第六十八話　災害弱者の避難を的確に……（愛媛県西条市）152



第六十九話　地獄に仏のありがたさ……（愛媛県新居浜市）154
第七十話　真っ暗な中の明かり……（愛媛県新居浜市）156
第七十一話　山向こうの水をこちらに……（愛媛県四国中央市）158
第七十二話　治山治水が大事……（香川県観音寺市）160
第七十三話　土下座の説得……（香川県観音寺市）162
第七十四話　土砂に埋まった牛……（香川県まんのう町）164
第七十五話　四国の水がめ……（香川県綾川町）166
第七十六話　庄屋・久保太郎右衛門……（香川県綾川町）168
第七十七話　ひょうげまつり……（香川県高松市）170
第七十八話　土びん水……（香川県高松市）172
第七十九話　番水と香箱……（香川県高松市）174
第八十話　消防だけでは太刀打ちできない……（香川県高松市）176
第八十一話　八栗の峯くずれ……（香川県高松市）178
第八十二話　小豆島の土砂災害……（香川県小豆島町）180
第八十三話　おそろしかった3日間……（香川県小豆島町）182
第八十四話　真新しい毛布……（香川県小豆島町）184
第八十五話　大小二つのため池……（香川県さぬき市）186
第八十六話　まさか三木町に……（香川県三木町）188
第八十七話　電信柱に救われる……（香川県さぬき市）190
第八十八話　真鈴の水……（香川県まんのう町）192
3　四国の自然災害……194
4　調べてみよう……196
あとがき……202

1　ようこそ四国防災八十八話へ
―この本の使い方―

この本には、四国に伝わる災害や防災の言い伝えや体験談七〇六話の中から、代表的な八十八話が収録されています。

八十八話は、遍路道をたどるように徳島から高知、愛媛、香川の順に並んでいます。それぞれの話には、県を示すアイコンと災害の種類（水害、土砂災害、地震・津波、高潮、渇水）を示すアイコン、および時代を示すインデックスが付いています。パラパラめくってみると、アイコンやインデックスの現れ方にリズムがみつかるかもしれません。なぜ、そんなリズムが生まれるのか考えてみましょう。

また、その言い伝えや体験談が生まれた背景やアクセスの方法を載せています。アクセスには、緯度経度を示しています。国土地理院のWebサイトの電子国土（http://portal.cyberjapan.jp/denshi/index3.html）で地図を検索することができます。実際に現地に行ってみるのも、言い伝えや体験談を理解するのに役立ちます。

言い伝えや体験談、背景を読んで、災害から身を守り、災害に遭わないためにはどうすればいいのか、考えてみましょう。左上に最も大切だと思う教訓を参考として示しています。一つの言い伝えや体験談には、多くの教訓が含まれている場合があります。できるだけ多くの教訓を読み取ってください。友達と話しあってみると、気が付かなかった教訓がみつかるかもしれません。

「四国防災八十八話マップ」をみると、自分の住んでいる地域の周りでどんな災害が起きているかを知ることができます。まず、自分の住んでいる地域の近くの言い伝えや体験談を調べてみるのもいいでしょう。また、どの地域でどんな災害が多いかを知ることができます。なぜ、その災害が多いのか調べてみるのもおもしろいでしょう。「3　四国の自然災害」が参考になります。

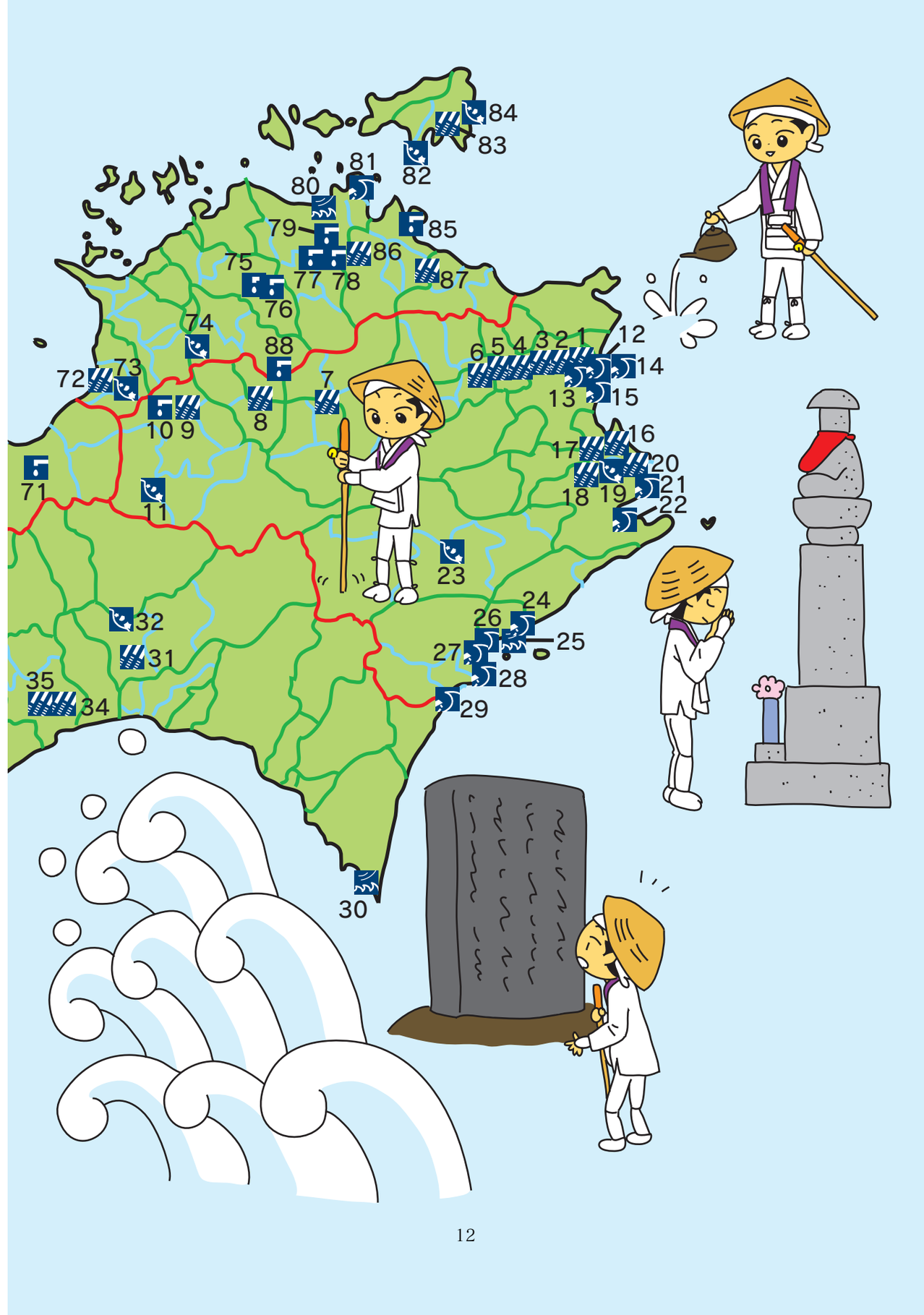
「四国防災八十八話年表」を見ると、時代別、災害の種類別に八十八話が整理されています。また、県ごとに色分けしています。災害の種類別に調べたり、時代別に調べたりするときの参考にしてください。

この本に収録できなかった言い伝えや体験談が、他にもたくさんあります。自分の住んでいる地域の言い伝えや体験談を探してみましょう。「4　調べてみよう」を参考にしてください。

愛媛大学四国防災八十八話編集委員会
委員長　鳥　居　謙　一

四国防災八十八話マップ

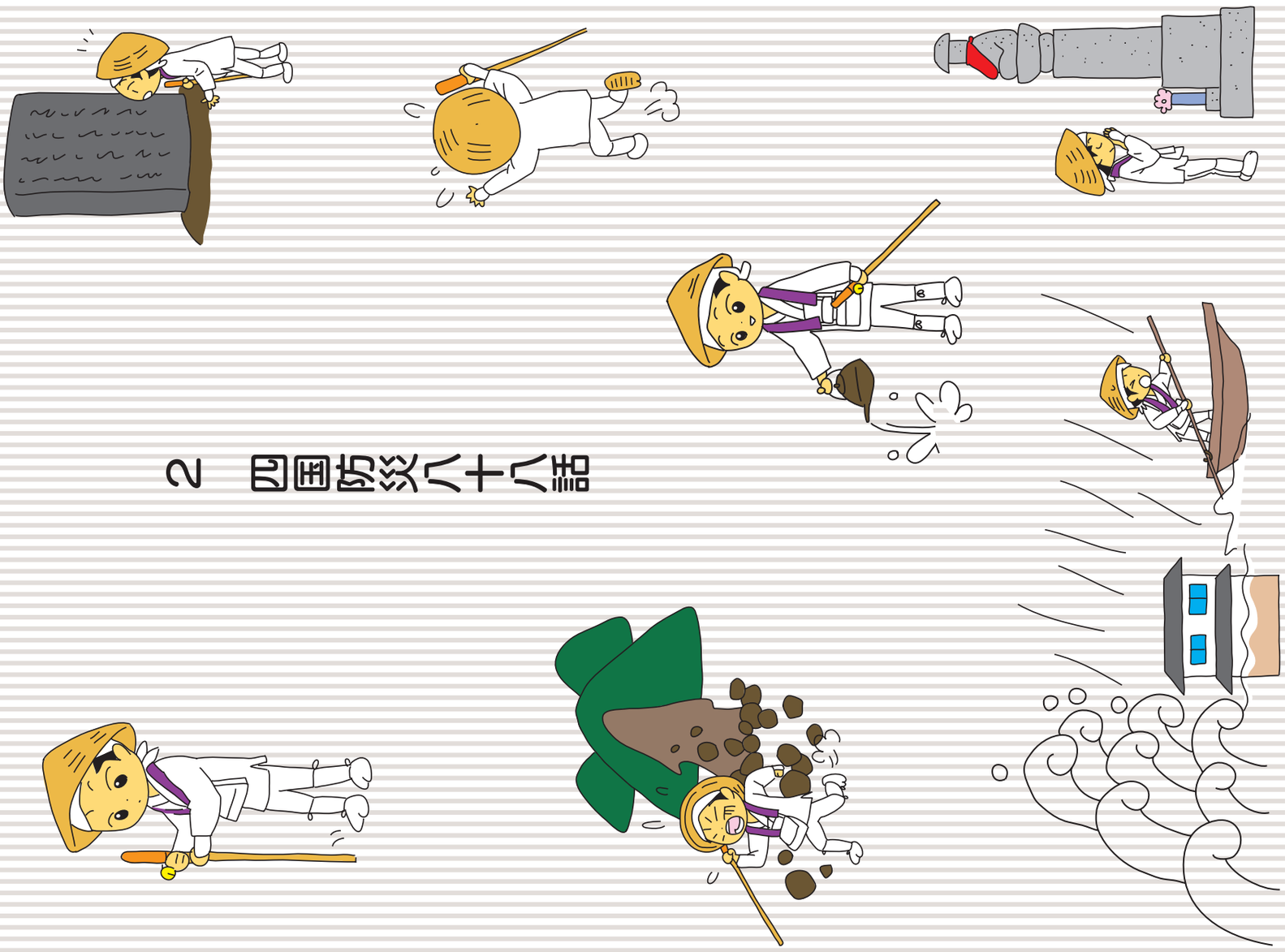
- 水害
- 土砂災害
- 地震・津波
- 高潮
- 渇水



四国防災八十八話　年表

	江戸				戦国以前				昭和40年代以降				昭和30年代以前				明治・大正			
	香川	愛媛	高知	徳島	香川	愛媛	高知	徳島	香川	愛媛	高知	徳島	香川	愛媛	高知	徳島	香川	愛媛	高知	徳島
水害		56 57 61 63 64	37 50 54	1 2 3 4 6 7 16 17 18					72 83 86 87	58	31 34 35 51 52			59	46	9 20			48	5 8
土砂災害		66							73 74 82 84	68 69	32 33 36	11						70	44	19 23
地震・津波	81		38 41 42 53	12 29				14						60	39 40 43 47 49	13 15 21 22 24 26 27 28				
高潮									80		30			67		25				
渇水	76 77 79 85	55 62 71	45		88				75				78					65		10

※年表内の数字は八十八話の番号を示しています。



2　因幡坂くすくす話

吉野川下流域の高地蔵（徳島県吉野川下流域）

吉野川下流域のかつての氾濫原では、俗に「高地蔵」さんと呼ばれている台座の高いお地蔵さんが堤防の近くや川岸のあちこちに多く見られます。この高地蔵は、先人たちの「洪水でお地蔵さんが水に浸かったり流されたりしては申し訳ない」という信仰心から、つくられたものと言われています。そのためか記録的大洪水に見舞われた江戸後期から明治にかけて建立されたものが多くあります。

高地蔵の台座は、土地が低く、浸水が大きかったと考えられる場所では高くなっています。言い換えると、高地蔵が高ければ高いほど、その地区の水害は大きかったことになります。台座高が一メートル以上の高地蔵が約一九〇ヶ所確認されています。このうち、最も高いものは徳島市国府町東黒田の「うつむき地蔵」で、全高四・一九メートル、台座高約三メートルもあります。このお地蔵さんが見おろしている辺りは、吉野川と飯尾川にはさまれたかつての洪水常襲地帯であり、その高さから当時の氾濫水位がいかに高かったかがわかります。

お地蔵さんがある場所を地図上に記入してみると、吉野川下流域、しかも右岸（南岸）に多いことがわかります。これは下流域ほど洪水時の水位が高く、右岸（南岸）のほうが左岸（北岸）よりも地形的に低いため洪水常襲地帯になっていたことを反映したものと考えられます。

しかし、高地蔵が伝えているのは、それだけではありません。身近な高地蔵に供花や供物を捧げ、祀ることによって、毎日の暮らしの中で、いつも洪水の恐ろしさを忘れることなく、水防への心構えをしていたのです。高地蔵は、四国三郎・吉野川と闘い、共に生きた先人たちが水の危険性を伝承してきた文化財なのです。

▲高地蔵探訪ガイドブックの表紙
（http：//www.toku-milt.go.jp/river/river_index.html）

◀東高原の南の地蔵

▲東中富の龍池の地蔵

▲国府日開の法光寺前の地蔵

背　景

吉野川の下流域では、堤防の近くや道の四つ辻などに、台座の高いお地蔵さんが数多くあります。吉野川下流域は、土地が低く、たびたび洪水に見舞われていたため、人々は、お地蔵さんが水に浸かったり流されたりしては申し訳ないと思い台座を高くしたのです。このため、高地蔵の台座の高さは、その地区の洪水の大きさを示しています。また、これは洪水の恐ろしさを後世に伝えようとする先人からのメッセージでもあります。

アクセス　うつむき地蔵

- 名田橋南詰より西南西に直線距離約1.5km
- 徳島市国府町東黒田
- 緯度経度　北緯34度06分01秒，東経134度28分58秒

蔵珠院の洪水痕跡（徳島県徳島市）

慶応二年（一八六六）に吉野川が起こした洪水は歴史上最大の洪水で、幕末の動乱期に起きた前代未聞の大水害でした。

七月末から降り始めた雨は、次第に大雨となって、八月六日の夜まで降りしきり、つづく七日の夕方には古来まれな大水となりました。連日連夜の豪雨により吉野川の水量は膨れ上がり、第十の土手などが切れ、土地の高いところでも床上二、三尺（約六〇～九〇センチメートル）、低いところでは天井に達するほどの浸水となりました。田畑は荒らされ、家や牛馬が多数流され、避難民は舟に乗り移りましたが、四方まるで海のようになり生死のほども知れず、ところどころに救助を求める声が哀れであったと記録されています。

この時の洪水の痕跡が、今でも蔵珠院に残されています。それは茶室と板戸に残されたシミで、それを見ると床上二尺（約六〇センチメートル）まで浸水していたことがわかります。蔵珠院が建つ土地は周囲の畑よりも高く、その分を計算すると浸水深は三メートルにもなります。

蔵珠院の過去帳には、この洪水により阿波の国中で三万七、〇二〇人の男女や牛馬などが溺水。檀家のうち三二人が溺死したことが記録されています。

▲蔵珠院の茶室に残された洪水痕跡
（四国三郎物語より引用）

▲「寅の水」を記録した過去帳　蔵珠院所蔵
（四国三郎物語より引用）

背　景

幕末の慶応二年（1866）に、阿波は天正13年（1586）の蜂須賀氏入国以来の大水と言われるほどの記録的な大雨に見舞われました。吉野川にほど近い徳島市国府町芝原の蔵珠院には、慶応二年の寅年の水の洪水痕跡とその凄まじさを伝えた過去帳が残されています。また、この洪水の恐ろしさを後世に伝えるため、平成７年(1995)には山門前に当時の水位を示す標柱が建てられました。

アクセス　蔵 珠 院

- 第十堰南岸より南へ直線距離約1.5km
- 徳島市国府町芝原字宮ノ本３
- 緯度経度　北緯34度05分33秒，東経134度27分47秒

第十堰が造られる少し前の話です。村の世話役たちが、庄屋さんを囲んで、どうしたら頑丈な堤がつくれるかを相談していました。それまで輪の中で、腕組みをしたまま考え込んでいた庄屋さんが、こういいました。「もう、こうなったら、人柱を川に入れるよりしようがない」「誰を人柱にするんな？」「明日の朝、いちばんに通った者を、人柱にしよう」庄屋さんはきっぱりいいました。こうして、川に人柱を入れて、堤を作りなおすことが決まりました。

その夜、庄屋さんの妻は、庄屋さんから次のようにうちあけられました。

「人柱には、私がなる。私がなれば、みんなのためになると思うとったんじゃ。明日の朝いちばんに出かけるけん、白装束を用意してくれ。どうぞ、あとのことはくれぐれもよろしく頼む」

ところが、この二人の話を聞くとはなしに聞いていた人がいました。龍蔵（りゅうぞう）です。龍蔵は、日頃から職も持たず、庄屋さんの家から食べ物を分けてもらって暮らしていました。「えらいことになったもんじゃ。庄屋はんが人柱になるんやって。あない偉い人を死なせたらあかん。わしが身代わりになる」

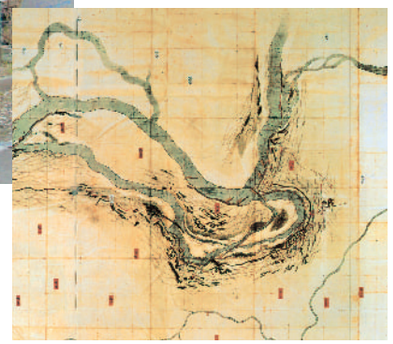
翌朝、村人たちが息をひそめて待っていると、白装束の遍路姿の男がやってきました。村人たちはいっせいにその男に飛びかかると、そのままかつぎ上げて、その男を川に投げ込みました。

すると、水音に混じって、男の声が聞こえてきました。

「庄屋はんによろしゅういうといて。龍蔵は喜んで身代わりになったちゅうて」

ほどなくして、白装束に身を包んだ庄屋さんがやってきました。「龍蔵、礼を申すぞ。おまえの命はけっして無駄にはせん」こうしてできた堤防が「龍蔵堤（りゅうぞうてい）」です。村人は近くに石の祠（ほこら）を建てて龍蔵をまつりました。この祠を「川贄（かわにえ）さん」と呼んでいます。

▲龍蔵堤



▲「村々沼川堰留之図」の一部
（国立国文学研究資料館所蔵）

背　景

吉野川の第十堰（だいじゅうぜき）の南側、徳島市国府町（こくふちょう）に芝原（しばはら）というところがあります。第十堰が造られる少し前、この辺りには一面に藍畑（あいばたけ）がひろがり、そこに住む人たちは、丹精込めて藍を作っていました。しかし、毎年のように吉野川が氾濫（はんらん）するので、家や牛馬は流され、せっかく耕した田畑も台なしになりました。そこで村の人々は人柱を立てて、堤を守ることを考えました。昔から人柱を立てると、川の怒りを鎮（しず）めることができると考えられていたのです。これは、庄屋さんへの恩返しのために、人柱になった龍蔵さんの話です。

アクセス　祠（ほこら）と龍蔵堤

- 第十堰南岸より南へ直線距離約１km
- 徳島市国府町芝原　竜王団地北東端
- 緯度経度　北緯34度05分52秒，東経134度27分29秒

印石（徳島県石井町）

印石とは、堤防の高さを記した石のことです。堤防の高さをめぐる川の両岸の対立を静めるために設置されたもので、高さ一メートル程の所に線が一本刻まれています。

文化年間（一八〇四～一八一八）に高畑村（現石井町藍畑付近）本村地区の人々は、吉野川とその支流である新宮川（現神宮入江川）の洪水による田畑の冠水を免れるため新しく堤防を築きたいと藩に願い出ました。しかし、隣の中州地区の人々から異議を申し立てられ、およそ四〇年間も堤防の築造とその高さをめぐって紛糾が続きました。

嘉永四年（一八五一）に郡代は本村・中州両地区の人々の言い分を聞き、双方納得の上で中州地区の土地の高さと同じ高さ約三尺余（約一メートル）の堤防を築くことで決着し、新しい堤防が完成しました。ところが、嘉永六年（一八五三）、本村地区の人々が中州地区に断りもなく、完成した堤防にさらに土を盛ったため、争いが発生しました。郡代は両者の話を聞いた上で、本村の人々に土を除去するように命じました。その上で、今後争いが起こらないようにと、石柱の上部に堤防の高さを示す線と「印石」という文字を刻み、その石柱を堤防の各所に埋めこみました。

このときの経緯を記した石碑が皇太神宮という小さな社の横にありますが、それには二一個の印石を堤防の各所に埋設したと書かれています。そのうちの一つが平成八年（一九九六）に完全な形で発見され、現在石井町藍畑の産神社境内に設置されています。

▲産神社の印石

背景

藩政期には、堤を築く際には、まず藩に願いを出して、村同士で話し合いをしなければなりませんでした。しかし、村同士の話し合いは、利害が対立したままでまとまらない場合が多々ありました。このため、無断で堤を築いたり、誰も見ていない隙を見て堤に土を盛ったり、反対にそれを削ったりという手段に訴えた結果、村ぐるみの紛争に発展することもありました。この争いが長引くと藩が調停に乗り出し、対立する村々の間で一定の取り決めをして決着をはかることもありました。

アクセス　産神社

- 六条大橋南詰より南へ約700m
- 石井町藍畑
- 緯度経度　北緯34度05分47秒，東経134度26分15秒

吉野川の近代の改修工事が始まった明治一八年（一八八五）から三年後にある出来事が起こりました。

明治二一年七月三一日、それまでの長雨の影響で吉野川は大洪水となり、石井町西覚円の堤防が決壊し、濁流が多くの民家を押し流しました。徳島県が吉野川の堤防工事のために事務所として使っていた家には、大きなモチの木が植えられていました。人々は濁流されまいとそのモチの木によじ登り、助けを求めました。その様子はまるでモチの木に人々が「鈴なり」になっているかのようであったと伝えられています。しかし、水の勢いはますます激しくなり、さらにモチの木に上流から流れてきた民家が引っ掛かかり、モチの木は根元から倒れてしまいました。一瞬にして、木も人も濁流に押し流されてしまいました。

洪水の後、地元の住民は、この大惨害は県による堤防工事が遅れたことと、内務省の低水工事（沈床工）が原因であるとして、内務省の改修工事の廃止を県に働きかけました。（注：航行する舟や筏が沈床工に接触して、転覆したり、沈没する事故が相次いで起こるようになったため、沈床工は舟筏を沈める恐ろしいものという誤った噂が広まっていたため、沈床工が洪水の原因とされた。）その結果、低水工事はわずか四年で中止されました。この出来事は、今でも「覚円騒動」として話が伝えられています。

現在、かつての破堤の場所には、大きく丈夫な堤防が築かれていて、かつての惨事を思い起こさせる痕跡は見あたりません。ただ、水害にあわないようにとの思いから建てられた愛宕地蔵だけが、かつてモチの木のあったあたりを見守っています。

▲愛宕地蔵

▲モチの木
（徳島市国府の秋田邸）

背　景

石井町西覚円の愛宕地蔵は、覚円騒動の証人です。明治時代の吉野川改修工事は、明治18年（1885）に西覚円から着手されました。西覚円の堤防が９割方完成していた明治21年（1888）７月31日に洪水が発生しました。この結果、堤防が369間（約664m）にわたり決壊し、人家78戸が押し流され、26名が亡くなりました。この水害を契機に覚円騒動と呼ばれる出来事が起こりました。亡くなった方を供養するために建立されたのが愛宕地蔵です。

アクセス　愛宕地蔵

- 高瀬橋南詰より南西へ直線距離約200m
- 石井町藍畑字西覚円
- 緯度経度　北緯34度05分49秒，東経134度25分25秒

割腹した稲垣監物と監物堤（徳島県吉野川市）

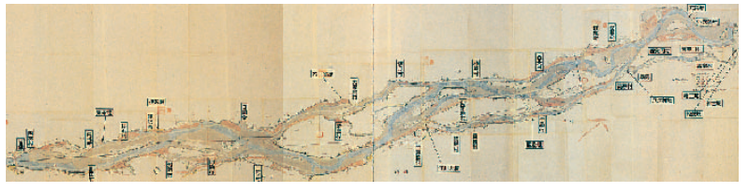
宝暦年間（一七五一～一七六三）に吉野川が氾濫し、大洪水により岸之上の堤防が崩れてしまいました。少しでも早く堤防を直さないと、またいつ吉野川が氾濫するかわかりません。しかし、その頃は農民たちが勝手に堤防を築いたり直したりはできませんでした。どんなに小さい堤防でも藩の許可が必要だったからです。

牛島村（現在の吉野川市鴨島町牛島付近）の農民たちが困っているのを見て、藩に、堤防を補強したいと願い出た人がいました。稲垣監物という人です。監物は、堤防を直して、水を南の向麻山の麓の方へ放流すれば、牛島村へ水が侵入するのを防げると考えたのです。しかし、藩からの許可はなかなか出ませんでした。その上困ったことに、この監物の計画に対して、向麻山の麓の上浦地区の村人が反対したのです。たしかに、よその村にできた堤防のせいで、自分たちの村に水が押し寄せてきてはたまったものではありません。藩からは許しが出ず、よその村からは反対される。それでも、牛島村は守らなければならない。監物はどんなに悩んだことでしょう。

ある夜ひそかに、村の農民をすべて呼び出すと、一夜のうちに堤防を築いてしまいました。村人たちの喜ぶ姿を見て、監物はほっとしましたが、一緒には喜べませんでした。堤防が完成した朝早く、監物は堤の上にのぼると、そこで切腹しました。「村人たちに罪はない。私の一存でやったこと」という思いから、責任を一身に背負って死んだのでした。

完成した堤防は、土を掻き寄せたもので、高さ二・三メートル、延長九〇メートルほどでした。この堤防は、稲垣監物の名をとって、監物堤と言われるようになりました。

◀監物堤があった牛島地区
（○印は稲垣神社）



▲吉野川絵図の一部
（徳島県立図書館所蔵　四国三郎物語より引用）

背　景

徳島ではよく知られる吉野川遊園地のある鴨島のまちには、吉野川、江川、飯尾川という三つの川が西から東に流れています。江戸時代には、吉野川がひとたび氾濫すると、この三つの川が一つの川のように流れていました。牛島村（現在の吉野川市鴨島町牛島付近）は洪水の時にはたびたび被害にあっていたところです。そこで村人たちは、岸之上というところに堤を築いて、吉野川の氾濫水の一部を飯尾川に放流し、被害を最小限にとどめていました。この話は、洪水から住民を守るために築堤に命を賭けた「稲垣監物」の行動を描いたものです。

アクセス　稲垣神社

- JR牛島駅より西南西へ直線距離約500m
- 吉野川市鴨島町牛島字中桑上473
- 緯度経度　北緯34度04分28秒，東経134度23分33秒

三王神社（徳島県つるぎ町）

私財と命を投げ出した先人の苦労を忘れぬこと

貞光の代官原喜右衛門は、吉野川の氾濫から住民を救うことを決意し、底幅八間（一間は約一・八メートル）、天幅三間、高さ二間半、長さ二百八十八間の堤防を築造する工事にとりかかりました。明暦年間（一六五五～一六五七）のことです。

しかし、着手してみると予期せぬ困難が続出しました。難工事のため仕事を捨てて逃げる人夫が多くなりました。また、予定以上に工費がかさみ、その金策もつかなくなりました。このため、代官は私財のすべてを投げ出し、しばらく工事は順調に進みましたが、その金も底をついてしまいました。ついには工事の完成をあせって近辺の村々にお触れを出し、連日農民を無償で工事にあたらせました。苦しさに耐えかねた農民はその困苦を藩主に訴え、結局、代官は役所を追われる身となりました。

役所を追われた原喜右衛門は、西崎山の平らな石の上に座して眼下に流れる吉野川に目をやりました。すみきった水、まさに完成に近づいている工事現場も一望の下にあります。無量の感慨をこめて静かに用意した九寸五分（三〇センチメートル弱）の短刀を右手に左の脇腹につき立て一文字に引きました。供をしてきた二人の家来も追腹（家臣が主君の死のあとを追って切腹すること）を切りました。

今日では、三人は堤防建設により貞光の発展を築いた三人の義人として、吉野川を見下ろす三王神社に祀られています。

▲三王の碑

三王堤防の標識▶

背　景

昔、吉野川上流の貞光付近の吉野川の流れは、今とはかなり違っていました。貞光辺りでは、吉野川は西崎から二手に分かれ、一方は南を流れ、もう一方は北を流れ、江の脇で合流していましたので、今の貞光のまちの北半分は水の底にありました。このため、雨が降り洪水が発生すると、濁流が沿岸を洗い、住民の被害は甚大だったと言われています。この話は、住民のために築堤を始めたものの、工事に関して住民に過重な労役を課したために訴えられて自害した代官の話です。

アクセス　三王神社

- 美馬橋の南詰からJR貞光駅方向に100m程行き、右手の山への小道を100m程登る
- つるぎ町貞光字西山
- 緯度経度　北緯34度02分28秒，東経134度03分14秒

水防竹林は、三好市池田町付近から下流吉野川市川島町にかけての吉野川中流域に多く残っています。その規模は日本一であると言われています。かつて吉野川の両岸には、幅広く大規模な竹林が万里の長城のように連なっており、戦前、徳島本線は竹の美林に沿って走る鉄道として有名で、その美しさは日本一と称されていました。

藩政時代には、財政的な理由などから吉野川の洪水を制御できる規模の堤防を築くことができませんでした。このため、徳島藩は沿川部や堤防に竹藪（たけやぶ）の植え付けを奨励（しょうれい）しました。明治三年（一八七〇）の徳島藩「郡中制法」にも、「堤防川岸などへは柳呉竹（やなぎごろく）などを植え、出水の節は囲に相なるべく常々心配りを遂ぐべきこと」と定め、竹林等の造成、保護につとめていました。現在の見事な美林の三加茂（みかも）（現在は東みよし町）の竹林は、明治三二年（一八九九）の洪水によって村が大きな被害をこうむったさい、三庄村（現在の東みよし町三加茂）の村長が村の有志から寄付金をつのって、延長八二〇メートル、幅一八メートルにわたって植林したのが始まりです。成長し地下茎のからんだ竹林は水害防備林と呼ばれ、洪水による浸食から川岸や堤防を守りました。また、洪水の水勢を弱め、岩や小石が耕作地に流入したり、家屋が流失したりすることを防ぐ役割を果たしました。

かつて水防竹林の竹材は物干し竿、釣り竿などにも利用されました。また、竹尺や和傘（わがさ）の原料となり、明治から昭和にかけて竹林を利用した地場産業の発達をもたらしました。今日では竹の需要が少なくなり放置された竹林が多くなっていますが、かつて川沿いの人々は、洪水被害を緩和するとともに、その利用により収益をあげることができる水防竹林を大切に育み、守ってきました。

水防竹林は吉野川を彩る風物詩であり、洪水と闘う流域住民の知恵でもあります。

▲現在の吉野川の水防竹林（東みよし町三加茂）

背　景

暴れ川四国三郎の異名をもつ吉野川は、藩政時代には財政的な理由などから堤防で守ることが困難であったため、吉野川沿いに竹林の植え付けが奨励されました。吉野川の堤防が整備されるにつれて、かつて緑の堤防のように連なっていた水防竹林は下流部ではその役割を終え、少なくなってきています。しかし、今日でも中流部では竹林が連なり、吉野川の洪水から地域を守るために役立っています。この話は、築堤（ちくてい）が許可してもらえなかった時代に、次善の策として緑の堤防と言われる竹林の植付けを行った先人の知恵を描いたものです。

アクセス　西庄地区水防竹林記念碑

- JR三加茂駅より南西へ直線距離約１km
- 東みよし町西庄山田69　八柱神社境内
- 緯度経度　北緯34度02分09秒，東経133度56分23秒

三好市池田町シマ地区は、昭和五〇年（一九七五）に池田ダムが完成するまでは、洪水のたびごとに頻繁（ひんぱん）に浸水していました。川の水が急に増して来て、半鐘（はんしょう）が打ち鳴らされると、各家ごとに荷役を始めました。まず下の物から取りかかれと、石炭箱などを並べ、畳を上に積み重ね、履物など下の物全部その上へ上げます。そして、雨戸を締（し）め「ツッカイ」をします。家に押し寄せてきた水の水圧で雨戸が弓のようになり、はずれるのを防ぐためです。雨戸がはずれると、家財道具が一瞬にして押し流されます。半鐘は夏には四、五回耳にしました。

昭和二九年（一九五四）九月の大水の時は、水位が床上一メートル以上もあったように記憶しています。階段三段目から小便をたれ流したことを思い出します。このような大水は、出水も早いが、引くのも早いのです。引きかけたら家の中に水がある内に、流れてきた泥・雑草などを押し流し、洗い流します。これを忘れると、後で大変面倒になり、手間がかかるのです。出水時には、親戚や知人が馳せ参じ一生懸命手伝ってくれますが、いったん家の中の水が引くと、家族だけで後始末をせねばならず、とても重労働でした。

壁は流され、竹で組んだ骨組みばかりで、夜ともなれば隣から隣へと見透しで、提灯（ちょうちん）やローソクの光で後かたづけするのは淋しく、哀れでした。子供心にも天気が続けばと、そればかり祈っていました。不潔な泥水にびしょ濡れになった物ばかりで、不衛生この上ありません。町役場の配慮で消毒が行われ、平常どおりになるのに一ヶ月ぐらいはかかったと思います。

▲島づかり（無堤の吉野川上流域）

▲昭和29年洪水

背　景

最近まで洪水のたびごとに水に浸かっていた吉野川上流地域では、浸水時の知恵が伝えられています。例えば、三好市池田町シマ地区も地盤が低い地域であり、昭和50年（1975）に池田ダムが完成するまでは頻繁に浸水していました。このため、地域の人々は、浸水した時に被害を軽減するよう対応する術を身につけていました。今日では浸水時の知恵が忘れられがちですが、シマ地区の古老の話は、浸水への備えや心構えを教えています。

アクセス　シマ地区（県立三好病院周辺）

- JR池田駅より東へ約1.5km
- 三好市池田町シマ815
- 緯度経度　北緯34度01分42秒，東経133度49分04秒

ひでり続きでほこり立つ（徳島県三好市）

「月夜にひばりが足を焼く」。ひでりが続くと、夜、木々の枝にとまったひばりが足を焼くほどに地表が熱く熱せられている様子が表現されています。

昔、三好市、阿波市などでは、吉野川沿いにありながらも、田畑が河岸段丘の上にあるために、平地の底を流れる吉野川の豊かな水を利用することができませんでした。このため、ひでりが続くと、干ばつに苦しめられてきました。資金や技術が十分ではない時代に、人々ができることは神様にお願いすることでした。

旧池田町では農民が八幡神社に集まって、雨乞いの祈とうや踊りをしました。大きな「はんぼう」（底の浅い大きな飯びつ）に水を満たし、そのまわりに、みんなで、蓑笠（みのかさ）姿で集まり、神官がお祈りの神事をした後、はんぼうの水を笹の葉に付けては散らしながら、歌い踊り回りました。水がなくなると、うちわを持った者と入れ替わり、前後にふりながら、炎天下に何時間も踊り続けたものです。

その時、みんなで歌を歌いました。その一節に「六月やひでり続きで、ほこり立つ」という句があります。

背　景

明治から大正にかけて、三好市では夏がくると毎年のように干ばつが続き、三年に一回ぐらいは、とうもろこし・たかきび・あわ・こきび等が畑で黄色くなり、田は亀の甲のようにひび割れて、大きな被害を受けていました。この頃は、灌漑用水（かんがいようすい）として、馬路川や馬谷川から水をとっていましたが、夏になると水量が少なくなり、高台などでは、飲料水の井戸や湧水も枯れてしまい、手のほどこしようがありませんでした。このため、農民は雨乞いをして、神様に雨降りの祈願をしました。

アクセス　八幡神社

- JR阿波池田駅より西南西へ直線距離約２km
- 三好市池田町白地
- 緯度経度　北緯34度01分01秒，東経133度46分48秒

危機一髪（徳島県三好市）

昭和六二年（一九八七）に国道三二号で土石流に遭遇した人の体験談です。

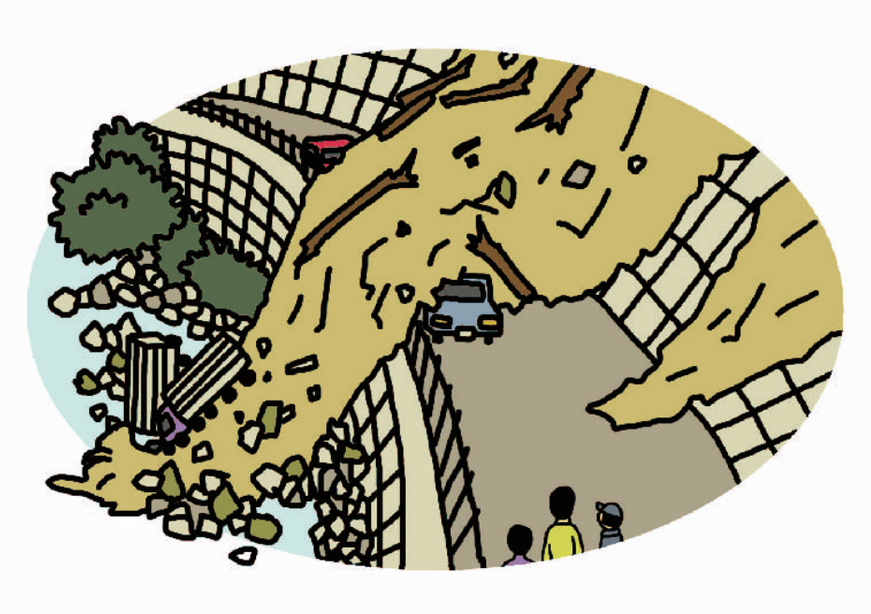
七月一四日午後九時頃、三好市山城町の国道三二号の現場付近一帯は、梅雨前線による集中豪雨のため土砂降りでした。

高知から高松に向かって走行中のライトバンが、豪雨により山側斜面から流出していた土砂にタイヤを取られて脱出できなくなりました。同乗者が車外に出て後続車等に応援を依頼し、これに応じた後続のトラックと対向車線を走行していた乗用車及びトラックが路上に停車し、運転者や同乗者が救出応援に向かい、車両を押そうとしていました。

その時、乗用車の運転者は、路面を流れていた流水の色が赤く変わり、斜面の上部でバリバリという木々が裂けるような音が聞こえたため、とっさに危険を感じ、全員に池田側に逃げるように指示をしました。すると、その直後に山側からの大量の土石流が上り線側のトラックを直撃し、トラックは吉野川に転落し、ライトバンは運転者が車内に残されたまま土砂流により路面上を滑走し、川側のガードレールで止まり、運転者は脱出しました。

車両四台の搭乗者（計八人）は、車両を現場に残したまま現場を離れ、山城町駐在所に災害発生を通報しました。その後、次の土石流が発生し、下り線に停車していた乗用車とトラックを直撃して、乗用車が埋まり、トラックは吉野川に転落しました。

流水の色の変化と木々が裂けるような音に危険を察知できたことが、車両四台が被災した大災害にもかかわらず人身被害が皆無という奇跡的な結果をもたらしたのです。



背　景

昭和62年（1987）７月、徳島県三好市山城町の国道32号で土石流が発生し、車両４台が被災しました。この災害は、トラック２台が土石流の直撃を受けて吉野川に転落、乗用車１台は路上に埋まり大破し、ライトバン１台は路上を流され川側のガードレールで止まり吉野川への転落は免れるという災害でした。しかし、車両運転者等の適切な避難行動により、奇跡的に人身被害は発生しませんでした。

アクセス　災害現場付近（国道32号の距離標81/8）

- JR大歩危駅より南南東へ直線距離約３km
- 三好市山城町下名
- 緯度経度　北緯33度51分13秒，東経133度47分14秒

百度石に刻まれた教え（徳島県徳島市）

南海地震は、江戸時代以降でも、慶長九年（一六〇五）、宝永四年（一七〇七）、嘉永七年（一八五四）、昭和二一年（一九四六）というように、周期的に起こってきました。この南海地震の周期性を後世に伝えるために、人々はさまざまな工夫をしてきました。

徳島市の蛭子神社では、百度石に南海地震の周期性が記されています。今日では石の劣化がひどく、判読できる碑文は限られていますが、以下のような内容が記されていました。

……嘉永七寅年十一月五日、大地震が起こりました。人々はうろたえて、木や竹の根が絡む藪の中に駆け込み、津波が来ると騒いでいました。舟に乗って流され、危ういところを助かる者もいれば、舟が転覆して命を失う者もありました。舟に乗ってはいけない。家が潰れて、こたつやかまどから出火して、多くの家や蔵が焼けてしまいました。こういう時には心を鎮め、火の元に気を付けることが大切です。ももとせ（百年）しないうちに、このような地震・津波がやってくると言われています。……

「ももとせ（百年）を経ぬほどにはかようの震濤有り」と刻まれた碑文は、南海地震の周期的な発生を予測し、警鐘を鳴らしています。まさしく嘉永七年（一八五四）から百年経たない昭和二一年（一九四六）に南海地震が起こり、昔からの言い伝えを尊重することの重要性を証明しています。

▲蛭子神社の百度石

▲百度石の裏面に刻まれた碑文（拓本）

背景

徳島市南沖洲の蛭子神社境内に、百度石があります。百度石は、子どもが病気になった時や家族に不幸が訪れた時などに、願いがかなうようにお百度を踏む（100回お参りをする）際の起点となる石です。多くの人が何度も何度も目にする蛭子神社の百度石に、安政南海地震のことが記されていました。石の風化がひどく、今では判読できる碑文は限られていますが、「徳島市史」や「蛭子神社記」、「阿波における地震の研究」から碑文の内容が分かります。後世の人に津波の教訓を伝えたいという思いが伝わってきます。

アクセス　蛭子神社

- JR徳島駅より東へ直線距離約3.5km
- 徳島市南沖洲1-2
- 緯度経度　北緯34度03分59秒，東経134度35分05秒

目の当たりにした凄さ（徳島県徳島市）

昭和二一年（一九四六）の南海地震の時に、河川に浸入した津波の速さを徳島の津田で体験した人の話です。

私は、当時徳島の津田で製材所を営んでいました。明け方、大きな地震がありました。とっさに「津波が来る」と思った私は、両親と妹たちをいそいで裏山へ避難させました。しかし、私はどうしても川につないである材木が心配でなりませんでした。材木の様子を確かめるために川へ出かけました。その時私は津波のすさまじさを目の当たりにすることになりました。

川の水はザーッとものすごい勢いで海側の津田の防波堤の方まで引きました。普段なら五〇メートル以上もある川幅が、水が引いたせいで帯のようにわずか一間（約一・八メートル）に満たない川幅になりました。その後、引いた波はものすごい速さと勢いで川を逆流し始めました。その水の速さといったら、その頃の私が全力で走っても到底及ばない速さでした。

川につないであった材木は波にのまれてしまいました。とうとう津田橋の橋桁（はしげた）に材木が轟音（ごうおん）とともに勢いよくぶつかり、その凄（すさまじ）さに思わずウォッーと唸（うな）ってしまいました。その後、津田に押し波、引き波が一〇回程度押し寄せているうちに、ついにつないであった綱は切れてしまい、その材木はバラバラになって点々と散らばってしまいました。

私は、材木を見届けると、家族を避難させた裏山に戻りました。そこには心配して私の帰りを待っていた家族がいました。私は、恐怖のあまり震（ふる）えが止まりませんでした。

背　景

津田は園瀬川と勝浦川に挟まれた中州にあたります。埋め立てが進んでいますが、いまでも木材工業団地になっており、前面の海域は貯木（ちょぼく）場になっています。津田山（標高78m）の津田八幡神社からは貯木場を一望することができます。

アクセス　大野大橋（園瀬川河口）

- JR徳島駅より南へ直線距離約３km
- 徳島市西新浜町
- 緯度経度　北緯34度02分42秒，東経134度33分19秒

お亀千軒（徳島県徳島市）

昔、徳島の津田から一里（約四キロメートル）ほど沖に亀島という小島が浮かんでいました。島にはたくさんの漁師が住み、漁家が千軒あるということから、「お亀千軒」と呼ばれていました。島の中ほどに大きな洞穴があり、そこには神様をお祀りしていました。穴の前には銅で作った鹿が置かれていて、狛犬のように神様の場所を守っていました。

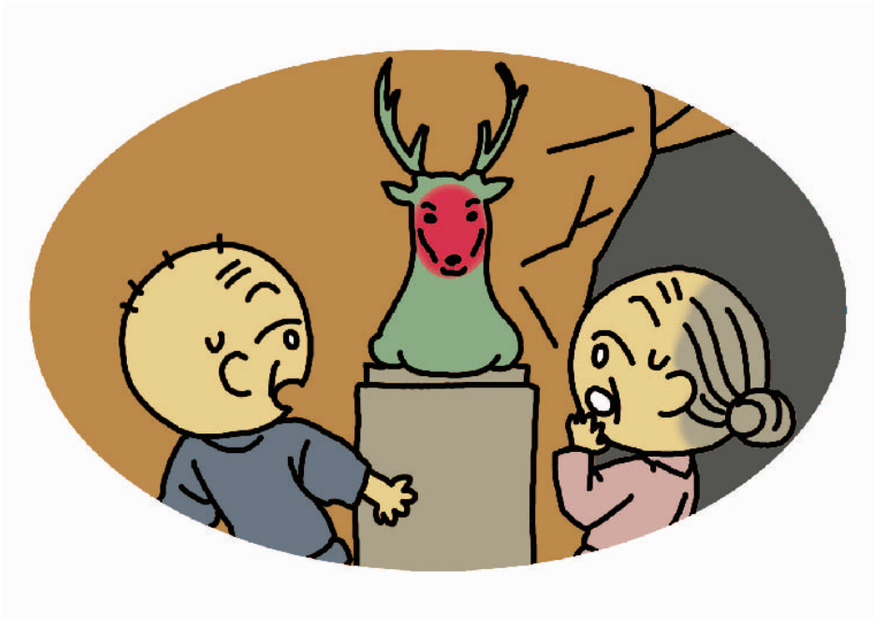
この洞穴の近くに、信心深い爺さんと婆さんがいて、毎日お参りをしていました。ある晩のこと、夢枕に神様が立ちました。

「爺と婆よ、これからは、お参りする時には必ず鹿の面を見よ。もし鹿の面が赤くなるようなことがあれば、島が沈む前兆であるから、一刻も早く島を立ち退くように」

正直な爺さんと婆さんは、それ以来、毎日神様にお参りするごとに鹿の面を見ていました。これを見て、一人の若者が夜中にそっと鹿の面を紅殻で真っ赤に塗りました。夜が明けて、お参りに来た爺さんと婆さんは驚きました。

「島が沈む。はよう逃げないかん」と島中に知らせました。

その話を聞いて、急いで港を出る者もあり、その様子を見て面白がる者もいました。爺さんと婆さんは「もう島を出る者はいないか」と何度も呼びかけ、最後の舟に乗って島を離れていきました。しばらくすると、島が揺れ、高い波が島を被い、島は海の中に沈んでいきました。



背　景

昔、徳島の津田の沖合いに浮かんでいた亀島が陥没して海中に沈み、島から避難した人が徳島の福島の築地に移り住んだと伝えられています。亀島が海中に没したのは、大地震のためであると言われていますが、その地震の時期については、正平16年（1361）６月18日に起こった正平の大地震、安政南海地震（1854）など諸説があります。かつて島があった所は、今ではお亀磯と呼ばれて、暗礁の上に灯台が建てられています。

アクセス　沖 洲 港（亀磯灯台）

- JR徳島駅より東へ直線距離約５km
- 徳島市東沖洲
- 緯度経度　北緯34度03分20秒，東経134度36分12秒

九死に一生を得る（徳島県徳島市）

昭和二一年（一九四六）の南海地震の時に、川に泊めた船の中で泊まっていた人の体験談です。

新町川に泊めてある船が私の住まいである。その晩も私は船の上で眠っていた。明け方、船が大きく揺れた。「風もないのに、えらい波じゃの」その時、私は津波のことは少しも思いつかず、そのまま眠ってしまった。しばらくすると、「プッツン」という音がした。船をつないであるロープが切れる音である。「只事ならぬことが起きている」咄嗟にそう思った私は慌てて外に飛び出した。私は、そこで想像を絶する光景を目の当たりにした。普段はほとんど流れのない川が上流へ激流となって流れているではないか。

私を乗せた船は、流れのなすがままに上流へ流されていった。「何が起きているのだ」私の頭は混乱していた。ようやくかちどき橋に船の上の部分がひっかかって止まった。ところが、次から次へと流されてくる船が、かちどき橋でだんご状態になりはじめた。私はかちどき橋が落ちるのではないかと不安になり、船につないであった小さな舟に飛び移り岸へ逃げようと思った。しかし、小さい舟はすぐに波に覆われ沈みそうになった。私は急いで、大きい船に飛び乗った。その瞬間、小さい舟は、流れてきた木材に押しつぶされて、「バリバリ」と音を立てて沈んでしまった。

呆然とばらばらになった小舟の破片を眺めていると「ミシミシ」という音が聞こえてきた。今度は飛び乗ったこちらの大きな船も、他の船に押しつぶされそうである。「もう駄目だ」と思った時、三トンのはしけ船が私の船に突っ込んできた。私は慌ててはしけ船へ綱を伝って上がり、はしけ船からかちどき橋に上がり川岸にたどりつくことができた。

背　景

かちどき橋は、徳島市街地を流れる新町川にかかっている橋で、昭和16年（1941）に完成しました。この橋の南詰めの交差点は、徳島と松山を結ぶ国道11号の起点にもなっています。また、昔は新町川には多くの船が係留され、沖合いには貯木場があり、周辺から集められた材木がいかだを組んで保管されていました。

船に乗っている時は地震の揺れが分からないので、津波の発生には注意が必要です。

アクセス　かちどき橋（新町川）

- JR徳島駅より南東へ直線距離約１km
- 徳島市中州町
- 緯度経度　北緯34度04分01秒，東経134度33分25秒

百畳敷（ひゃくじょうしき）のお寺（徳島県阿南市）

阿南市羽ノ浦町古庄の那賀川沿いに、観音寺というお寺があります。普通、お寺の広間は板の間ですが、このお寺には広大な畳の間があります。普段は住職が檀家（だんか）の人々などに教えを説いたり、仏事の行事をしたりするのに使われる場所です。

じつは、この大広間の畳は、かつては水防のためにも重要な役割を果たしていました。大雨が降り、那賀川の水位が七分水（堤防高の七分目ぐらいの水位）になると、地域の人々がお寺の畳を堤防に運んで、洪水に備えたそうです。この地域には水防活動の用語として「百畳敷」の言葉があったと言われています。また、付近の旧庄屋屋敷でも普段、集会所として使用できる広間の畳を、水防用に確保していたと伝えられています。

畳は日常生活にとって大事なもので、水害時には濡（ぬ）らさないように二階や高いところに上げられます。それにもかかわらず、お寺や庄屋さんの大切な畳が水害時に洪水から堤防を守るために使われていたのです。地域の水防活動の拠点としてお寺が活用されていたことや、村人のために庄屋さんが果たしていた献身的な役割を知ることができます。

背景

那賀川は「阿波の八郎」と言われるほどの暴れ川で、かつて沿川では頻繁（ひんぱん）に洪水に見舞われました。阿南市羽ノ浦町には大きな広間を持つお寺があり、この広間の畳は洪水の氾濫を防止する道具として使われてきました。那賀川の水位が上昇すると、地域の人々が畳を持ち出し、堤防の上に畳を横に立て並べて、裏に土俵を積むなどして畳の堤防を築きました。

畳が庶民に普及し始めたのは江戸中期以降と言われていますが、一般の農民の手の届くものではなかったようです。このため、地域の人が共同で負担してお寺の広間に畳を敷いたり、庄屋などが地域のために提供していました。

アクセス　観音寺

- 那賀川橋北詰より北東へ直線距離約１km
- 阿南市羽ノ浦町古庄宮ノ後78
- 緯度経度　北緯33度56分45秒，東経134度37分48秒

万代堤は、山間部から平野に出て右に曲がる那賀川が正面にぶち当たる位置にあります。万代まで続けという思いで造られた万代堤ですが、その歴史には紆余曲折（うよきょくせつ）がありました。

天明七年（一七八七）の大きな水害の後、古毛（こもう）村（現在の阿南市羽ノ浦町古毛付近）の庄屋・吉田宅兵衛は、洪水から人や田畑を守るため、那賀川に堤防をつくろうと考えました。下流の一四の村を回って計画を話すと、どの村の庄屋も賛成してくれました。このため、宅兵衛は藩に堤防工事の許しを願い、藩から許可を得ることができました。

工事中には大水が出て、築堤中の堤防が流されたこともありましたが、下流の村々の人々はそれぞれが受け持った場所で一生懸命工事を進め、ついに堤を完成することができました。長さ五九四間（約一、〇七〇メートル）、底幅二四・五間（約四四メートル）、高さ三間二尺五寸（約六メートル）、天端（てんば）幅四間（約七・二メートル）の堤でした。

この堤は当時の阿波の国では一番大きな堤防でしたが、文化元年（一八〇四）の大洪水により崩れてしまいました。このため、人々は堤防修理を始めました。この堤防は藩の命令で「万代堤」と名付けられ、人々は今度こそ洪水に負けない頑丈（がんじょう）な堤をつくろうと努力し、万代堤を完成させました。

万代堤の完成後も洪水により堤が壊れることは度々（たびたび）でした。このため、庄屋の吉田家の人々が中心になり、村人が力を合わせて、水勢を弱めるために牛枠（うしわく）（水の流れの向きを変えたり、堤防への水当たりを弱めるために堤防から川の中心に向かって出した構造物（水制）の一種。丸太で組んで作った枠を石を入れた籠で押さえた構造物）をつくったり、大岩による水刎（みずはね）（水制）を設けるなど、堤を守るために工夫、努力を重ねてきました。

古毛の大岩の標識▶

背景

天明７年（1787）、那賀川の氾濫により、古毛（こもう）村など那賀川下流の村々では田畑が流されるなど、大きな水害に見舞われました。古毛村の庄屋・吉田宅兵衛は洪水から人や田畑を守るため、堤防をつくろうと考えました。下流の村々とも話し合い、藩に堤防工事の許しをもらい、工事を完成させました。しかし、その後も堤防が壊れることが度々で、人々は堤防を万代まで末永く守るために工夫、努力をしてきました。

アクセス　万代堤の碑

- 持井橋より東に約１kmの北岸堰北詰
- 阿南市羽ノ浦町古毛
- 緯度経度　北緯33度56分38秒，東経134度35分11秒

那賀川の奥に降った雨が一気に下流を襲ってきました。土手も藪も流して行きました。代々お医者様の岸玄硯先生の家は大野城のふもとにありました。那賀川の水位が上がり、さすがの大きな家も浮いてしまいました。大量の雨水を含んだ大きな葦葺きの屋根の重さのために、家はひっくり返り、バリバリと音を立てて壊れていきました。この時、天の助けか、八畳の天井板がポッカリと目の前に浮かびました。

玄硯先生夫婦、幼い二人の子、年老いた両親、親戚の娘さん、そして婆やさんの八人は天井板に乗り、洪水の中を流れに身を任せて流れて行きました。那賀川の本流は逆巻く流れでしたが、大野辺りになってくるとゆっくりと流れ、下大野にくると八貫から岡川へと流れが変わり、西方の八幡様の馬場の松の枝にも手が届くかとも思われるように流れて行きました。

八人は手を合わせ、普段信仰している城山神社を伏し拝みました。すると、流れること一里（四キロメートル）ようやくにして助かりました。

流れ着いた所は立善寺村（現在の阿南市宝田町）でした。九死に一生を得た家族の歓びは何物にも代えることはできなかったと思います。家族の歓び、神仏の加護のありがたさを表すために、玄硯先生は漂流の姿を大きな絵馬に仕上げて城山神社に掲げました。

▲城山神社に奉納されている絵馬

背　景

昔から「寅年は荒れる」と言われてきましたが、慶応２年（1866）も寅年でした。８月５日から降り続いた雨は、約80年前の天明以来、最大の洪水を引き起こしました。那賀川の南岸では、阿南市上大野から富岡に至るまで各所で堤防決壊や家屋流失などの大被害が生じ、阿南市富岡では30名以上の生命が失われたと記録されています。また、那賀川の北岸では、羽ノ浦町古毛の万代堤が200間（約360m）以上にわたって決壊し、古毛の家々が流失したと言われています。

アクセス　城山神社

- 持井橋より南へ直線距離1.5km
- 阿南市上大野町
- 緯度経度　北緯33度55分33秒，東経134度34分43秒

明治二五年（一八九二）八月一日、降り続く雨のため、那賀川の水かさはどんどん高くなっていきました。高いところにある屋敷の家でも、一軒一軒が孤立してしまいました。

ところが、午前八時頃、あれほど上から押し寄せていた那賀川の水が引いていきました。人々は、なぜ那賀川の水が引いていったのだろうと心配になりました。情報は飛脚によって伝えられました。水が引いたのは那賀川上流の高磯山が崩れて、那賀川をせき止めたためで、せき止めたところより上流は湖になっている、木頭、坂州は水の底など、うそとほんとの情報が入り混じって大騒動になりました。

上流の土砂はいつまで那賀川をせき止めているのだろうか。大水が流れるようになったら、上の村から下の村に半鐘を打って知らせることになっていました。いつ半鐘が鳴るのだろうか。一日一日待っていました。

ついに、その日が来ました。八月四日午後二時、濁流が村々を飲み込む勢いで襲ってきました。あたり一面、泥の海になってしまいました。阿南市中大野の楠木神社には、大水から逃れるために三人がよじ登ったと言われる楠が今も残っています。

八月五日の午後七時になって洪水は引いていきましたが、後には泥をかぶった稲、野菜、牛馬のえさの雑草が残りました。その年、牛馬の餌にする稲わらは、水で洗って食べさせたと言われています。

背　景

明治25年（1892）に那賀川上流の現在の長安口ダム貯水池付近にある高磯山（那賀町）が崩壊しました。崩れた土砂は那賀川の河床から110mもの高さとなり、那賀川をせき止めました。その後、土砂にせき止められていた川の水位が上がり、とうとう水が一気に下流を襲いました。上流で土砂が那賀川をせき止めた様子や土砂崩壊の情報は、飛脚や半鐘などにより下流に伝えられていました。この話は、当時の那賀川最下流の阿南市での様子を描いたものです。

アクセス　楠木神社

- 持井橋より南東へ約２km
- 阿南市中大野町
- 緯度経度　北緯33度56分07秒，東経134度35分28秒

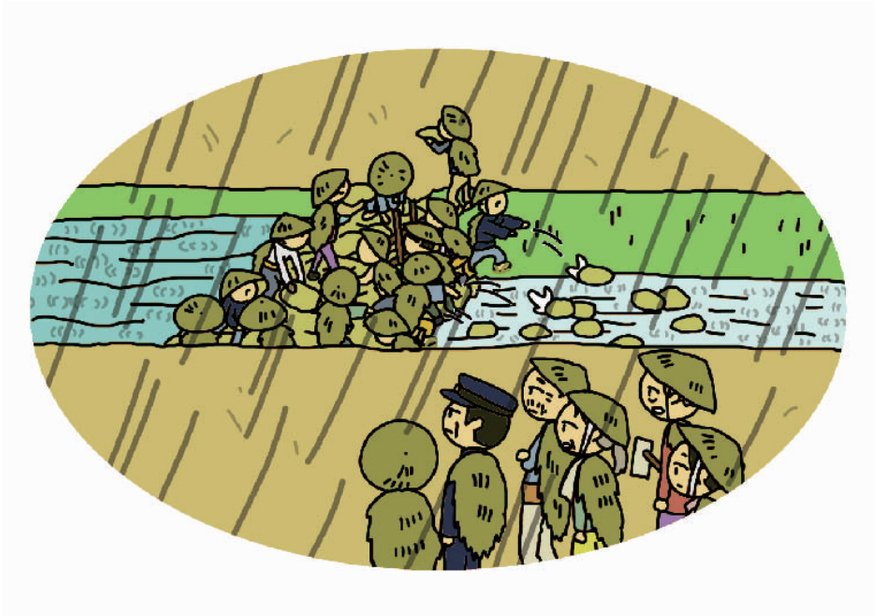
堰をめぐる上下流の争い（徳島県阿南市）

桑野川に一の堰が造られたのは、寛永一五年（一六三八）のことです。この堰のおかげで、下流の水田に水を引き入れることができるようになりました。その反面、堰上流の地域では、大雨の度ごとに浸水被害が頻発しました。このため、堰上流の人々は一の堰の改修について大正の中頃から政府に陳情を重ねてきましたが、改修は実現しませんでした。事件が起こったのは、室戸台風で大被害が起こった昭和九年（一九三四）から二年後の昭和一一年でした。

この年の夏は、八月一〇日頃から連日雨が続いたため、低地部では浸水が続き、その上台風が接近していました。八月二六日、降りしきる豪雨の中、半鐘が乱打されます。蓑笠の人々が、決死の気持ちで一の堰に集まってきます。浸水被害に遭っている上流の農民たちが一の堰を壊したのです。皆無言です。見守る下流の見能林の農民たちも無言です。警察官もただ見ているだけです。

一時間たち、二時間たって、やがて上流の水が下がりかけました。上流の農民の目的は達したのです。意気揚々と郡八幡神社に引き上げていきました。樽酒があけられ、冷や酒で祝杯があげられました。代表者二、三人が一晩警察に留置されましたが、皆無事に帰宅しました。

川にはそれまで堤防がありませんでしたが、この事件を境に、堤防がつくられ、昭和三五年（一九六〇）に完成しました。また、新たな一の堰は昭和二八年に下流に造られましたが完全ではなく、三代目の立派な一の堰ができたのが昭和四三年でした。事件以来三二年たっていました。



背景

桑野川の一の堰は、牛岐城主の賀島政重が寛永15年（1638）幕府の許可によって造ったと言われています。長さ20間（約36m）、堤底10間（約18m）の一の堰が完成し、富岡東部、見能林、津ノ峰の七百余町歩（約７km²）の水田に水を送ることができるようになりました。しかし、この堰のため、長生から桑野までは、大雨の度に田畑から屋敷まで水の底になることが度々になり、年に５回も６回も洪水になった年もあったと記されています。

アクセス　一の堰

- JR阿南駅より西北西へ直線距離で約1.2km
- 阿南市富岡町
- 緯度経度　北緯33度55分18秒，東経134度39分00秒

亡き父の教え（徳島県阿南市）

昭和二一年（一九四六）一二月二一日未明の南海地震の時のことです。グラッ！　グラッ！　突然襲った地震に、私は今まで経験したことのない大きな衝撃を受け、ただならぬ危険を身に感じました。津波が来る、必ず津波がやって来ると思いました。私は子どもたちを素早く戸外へ連れ出し、モチの木に皆でかかえつきました。早くどこか高い所へ避難しなければと思い、家族に身仕度をさせ、塩・味噌・米など非常食品を持って、近所の高いお家に避難させてもらいました。

その直後、暗闇の中に、津波の轟音が聞こえてきました。時間がたち、夜も明け、私たちが家へ帰って来たところ、家、家具、収穫したばかりのお米など、ありとあらゆる物すべてが泥まみれとなり、眼も当てられぬ有様でした。また、家の前の道路には、二〇〇トン級の船が打ち上がっていました。

時間が経つにしたがって、お隣の人も、避難先から帰って来て、無事であったことを共に喜び合いました。

こうした未曾有の出来事の中に、一人の怪我人も出なかったことは、今は亡き父の日頃の教訓のお蔭なのです。

私がこの家へ嫁いで来た時、父からくれぐれも次のことを注意されました。この土地は前が海であり、またV字型の入江であるので、もし地震があった時は、必ず津波が来ると思い、高い所へ避難すること、他の地域より潮位が高くなること、また戸外へ出たら、木の根元に避難することです。これはこの地方は沼地であるため地盤が軟弱なので地割れの心配があるそうで、この注意はお隣の人たちにもいつも言っていました。こうした年長者のちょっとした注意や言い伝えは、若い世代へ言い残しておきたいものです。

昭和三〇年代以前

背　景

徳島県南部、高知県西南部、愛媛県南部などのリアス式海岸に見られるV字型の入江では、他の地域よりも地震後の津波が大きくなることが想定されます。このことから、「地震後は早く、高い所に避難すること」が導き出されます。このような経験や言い伝えから学んだことを後世の人に伝えることは重要なことです。この話は、阿南市見能林に嫁いだ女性が義父から教えられた地震後の心構えを大切にしたために、津波から家族みんなの身を守ることができたという体験談です。

アクセス　船の打ちあがった付近（打樋川）

- JR見能林駅より南南西へ直線距離約1.5km
- 阿南市見能林町
- 緯度経度　北緯33度53分20秒，東経134度39分50秒

地盤沈下の苦しみ（徳島県阿南市）

敗戦から間もない昭和二一年（一九四六）の南海地震により、敗戦、地震、津波の三重苦を体験した人の話です。

「津波を知る人がいなくなった頃、津波が来る」と祖母から聞かされていました。昭和二一年一二月二一日未明、不気味な地鳴りとともに大地震が起こり、家を飛び出しました。焚き火で暖をとっていると、大波が国道を越え、怒濤渦巻きながらいろいろな物を運んできました。隣の納屋も木の葉のように猛スピードで流れていき、国道や堤防が次々と切断され崩壊していきました。浜田は泥沼の海になりました。それはほんの一瞬の出来事でした。地震や津波の計り知れない自然のエネルギーを前に、私はただ茫然と眺めるだけで、放心状態でした。

鵠地区が地震によって受けた致命的被害は、地盤沈下です。南海地震によって室戸岬付近が隆起し、他は全般的に沈降しました。海水の高さから考えると、地震前より五〇センチメートル位沈下したと言われていました。

沈下分を取り戻す嵩上げ工事が始まりました。まず、嵩上げに使う土を得るため、山へ行ってスコップによって表土を取り除き、山土をツルハシで掘ります。そして土を大八車で運搬するという、現代では考えられない全て人力の作業であり、その上寒中の氷が張る水中での作業で、本当に大変でした。

工事は昭和二八年（一九五三）頃まで続きましたが、沈下分を取り戻すことはできませんでした。以後、何年にもわたり何回も嵩上げ工事が繰り返され、農家の労力に加え、精神的、経済的負担はあまりにも大きく、長い間本当に苦しみました。

背　景

阿南市鵠地区はＶ字型をした橘湾の湾奥部、福井川の河口に位置し、地震が発生すると、津波が猛烈な勢いで襲ってくる地形となっています。昭和21年（1946）の南海地震の時にも、この地に津波が大きな被害をもたらしました。その中でも深刻な被害は地盤沈下でした。地盤を元の高さに戻すため、地域の人々は人海戦術で大変な苦労をしながら嵩上げ工事を行いました。

アクセス　鵠　橋（鵠川河口）

- JR新野駅より北東へ直線距離約３km
- 阿南市橘町鵠
- 緯度経度　北緯33度51分26秒，東経134度37分38秒

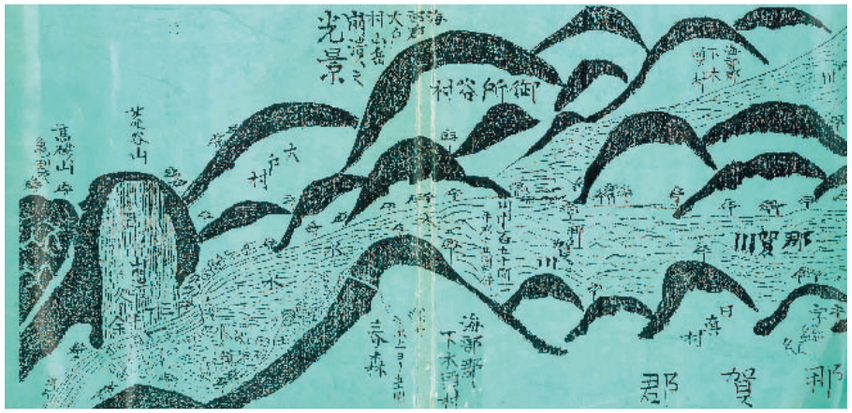
もどった　おやくっさん（徳島県那賀町）

高磯山の大崩壊によりせき止められた那賀川の水は、上流の辺り一面を水没させました。平谷村（現在の那賀町平谷付近）にある妙法寺も水の底に沈んでしまいました。妙法寺の住職は本尊の観音様や薬師如来様を抱いて、命からがら上ノ内まで避難しました。しかし、建物まで持っていくわけにはいきません。

本堂や、お堂など、古くからあった立派な建造物は、ほとんど流失してしまいました。お薬師様をまつっていた薬師堂は、水に浮き、だんだん奥の方へ逆流していく水に乗り、現在の平谷八幡神社の上のあたりまでプカプカと浮かんでいってしまいました。

せき止められた水の量はますます増えて、現在の長安口ダムの約一・五倍もの量になってしまいました。さすがに川の流れをせき止めていた土砂も水圧に耐えられなくなり、七月二五日午後二時頃から崩れ始め、四時にはついに決壊してしまいました。

平谷でも水がひき始め、たくさんの家の残骸や避難させることのできなかった牛や鶏などの亡骸が、下流へ向かって流されていきました。その時、不思議なことが起こりました。八幡神社まで流されていた薬師堂が、プカリプカリとるり山の方へ向かって戻り始め、水がひくのに合わせて、ドンと元の位置にすわってしまいました。住職が上ノ内まで避難させていたお薬師様も、無事に再びこのお堂へ安置することができました。



▲高磯山の大崩壊の絵図
（西崎文庫蔵書「諸県変シ全」）

平谷八幡神社▶

背　景

明治25年（1892）７月25日、台風による暴風雨で、那賀町大戸の高磯山（611m）が大きく崩壊しました。流れ出した土砂は那賀川を越えて対岸の春森まであふれ、那賀川の河床から110mの高さに達しました。この土砂によって那賀川は流れをせき止められ、ダムとなってしまいました。せき止められてから二日後、とうとうダムとなった箇所が決壊して、大水となって下流を襲いました。この話は、高磯山よりも上流にある平谷の薬師堂がせき止められた水によって移動したときの話です。

アクセス　妙法寺薬師堂

- 平谷小学校の南すぐ
- 那賀町平谷
- 緯度経度　北緯33度47分39秒，東経134度18分07秒

あの時すぐ逃げていれば（徳島県牟岐町）

昭和二一年（一九四六）の南海地震後、私はすぐに服を来て階下に下りました。まもなく母や祖母が妹や弟たちに服を着せ終わり、皆玄関の部屋に集まりました。玄関口の板間には収穫し乾燥を終えたばかりの籾を入れたかますが並べられていました。その頃は食糧難の時代で、母と祖母は「これを二階に上げといて逃げよう」と言いました。その時です。外から伯母が雨戸を叩いて「津波が来るぞ、はよう逃げえよー」と声をかけ、足早に走り去っていきました。

母から「子供らは先に逃げとれ」と言われ、私が入り口の障子を開けた途端にドーン、ザーという音とともに、雨戸と雨戸の隙間からいっせいに海水が吹き出してきました。「みな早う二階に上がれ」と言う祖母の声に、母は籾の一杯詰まったかますを持って階段を駆け上り、みんなも続きました。

階下の様子を見に行った母は「階段の上近くまで波が来とる」と言う。祖母は「もうあかんやわからん。死ぬんやったらみんな一緒や」と言って、七人が輪になって手を握り合いました。

真っ暗な中で、ドーン、ドドーンと家に何かが打ち当たる音が数回続いて聞こえた瞬間、突然家が崩れるように倒れ、家に押し潰されるようにしてみんなが水中に押し込まれました。

近くにいたはずの家族の姿は一人も見えず、無我夢中で水の中をさぐり、手に触ったものを引っ張り上げました。弟や妹たち三人は間近におり、祖母も少し離れて浮き上がっていましたが、母と叔母の姿は見当たりませんでした。

あの時に欲を捨てて、すぐに逃げていればといまだに悔やまれます。

昭和三〇年代以前

背　景

昭和21年（1946）の南海地震と津波は牟岐町に大きな被害をもたらしました。当時は食糧難の時代で、収穫し終えた後の籾は貴重なものでした。この話は、籾を入れたかますを二階に上げてから逃げようとしたために、母と叔母を亡くした家族の話です。地震後、津波に備えて、一刻も早く逃げていれば、二人の命は救われていたかも知れません。

アクセス　南海震災史碑

- JR牟岐駅より南東へ直線距離で約１km
- 牟岐町灘字大牟岐田　児童公園内
- 緯度経度　北緯33度39分59秒，東経134度25分39秒

ごっついぞ（徳島県牟岐町）

昭和九年（一九三四）に室戸台風を牟岐港で宿直していた時に体験した人の話です。

「ラジオで大きな台風はこっちへ来よると放送していたが、何処も静かなもんや」と言って、先輩が上がってきました。暑い夜でした。窓を開けると、星がキラキラ光っていました。昭和九年（一九三四）九月二〇日夜、私は牟岐西浦漁協の建物の二階で二人の先輩とともに蚊帳の中で横になって雑談していました。

しばらくして、南側の窓ガラスが一枚割れ、蚊帳が揺れました。まだ電灯はついていました。外を見ると、前の揚場の屋根に二階屋根の雨樋が垂れていました。それが急に舞い出し、ガラス窓を叩きました。ガラスは割れ、前の屋根瓦がめくれて、何もかも一緒になって座敷に次々飛び込んできました。「ごっついぞー」と三人は真っ暗闇の中、懐中電灯の光で一階へと右往左往しました。

突然、ドドドドッと建物全体が揺れました。外が見え出し、風雨も少し納まりました。外に出ると、低地に海水がとどまっていました。事務所西隣の家の二階屋根に加工場の棟木が二本、矢のように打ち込まれていました。

土堤の松並木はほとんどが折れ、残った枝にトタンがタオルをかけたように垂れていました。浜の加工場は全部飛ばされていました。まるで広い河原が広がっているようでした。築堤中の中央突堤が崩れていました。

昭和三〇年代以前

背　景

室戸台風は、昭和９年（1934）に日本列島を縦断し、大きな被害をもたらしました。９月21日５時10分に室戸測候所で観測した最低気圧は911.9hPaで、当時の世界記録を破る強烈な台風であったために、室戸台風と命名されました。上陸後も中心気圧が低かったため、風が非常に強く、最大風速は室戸で西風毎秒45m、徳島で南東風36.7mを記録しています。台風は本州を時速70kmもの速さで北東に進んだため、風は経路の南東側で特に強く、この強い南偏風のために大阪湾を中心に著しい高潮が発生しました。

アクセス　牟 岐 港

- JR牟岐駅より南東へ直線距離で約500m
- 牟岐町中村
- 緯度経度　北緯33度40分02秒，東経134度25分18秒

お母ちゃん行けんもん（徳島県海陽町）

昭和二一年（一九四六）の南海地震で二人の子を亡くした母親の体験談です。

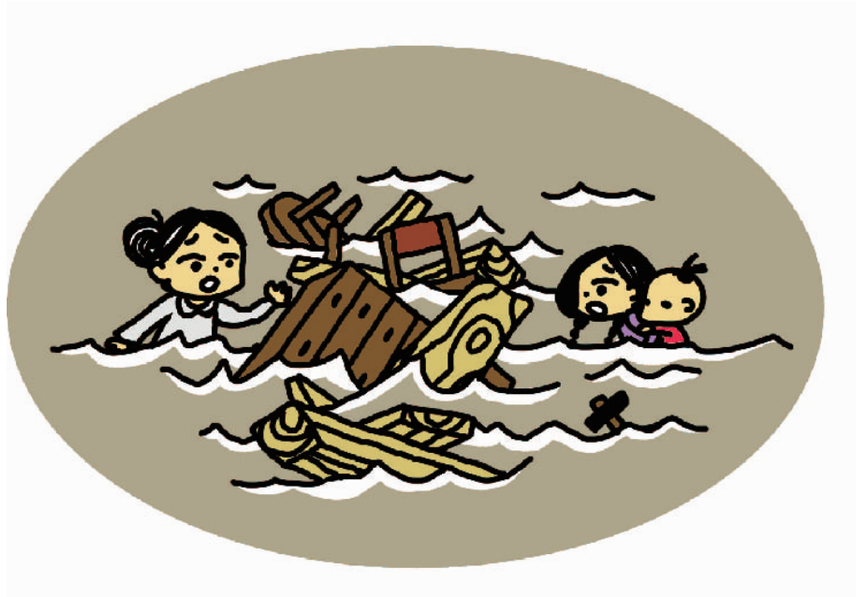
地震が揺ったさかい、「もうやむんかいな」、「家がつぶれるんちゃうかいな」ほんなことばかり考えながら部屋で子供に添え乳させよった。おとうさんが、「井戸の水もようけ有るし、浜へ行ったけど誰っちゃおらんわ。静かなもんじゃわ」と言う。おては（私は）袷（あわせ）の着物を何枚か持ち、「ちょっとでも食べる物持っていたろ」思って、袋に米入れて出て行きかけた。

ほいたところが、近所は、皆逃げてしもておらんのんやもん。ほんで、びっくりしてお隣さんに早よう逃げるよう言うたって出て来たら、うちの前にはまだ水がなかったけんど、駒沢の前へ行ったらもう水がザブザブしとって胸まで上がってきた。それが一番最初の潮やったんや。持っていっきょった物はみんな駒沢の前で捨ててしもた。

長女が四女を負うて行っきょたんやけど、「おかあちゃん行けんもん」言うやろ。行けんはずや、柴から材木から道具からが、じょうさん（たくさん）流れてきとんやもん。暗いし、いろんな物は流れてきよるし、あとへ戻ったることも、どうする事もできん。

ほの後の波に乗って次女と三女は駒沢の屋根に上がって助かった。長女は四女を負うとるし、ねんねこがびしょびしょになっとるから、からだが重とうてようよう上がらんかったんやろ。

潮が干いて町へ出て行くと「ばあやん、おめくの（あなたの家の）子が死んどるで」言うやんけ。長女と四女が西の町で死んどった。下の子はねんねこから抜けて、二人が近くで死んどった。おて（私）が行った時には、もうお寺に運ばれとった。「この子らを熱いお風呂にいれたったら生き返るんちゃうかいな」と思たら入れてやりたくてたまらなんだ。一度に子供を二人も失うてもうた。



背　景

昭和21年（1946）12月21日午前４時19分、マグニチュード8.0の南海地震が発生しました。海陽町の浅川湾は典型的なＶ字型湾で、地震発生から十数分後には大津波が来襲し、死者85名、家屋の全壊364戸、流失44戸などの被害をこうむりました。この話は、持ち物を準備していたことから逃げ遅れ、津波が押し寄せる中を逃げた家族の話です。浅川港には「お母ちゃん行けんもん」の石碑が建立され、この時の教訓を後世に伝えています。

アクセス　震災後50年南海道地震津波史碑

- 海陽町浅川出張所前
- 海陽町浅川字川ヨリ東26-4
- 緯度経度　北緯33度37分29秒，東経134度21分46秒

はよう逃げ、はよう逃げ（徳島県海陽町）

昭和二一年（一九四六）の南海地震で妻を亡くした夫の体験談です。

地震の時、わしの旅館にはちょうど森繁久彌（もりしげひさや）さんが来とって、二階で寝よった。森繁さんに「ここで夜が明けるまで動かれんぞ。わし、帰るわ」言うて、浅川の自宅に自転車で向かった。浅川の端へ来たら、ドーと波が来て、大きな貨物船や機帆船（きはんせん）が流れてきよった。それが一番最後の潮やった。夜を明かし、胸まで水に浸かってようやく自宅にたどり着いた。

家の辺りは流れてしもとった。わしは子供を捜した。無事山へ逃げとった。「お母さんはどうしたんな」と聞いたら、「お母さん見えん」という。「もしかしたら、やられとるかも分からん」と思うて下へ降りたら、いとこが「おまえくのお母さんみたいな人が死んどる」いうて初めて分かった。浜にようけ積んであった材木がどっと流れて来て、家内はそれに足をとられて死んどった。逃げる時、上の子が下の子を負うて家内も一緒に逃げたんやけど責任感の強い女で、「おとうさんもおらんし、こら子供のもん持って逃げとらないかん」思ってもどって来たんやろ。

ここらの人は天神さんに逃げたんやけど、三回か四回波がきた。天神さんの石段の一番上まで波がきとった。津波というもんは、浜で渦のようにまうもんらしい。ほれに、二階建ちの家が下をとられてしもて、そのまま二階がパタンと落ちてしもたり、えらいもんやな。

あんな大きい地震や津波の時は、「はよう逃げ、はよう逃げ」いうたらないかんけど、中には「こんな所まで津波が来るか」い う人もおる。ほんやけど、そんな時は素直に人のいうことを聞いて逃げるがええんでないかと思う。

▲観音庵への階段

▲安政南海地震
津波来襲地点の石標

◀昭和南海地震
津波来襲地点の
石標

背　景

昭和21年（1946）の南海地震の時に、自宅とは別の旅館で宿泊客の世話をしていた夫が、妻と子どもたちの安否（あんぴ）を気遣（きづか）い、浅川の自宅付近に戻りました。子どもたちは無事山に避難していましたが、妻は亡くなっていました。一旦（いったん）、家から逃げたものの、荷物を取りに帰ってきて津波にのまれたようです。この話は妻を亡くした夫が語る体験談で、地震の後は早く逃げることが大事だと言っています。

アクセス　観 音 庵

- 海陽町浅川出張所より北へ約200m
- 海陽町浅川
- 緯度経度　北緯33度37分37秒，東経134度21分42秒

両親からの言い伝え（徳島県海陽町）

私は、物心がついた幼少の頃から高校生になる頃まで、両親から、寝る時には必ずズボンや服などを折りたたんで枕元に置き、いつでも着て逃げられるようにしておくように、しつこく言われ続けてきました。それは、両親が昭和の南海地震で次のような体験をしたことに基づいた教えでした。

「……昭和二一年一二月二二日、今まで経験したことのないドーンという音とともに、大きな縦揺れで目が覚めた。すぐに大きな横揺れで家がぐらぐらと揺れ始め、タンスは倒れ、家中の物が落ち、今にも家が倒壊しそうになった。海からはゴーと、今までに聞いたことのない不気味で大きな音が聞こえてきた。外からは「津波だ、早く山に逃げろ」と怒鳴り声が聞こえた。着の身着のままで外に出ると、屋根瓦の落ちる音、家屋の崩れる音があちこちから聞こえてきた。

荷物を持ち出す時間も余裕もなく、また避難する人々でパニック状態の中、三ヶ月の乳飲み子と三歳の子どもを抱きかかえ、また後には四人の子どもを従え、暗闇の中を近くのけわしい山道を必死に駆け上がって避難したが、どこをどのように避難したのかはほとんど記憶がない。

百メートルほど登ってやっと我に返ったが、恐怖と寒さのため体の震えが止まらない。しばらくは話すこともできなかった。……」

南海地震を経験した両親の貴重な教えを無にしないように、この話は子や孫にも語り継ぎたいと思っています。

昭和三〇年代以前

背　景

昭和21年（1946）の南海地震を体験した両親は、その時の様子と教訓を子どもに伝えていました。災害体験やそれに基づく教訓は、語られなければ風化してしまいます。教えを思い出し、実行することにより、両親の思いは子に、孫に伝えられていきます。この話は、親など身近な人が、災害体験を後世に伝えることの大切さを物語っています。

アクセス　津波十訓の石碑

- 海陽町浅川出張所より南西へ約200m
- 海陽町浅川
- 緯度経度　北緯33度37分24秒，東経134度21分41秒

古よりの警鐘「震潮記」（徳島県海陽町）

徳島県の南端、海陽町宍喰の田井家には、この地の過去の地震や津波の様子を記した「震潮記」が残されています。その一端を紹介します。

……嘉永七年（一八五四）一一月四日の午前九時、中揺りの地震が続いて二度あり、海面ににわかに大波が立ち、あじ島を打ち越えて、川の中ほどまで潮が三度入ってきました。

人々は大変驚いて四方へ逃げ散りました。米麦や諸道具を山上へ持ち運び、今にも津波が襲って来る心地がして、大騒動となりました。

夜に入ってからも同じ騒ぎは続きました。万一、出火するかも分からないので、役人達は火の用心の警戒に回り、浜辺ではかがり火を焚いて、潮に異変があったならば、知らせるよう手配しておきました。家々に残っている者たちは、知らせがあれば少しずつ身の回りの物を持って、愛宕山へ逃げのぼるという覚悟で、浜辺より今にも知らせが来るかと心細くも待っていました。そこへ、夜一〇時ごろ中揺りの地震が一度ありました。

家々に残っていた者も大半は逃げ去り、道具も持ち運び騒々しくなりました。また、浜辺には潮の異変に気を付け、かがり火を焚いており、あちこちに逃げ退いていた者は、かがり火が消えたならば、津波が押し寄せて来ると思って、本当に薄氷を踏むような思いで心細く、遠見から見守っていました。

明け方になって、一息つき、翌五日、潮の異変も少しばかりは直り、地震も穏やかになったので、あちこち逃げていた人々は、諸物を持っておいおい戻ってくるような状態で、これで少しは穏やかになりました。……

震潮記▶

背景

「震潮記」は、宍喰の組頭庄屋田井久左衛門宣辰（1802～1874）が、宍喰を襲った地震・津波の様子を記したものです。この中には、永正９年（1512）、慶長９年（1605）、宝永４年（1707）、嘉永７年（1854）の記録が記されています。平成18年には、子孫の田井晴代氏が津波時の救命の一助になればとの思いで、現代語訳を刊行されました。ここでの話は、「嘉永七年十一月五日震潮日々あらましの記」より、津波に備えて昔の人がかがり火を焚いたなど多くの教訓が述べられています。

アクセス　愛宕神社

- JR宍喰駅より東南東へ直線距離で約200m
- 海陽町宍喰浦
- 緯度経度　北緯33度33分55秒，東経134度18分09秒

堤防が吹っ飛んだ（高知県室戸市）

平成一六年（二〇〇四）の台風二三号の高波は、室戸市の海岸堤防を破壊し、三名の命を奪いました。当時の町内会長さんは以下のように証言しています。

あの日は午後一時頃から電話や電気が通じず、とにかく大変な雨と風でした。でも我々室戸市民は台風に慣れていましたから軽く見ていたのです。おそらく皆、無防備だったのではないでしょうか。ですから、あの広くて大きな堤防が吹っ飛んだのを見た時は「まさかこんなことが」という気持ちでした。私はずっと室戸に住んでいますが、あんな光景を見たのは初めてです。

被害のあった家へ救助に行ってみると、堤防の塊が家具もろとも家を押しつぶし、畳が天井に突き刺さっていて、波が山手側の壁までぶち抜いていました。それを見て以来、心構えが変わり、自主防災組織を作るきっかけになりました。

海沿いに住む我々は、自分で自分を守っていくしかありません。台風の怖さを忘れないためにも、高浜地区では一〇月二〇日を地区の防災の日として、防災訓練を実施しようと考えています。

▲民家に飛び込んだ堤防（菜生海岸）（提供：高知県）

背　景

平成16年（2004）10月20日、台風23号の激しい高波により、室戸市の菜生（なばえ）海岸では堤防が約30mにわたって決壊しました。越波等により背後の家屋13戸が被災し、３名の方が亡くなるという惨事になりました。堤防を乗り越えた水塊が背後の家屋等を被災させるとともに、堤防の決壊や流失が被害を拡大しました。この堤防の被災は、これまでの海岸災害では見られないものでした。この話は、異常な高波により被害を受けた町内会長さんの証言です。

アクセス　菜生海岸

- 室戸市役所より南東へ直線距離約６km
- 室戸市室戸岬町
- 緯度経度　北緯33度16分24秒，東経134度09分31秒

お別れぞね（高知県香美市）

平成一〇年（一九九八）の高知水害では、時間雨量が百ミリを超えるような豪雨が降りました。

老夫婦は二人暮らしでした。妻は五年半前、脳梗塞（のうこうそく）で倒れてからは体が不自由で、人に支えてもらって立つのがやっとでした。そこに突然の豪雨により、片地川の堤防が決壊し、濁流が一帯の民家に流れ込みました。一階のベッドで寝ていた夫が浸水に気付いたのは午前二時頃でした。ベッドから下りてみると水がすねの辺りをぬらしていました。

「これはいかん」隣で寝ていた妻を立ち上がらせました。二人は二階を目指しました。その間も水は容赦なく押し寄せ、夫の首まで達しました。もう、前に進むことはできませんでした。

妻の頭が水につからないように夫は抱えました。「冷やい、冷やい」と繰り返す妻の足を、浮いた畳の上へ上げてやりたいと思いましたが、頭を支えるだけで精いっぱいでした。

「もう限界じゃきね」「お別れぞね」妻は夫の腕の中で息を引き取りました。夫は妻の体の重みをその手で受け止めました。それからどのくらいの時間がたったことでしょう。空が明るくなった午前六時半過ぎ、夫は救助されました。

▲平成10年の浸水状況（土佐山田町神母ノ木）
（「'98高知水害の記録　豪雨パニック」より引用）

背　景

平成10年（1998）９月23日秋雨前線により降り出した雨は、四国地方の各地に1,000mmにも達する雨量をもたらしました。高知市では24日６時からの日雨量が943mmにも達し、市内各地で家屋の浸水が発生しました。この時、香美市土佐山田町では片地川の堤防が決壊し、近くに住む体の不自由な高齢女性が溺死（できし）するという痛ましい出来事が起こりました。

アクセス　山田堰跡（物部川）

- JR土佐山田駅より東北東へ直線距離約３km
- 香美市土佐山田町
- 緯度経度　北緯33度36分44秒，東経133度42分48秒

繁藤（しげとう）の豪雨（高知県香美市）

繁藤は、豪雨が集中して降るため、古くから「雨坪」と呼ばれてきました。その雨坪で土砂災害が起こったのは昭和四七年（一九七二）七月五日のことでした。

午前六時、国鉄（現在のＪＲ）繁藤駅前の人家の裏山がくずれました。その家で消防団員が避難作業を手伝っていた時に、再び山崩れが起こり、消防団員が生き埋めとなりました。山崩れが繰り返し起こることが心配される中、懸命の救出活動が続けられました。やっと生き埋めの消防団員の着衣が見え、ショベルカーを退避（たいひ）させ、手作業に移ろうとしていた矢先のことです。

午前一一時前に予想もしなかった大山崩れが発生し、一瞬にして一〇万立方メートルの土砂が駅前付近を襲いました。この大災害により、一二軒の人家、停車中の列車、消防団の救出活動に駆けつけていた人々などが押し流され、死者・行方不明者は六〇人となりました。

消防団、県警、陸上自衛隊、国鉄、建設業者、医療班などが総力をあげて土砂の除去作業を行い、行方不明者の捜索を行いましたが、雨のため難航しました。捜索活動はその後九月下旬まで続けられましたが、全員を発見することはできませんでした。

最後の遺体が発見されたのは、半年後の翌年二月のことでした。下流の護岸工事中に発見されました。災害現場近くには遭難者のための慰霊塔（いれいとう）が建てられています。

▲昭和47年の繁藤災害（提供：共同通信社）

背　景

昭和47年（1972）７月４日午後から高知県中部の山間部では断続的に強い雨となりました。このため、香美市繁藤では、１時間に95mmの豪雨を記録するなどして、５日９時までの日雨量は742mmに達しました。この大雨により、繁藤では土砂崩れが相次ぎ、ついには高さ約100m、幅約200mの大規模な山崩れが発生し、死者・行方不明者60名を出す大惨事となりました。この土砂災害では、住民の救出活動をしていた消防団員が二次災害に巻き込まれました。この後、消防の補償制度をつくるきっかけとなりました。

アクセス　繁藤災害の慰霊塔

- JR繁藤駅より北東へ直線距離約200m
- 香美市土佐山田町繁藤
- 緯度経度　北緯33度40分56秒，東経133度41分37秒

結（ゆ）いの文化（高知県大川村）

四国の山あいには、お互いに助け合う「結（ゆ）いの文化」が残っています。大川村では、この助け合いの文化が平成一六年（二〇〇四）の台風による被害を未然に防ぎました。

村役場近くの高台にある小松地区に住む主婦が異変に気づいたのは、土砂降りが続いていた一七日午後四時前頃でした。裏山からのどす黒い濁流がコンクリート張りの水路からあふれ返り、玄関先まで迫ってくる勢いでした。生まれて初めてかいだ、鼻にぐっとくる嫌（いや）なにおいが家まで入って来ました。

すぐに村役場と連絡を取り合って、避難の呼び掛けを確認しました。降りしきる雨の中、この主婦は裏山に最も近い八軒のドアを次々にたたき、「上の山が大変なことになっちゅう。すぐに役場の車が来るき準備して」と大急ぎで知らせて回りました。

この後、村の避難指示も出され、住民は着の身着のまま、バスで近くの大川中学校へ避難しました。呼びかけた主婦も車で二往復し、近所の人たちの避難に協力しました。おかげで小松地区は床下浸水の被害は出たものの、避難した二六世帯、四八人には一人のけが人も出さずに済みました。

一人暮らしのお年寄りは「足が悪くてとても一人では逃げられないし、みんなに迷惑かけずに済むよう、早め早めに言うてもろうて、本当にありがたいことです」と主婦の機転に感謝していました。

小さな村には、自助、共助の意識が脈々と受け継がれています。「結いの文化」が被害を未然に防ぐ上で大切な役割を果たしていることを物語っています。

背　景

平成16年（2004）の台風15号は、８月18日から19日にかけて東シナ海から日本海に抜けていきました。台風15号は南北に雨雲が広がったのが特徴で、四国に南から湿った空気が多量に流れ込んだため、吉野川上流域に多量の雨を降らせました。高知県大川村の小松では、８月17日の16時からの２時間に205mmの強い雨を観測するなど、３日間で総雨量1,000mm以上の記録的な豪雨を観測しました。

アクセス　小松団地

- 大川村役場のすぐ上
- 大川村小松
- 緯度経度　北緯33度47分02秒，東経133度27分59秒

傘を突き抜けると思うほど猛烈な雨、時間雨量一二九・五ミリが降った平成一〇年（一九九八）高知水害。この話は、平成一〇年（一九九八）の高知水害を体験した障害者の方の体験談をもとにしたものです。

「裏山からは石がゴロゴロ崩れ始め、もう私たちは覚悟を決めました」と話すのは高知に住むAさんです。Aさんの夫は約一〇年前、脳卒中で倒れ、自宅で寝たきりの生活でした。水害時、地域には避難勧告が出され、近所の人も何度か「早く避難して下さい」といって戸を叩きに来たと言います。しかし、「こんな豪雨の中、避難なんてできやせん」と言って断りました。「裏山が崩れ、この家が押し潰されたら二人でここで死のう」と覚悟を決めたそうです。

在宅寝たきり障害者の方の中には、避難勧告が出された時、地域の人の介助で避難所までたどり着くことができた人もいます。しかし、トイレのこと、自分で姿勢を保つことなどが自由にできないBさんは、避難所に居ることもできず、幸いに市役所の仲介で病院に入院することができようやく落ち着いたといいます。一方、すみやかに特別養護老人ホームへ臨時入所させてもらいホッとしたCさんもいました。

平成10年９月25日の浸水状況▲▶

昭和四〇年代以降

背　景

高知はかつて「河内（こうち）」と標記されていたそうです。昔から度々水害に見舞われ、人々は水害との闘いを続けてきました。平成10年（1998）９月の秋雨前線により、高知市では24日６時からの日雨量が943mmに達し、市内各所で家屋が浸水しました。高知は激しい雨と河川の越流で「河内」になってしまいました。この話は、平成10年高知水害を体験した障害者の方の体験談をもとにしたものです。

アクセス　高知平野を一望できる五台山

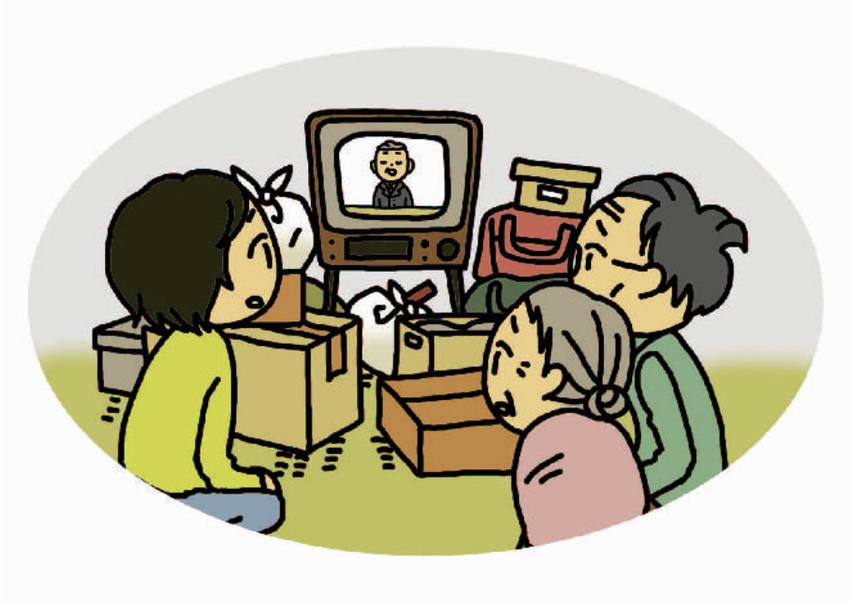
- JR高知駅より南東へ直線距離約４km
- 高知市吸江
- 緯度経度　北緯33度32分53秒，東経133度34分23秒

昭和五一年（一九七六）、高知市を台風一七号が襲った高知水害の時のことです。

住んでいる地区が海抜ゼロメートル地帯であるため、私は、台風に備えて家具を二階に上げるかどうか判断しようと、夕刻、玄関先に出ました。深さが二メートル近くある側溝の水位が、見る間に玄関まで上がってきました。慌てて家具や電化製品を二階に上げ、畳を外し終わったところで、床板が浮き始めました。

二階にいれば大丈夫と、落ち着きを取り戻していた矢先、テレビから高知市長の「非常事態宣言」が流れ、「鏡川の堤防が決壊したので、二階も危ないから各自逃げよ」と報じられました。「非常事態宣言」には見捨てられた思いが強く、かなりショックでした。反面、生き抜くためには自力で自分を守るしかないと悟（さと）った瞬間でもありました。すでに玄関前の水位は腰のあたりまできていました。

暗闇の中、腰まで水に浸かりながら、避難場所へと向かいました。道は濁水で見えず、日々の記憶を頼りに、勘で進むしかありませんでした。また、周辺の深い側溝には各家の出入り口にコンクリートの蓋（ふた）がされているだけだったので、落ちたら最後という恐怖感が募（つの）り、一歩ずつ、つま先で確認しながらの避難でした。避難場所まで時間にして二〇～三〇分ぐらいの時間でしたが、ものすごく長く感じました。



背　景

昭和51年（1976）９月、台風17号の停滞とその後６日間降り続いた雨により、高知市では降り始めからの総降雨量が1,306mmという記録的な豪雨となりました。市内を流れる鏡川、神田川、久万川などの川が氾濫し、市内のほとんどが水没しました。このため、高知市長は「非常事態宣言」を発表し、「自分の命は自分で守ってほしい」という報道がなされました。災害時には行政が対応できない事態が想定されます。その時には、自分の身は自分で守ることの重要性を伝えています。

アクセス　非常事態が宣言された高知市（高知城）

- JR高知駅より南西へ直線距離約1.5km
- 高知市丸ノ内
- 緯度経度　北緯33度33分39秒，東経133度31分53秒

裏山から土石流（高知県いの町）

この話は、昭和五〇年（一九七五）に土石流に遭遇した人の体験談です。

八月一七日の午後、裏の加茂山から土石流が発生し、自宅を鉄砲水が襲いました。わが家は山の裾野（すその）の比較的高い位置にありましたが、この鉄砲水により床上二〇センチメートル程度浸水しました。この時、くみ取り式の便所から異常な臭気がして、またプロパンガスのボンベが家に当たる音がした後、突然家の中に大量の水が入ってきました。この水の勢いは激しく、あっという間に一階が浸水し、母親と妹と急いで二階へと避難しました。あまりに突然の出来事に、当時小学校三年でしたが、言いようもない不安と恐怖を感じたことを今でも覚えています。

二階に避難してからも雨は激しく降り続き、階段に上がってくる水かさがだんだん増してきたことから、近くの小学校へ避難することになりました。しかし、時既（すで）に遅く、小学校へ向かう町道には濁流が流れ、横断することができなくなっていたので、やむを得ず、近くにあった四階建てのビルに避難することになりました。そこには近所の人も避難してきており、多くの人が不安な夜を過ごしました。

次の日、自宅に戻ると、一階は泥で埋まっており、二階での不自由な生活を余儀なくされました。この土石流は家の裏の小さな谷筋で発生しており、裏の住宅地に水が溜まったことから、水を吐かすためブロック塀を壊したことにより水が流入してきたことが後になって分かりました。

この豪雨からは、早めに避難することと、土石流や鉄砲水などの突然の災害に備えることの大切さを学び、今も心に刻んでいます。

背　景

昭和50年（1975）８月17日、台風５号は宿毛市付近に上陸し、その後伊予灘を経て、山口県から日本海に抜けました。この台風が通過した17日には高知県中部の山間部では豪雨となり、17時までの１時間にいの町で93mmを観測しました。このため、仁淀川は大洪水となり、山崩れや土石流も発生して大災害となりました。この話は、洪水時に土石流に遭遇した人の体験談です。

アクセス　災害の発生したいの町

- いの町役場
- いの町1700-1
- 緯度経度　北緯33度32分53秒，東経133度25分41秒

背景

高知県の波介川に関する史料によると、川底を「寸志夫」で掘るという記録が残されています。寸志夫とは、自発的に無償で仕事をすることです。今日で言うところの「ボランティア」です。藩政期の波介川では、川の水はけを良くするために、村人たちが自発的に川底を掘る作業を行っていました。その村人の熱意は藩を動かして、波介川の改修につながりました。

アクセス　波介川水門（波介川）

- 波介川は仁淀川大橋より南へ直線距離約500m
- 土佐市用石
- 緯度経度　北緯33度29分23秒，東経133度27分10秒

文政一一年（一八二八）、土佐市周辺は大洪水に見舞われました。村の人々は庄屋を中心に話し合い、波介川の水はけを良くして、洪水による被害を少なくするために、川底を掘る作業をすることにしました。藩からの命令ではなく、村人が自分たちの意志で自発的に作業に参加したので、「寸志夫」と呼ばれています。

この時に村人が川底を掘ったのは、初田と出間の二ヶ所でした。これは、波介川の全長から言うと、ごく部分的なものでした。しかし、これ以降、村人は村を水から守るためには藩に頼るだけではなく、自分たちも応分の協力をしようというようになりました。

「寸志夫」を実行するために見事な組織が作られていました。村々に差配役が組頭級から選ばれて、銀、米、その他の調達をしました。責任者の庄屋は現地に詰めました。また、監督に来る郷廻の役人の接待から祈禱のための神官や僧侶の接待、さらに角力場の設置、角力取りの宿割りからはじまって警備まで行き届いていました。経費については、地主、富裕層が負担していました。

封建社会の中で人々は忍苦を強いられながらも自覚を高めていたのです。このような村人の熱意が藩に届かないはずはありません。その後、藩による波介川の改修工事につながることになりました。

真覚寺地震日記（高知県土佐市）

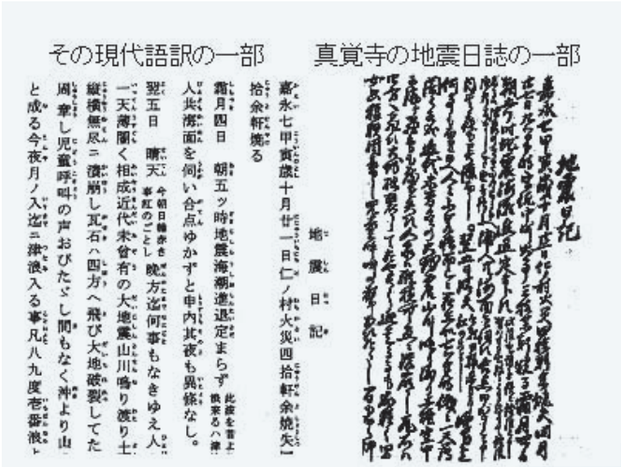
嘉永七年（安政元年・一八五四）一一月四日の安政東海地震発生の翌日、五日の安政南海地震の土佐市宇佐町の様子が真覚寺の住職の日記に次の様に記されています。

翌五日晴天。今朝は太陽がまるで紅のように赤い。晩方まで何事もありませんでしたが、午後五時頃にわかに空が薄暗くなり、未曾有の大地震が山川に鳴り渡り、土煙が空中にまん延し、飛ぶ鳥も度を失いました。人家は縦横無尽に崩れ、瓦は四方に飛び、大地は破裂して容易に逃げることもできず、男女はただ狼狽し、子どもは泣き叫びました。

間もなく沖から山のような大波がやって来て、宇佐、福島一面が海となりました。今夜月の入りまでに津波がおよそ九度押し寄せ、一番目の波から二番、三番の引き潮で浦中がみな流されました。総じて地震の時の潮は、進むときは緩やかで、引く時は急です。福島と中須賀の間は家が一軒も残らず、渭ノ浜の山際まで波が入っていきました。宇佐は流れ、残った家はわずかに六〇軒であり、このうち二〇数軒を除いては、家は残っているものの、修繕はできないほどになりました。

波が来た時に、諸道具を捨て置き山に逃げた人はみな命が助かり、金銀雑具に目をかけ油断した者はことごとく溺死しました。流死した人は福島で五〇余人、宇佐で一〇余人に及びました。

経験則に基づく地震日誌の教えに学ぶこと



▲真覚寺日記解説書

宇佐湾を望む真覚寺▶

背　景

高知県の真覚寺には、「地震日記」九巻と「晴雨日記」五巻からなる「真覚寺日記」が保存されています。これは、当時の住職であった井上静照師が、安政東海地震が起こった嘉永７年（1854）11月４日から慶応四年（1868）までの15年間にわたって記した日記です。ここでは、嘉永７年11月５日に起こった安政南海地震に関する記述を現代語訳にして概要を示しています。

アクセス　真 覚 寺

- 宇佐漁港より東北東へ直線距離約200m
- 土佐市宇佐町宇佐
- 緯度経度　北緯33度27分10秒，東経133度27分13秒

昭和三〇年代以前

昔から大小何回かの津波の洗礼を受けてきた宇佐では、先人がその経験を通してつかみとった尊い教訓を残してくれています。安政の大地震の時の津波は、波頭（なみがしら）が萩谷の入り口まで来たということから、その地に記念碑が建てられています。その碑文の中にこう記されています。

「昔宝永の変にも油断の者 夥敷（おびただしく） 流死の由、今度もその遺談を信じ取りあえず山手へ逃登る者、皆恙（つつが）なく、衣食等調度し又は狼狽して船にのりなどせるは流死の数を免れず可哀哉」（昔、宝永地震の時に油断した者が溺死しました。今回の安政地震でも、昔の話を信じて山に逃げ登った者は無事でしたが、衣類、食料などを気にかけて逃げ遅れた者や慌てて船で逃げようとした者などは溺死しました。あぁかわいそうな話です）

過去の体験から、津波の時にはまっしぐらに山へ逃げよという教えが宇佐では言い伝えられています。このことが、昭和地震でも活（い）かされて、他の地域に比べて宇佐では死者が少なかったという結果につながっています。

▲津波の洗礼を受けた宇佐湾

背　景

昭和21年（1946）の南海地震後の津波は、土佐市の宇佐地区に壊滅的な被害をもたらしました。津波の害を受けない者は一人もいないと言われるほど大きな被害でした。しかし、宇佐町の被害には、他の地域と比べて特色がありました。それは死者が少なかったということです。その理由は、津波を経験した昔の人たちが後世に尊い教訓を残してくれているからだと言われています。

アクセス　安政地震の碑

- 宇佐漁港より西北西へ直線距離約１km
- 土佐市宇佐町宇佐萩谷地区
- 緯度経度　北緯33度27分20秒，東経133度26分17秒

弟のおかげ（高知県土佐市）

昭和南海地震の当時、土佐市宇佐町に住んでいた人の体験談に基づく話です。

とにかく凄い揺れでした。前の空き地へ一斉に飛び出しましたが、身動きが取れません。家族全員が身体を支え合って、必死に耐えて地震をやり過ごしました。やがて激しい揺れも治まり、私たちは家へ入りホッとしたのも束の間、下の弟が突然「直ぐに津波が来る。早く逃げんと大変なことになる！」と、私たちに避難を促しました。母も私も津波への危機意識は全くなく、「えっ、なんで？」と疑心暗鬼の状態でしたが、弟は委細構わず行李を持って来て、「早く、この中へ大事な物を入れて」と急かします。「お母ちゃん、何を入れようかね」母も私もたんすの前でただオロオロするばかりでした。「早よう家を出ないかん」必死の弟に急かされて、結局、着の身着のままで家を後にしました。

近くの山への避難は、弟の機転で私たちが一番でした。その後、近所の人たちも続々と避難して来ました。皆、大慌てで私たち同様、着の身着のままです。余程慌てたらしく、素足の人、左右の履物が違う人、と混乱していました。特に驚きましたのは、最後の最後に避難して来た人たちのズボンや着物、モンペの裾部分が一様に海水に濡れていました。聞くと「津波に追いかけられた」とのことでした。まさに間一髪のところで、津波の来襲から逃れた人たちでした。

背　景

昭和21年（1946）南海地震後に、逃げ遅れたため津波に襲われて亡くなった人が多数いましたが、地震後に「早く逃げんと大変なことになる」という弟の言葉に従ったために、津波被害を免れた家族もいました。高知市春野町の仁西郵便局では、昭和南海地震の体験を風化させまいと、地域の人々から体験談を聞いて、とりまとめています。この話は、当時21歳だった女性の証言をもとにしています。

アクセス　震災復興記念碑

- 宇佐漁協前
- 土佐市宇佐町宇佐
- 緯度経度　北緯33度27分01秒，東経133度26分33秒

みこしの漂流（高知県須崎市）

宝永四年（一七〇七）一〇月四日の大地震による津波で、須崎の八幡宮は水深四メートル以上となり、社（やしろ）の大部分は水中に没し、倒壊しました。このため、神社のみこしが潮の流れに乗って太平洋を漂い、流れ流れて五日目の一〇月八日に伊豆の岩地に打ち上げられました。

土地の人が見つけ、遠く須崎八幡宮のものであることが分かりました。みこしは村人と神官が丁重（ていちょう）に祭り、保管されていました。須崎八幡宮がこのことを知ったとしても、津波による大きな痛手を受けており、数百里も離れた伊豆までみこしを受け取りに行くことは困難だったことでしょう。

安田浦の回船業の長左衛門がこれを聞き、伊豆の岩地に廻船し、みこしを須崎にお返し願いたいと申し入れました。村人と相談した神官は、おみくじにより神意をお伺いしたところ、ご帰国したいお告げが出たそうです。

そこで、長左衛門は、別れを惜しむ村人や神官の了承を得て、船に積み込み、宝永五年六月四日に伊豆を出航し、鳥羽港（三重県）に着きました。鳥羽港で志和浦の回船業の弥一兵衛の船に積み替えられて、六月一五日に須崎八幡宮宛の送り状が添えられて、みこしは須崎に向けて出航しました。

みこしが須崎八幡宮に正式に受け入れ奉納されたのは、その年の九月一一日のことでした。

背景

宝永４年（1707）10月４日、日本最大級の宝永地震が発生しました。津波が紀伊半島から九州までの太平洋沿岸などを襲い、死者は２万人に達したと言われています。この中で津波の被害は土佐が最大でした。須崎では八幡神社のみこしが津波に流され、太平洋を漂流して伊豆に流れ着きました。八幡神社の木札には、宝永津波やその後の様子やみこしが伊豆に流されたことなど、また、みこしが返還された時の送り状が記されています。

アクセス　須崎八幡神社

- JR須崎駅より南西へ直線距離約１km
- 須崎市南古市町
- 緯度経度　北緯33度23分21秒，東経133度17分10秒

宝永津浪溺死之塚（高知県須崎市）

「宝永津浪溺死之塚」には、後世の人が津波被害に遭わないように、以下のような内容が記されています。

宝永津波の犠牲者の一五〇年忌を準備している最中に、安政南海地震が起こりました。人々は宝永地震の津波のことを知っていたので、我先に山林に避難しました。このため、安政南海地震の時には昔のように津波の犠牲者を出さずに済みました。ただ、船で避難しようとして、津波で転覆して三〇余人が亡くなったことは痛ましいことです。

なぜ津波の時に船で避難しようとしたのかというと、昔からの言い伝えの中に、山に登ろうとして石に打たれて亡くなったという話や、沖に出た人が無事帰ってきたという話があり、それを間違って解釈したためです。津波が来る前に早く沖に出るのなら安全だったでしょうが、地震にあった後に船出をすることは危険なことです。

地震が起きたら津波があると考え、油断してはいけません。しかし、地震が起きたらすぐに津波が来るというものではありません。（注：この記述は間違いであり、地震後すぐに津波が来ると考えるべきです。）少し間はあるので、揺れの様子を見計らいながら、食べ物、衣類等の用意をして、石の落ちてこない高所を選んで逃げることです。その時も山の頂上まで登る必要はありません。今回の津波でも古市神母の辺りでは屋敷に水は入らなかったし、昔の津波でも伊勢が松で数人助かったと言われています。津波と言ってもそれほど高いものではありません。

一五〇年に二度も同じようなことが起こったのだから、考えないといけません。将来もこのようなことが起こると考えなくてはいけません。後世同じようなことに遭遇する人の心得になればと思い、みんなで議論してこの石碑を建て、そのことを記して下さい、と私はお願いしたのです。そこで私はおおよそのことをこの石碑に書き記したのです。

▲むかしから津波被害を受けてきた須崎湾

背　景

須崎市に「宝永津浪溺死之塚」という石碑が建っています。安政南海地震の２年後の安政３年（1856）につくられたものです。宝永元年（1704）の宝永地震津波で亡くなった400人余の亡骸を改葬する際に、150年忌を記念して建立されたものです。作者の古屋尉助という人は、この石碑に地震津波に遭遇した時の心構え、教訓などを記しています。

アクセス　宝永津浪溺死之塚

- JR須崎駅より西へ直線距離約１km（お馬神社すぐ南）
- 須崎市西糺町
- 緯度経度　北緯33度23分42秒，東経133度17分03秒

長女が津波に奪われた（高知県須崎市）

昭和二一年（一九四六）の南海地震を体験した人の話です。

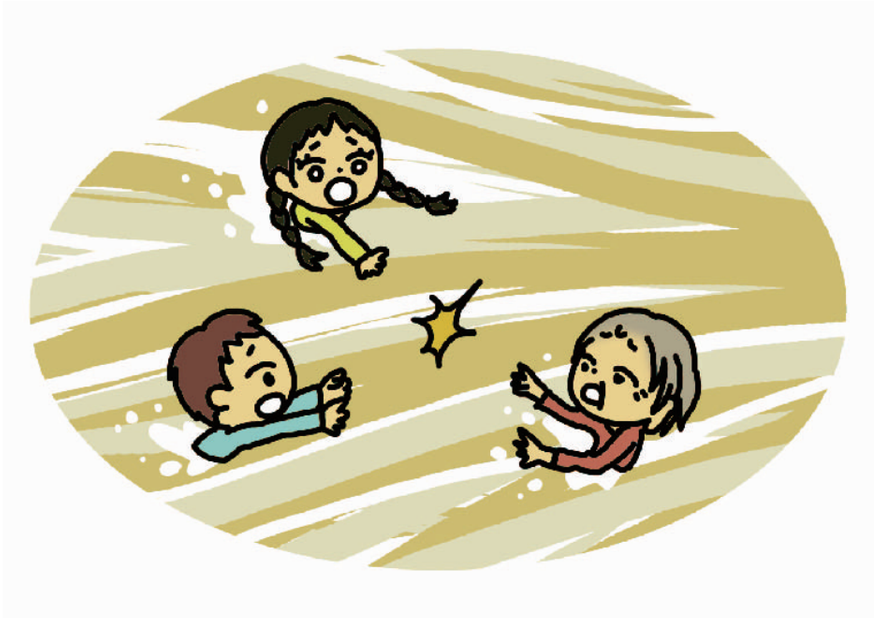
歳もおし迫ったあの日、午前四時頃、まだあたりは暗い。震動はなかなか止まりません。寝ていた老人、子供を大声で起こしました。やがてどこかで「おーい津波ぞー。逃げよー」と叫ぶ声、今考えると貴い言葉でした。

私たちは寒さをしのぐため、まず衣服を探して身に着けていました。その間に、刻々時はたっていきました。子供二人を老母につけて、一足先に家を出し北に向け、城山公園へ逃げるようにしました。

私たちも時を移さず後を追いましたが、三〇メートル位北へ行ったと思う頃、北の方からゴーゴーと大きな音をたてながら、津波らしい大波がやってきました。急流のような波は、膝から腰、腹、胸へと、どんどん深くなりました。これでは押し流されて溺れるかも知れないと方向をかえて西向けに、屋根へはい上がり、軒から軒へと伝い渡り、ようやく公園の登り口までたどり着きました。

「母と子供はどうなったか」と気が気ではありません。やがて、夜が明け、波も引き去り、山を下りました。幸いに母と長男は驚きと悲しみと寒さにふるえながらも帰っていました。三人は家を出た後、津波に見舞われ、つないでいた手は断たれて間もなくばらばらになったそうです。長男は近くの電柱につかまっていたところを隣の人に助けられ、母は屋根にかけ上がり潮の引くのを待っていました。しかし、長女はどこへ行ったか分かりません。

途方に暮れて重い足を引きずり家に帰り、家財道具を動かしていると、土間の箱の下に長女の哀れな悲しい姿がありました。思わず抱き上げましたが、もう冷たくなっていました。「皆いっしょに出かけたら、こんなことにならなかったのに」と、ただ止めどなく涙があふれてきました。



背　景

昭和21年（1946）12月21日午前４時過ぎ、南海地震が発生し、地震発生後10分ほどで須崎湾に津波が押し寄せたようです。その津波の速度は時速25kmにもなったと言われています。津波の到来に逃げ遅れた人々は流木などが流れる中を逃げまどい、須崎で40余名の犠牲者を出しました。この話は、地震後逃げるのが遅くなったため、子ども二人を老母に預けて先に逃げるようにしたところ、三人が津波に襲われ、辛うじて老母と弟は助かったものの、６歳の長女を亡くした父親の話です。

アクセス　津波之碑（須崎橋）

- JR須崎駅より南へ約300m
- 須崎市新町
- 緯度経度　北緯33度23分27秒，東経133度17分37秒

突然の激流（高知県四万十町）

明治二三年（一八九〇）、四万十川中流の四万十町窪川で起こった出来事です。

二、三日前から降り続いた雨は、しだいに激しくなり篠つく豪雨となりました。特に四万十川上流の東津野、梼原郷は水量がものすごく、谷川は増水して氾濫し濁流は山肌をえぐり、山々の山腹から水が突き出て、山崩れが起きました。

水は谷あいや平地の家々に溢れ、近辺の田畑もみるみる水没しました。上流から根こそぎの流木が押し寄せ、牛馬が流され、遂には住家まで、ものすごい勢いで川下に流される有様でした。

しかし、夕方になると四万十川の水は急に引き始め、さらには急に止まるほどとなり、やがて西の方から陽が差し出したのです。川の水はどろ濁りでしたが、普段と少し違う程度でようやく落ち着きを取り戻していました。松葉川や西川角などでは近所の人々が道端に集まり、すさまじかった水の出方を話すなどの光景も見受けられました。

ところが、それから一、二時間たったと思われた時刻に、にわかに大音響が起きました。すさまじい山鳴りがとどろき、大激流が田畑、家屋を押し流し、その大濁流の中を人々は無我夢中で家の裏山や丘へ逃げまどい避難しました。比較的平地にある流域の集落はほとんど水没し、牛馬が流され、不意をつかれた人たちは数多くの死傷者を出しました。家もろとも家人もそのまま流され、家の草葺きの屋根の上にしがみつきながら助けを求めていたという悲惨な状況でした。

上流の東津野村で山崩れが起こり、土砂が川の水をせき止めていましたが、貯まった水の量に耐えきれなくなり、土砂が崩壊して一気に下流に流れて、大被害をもたらしたのでした。

背　景

明治23年（1890）９月11日に四国地方を横断した台風は、四万十川流域に大雨をもたらしました。豪雨は流域の各地に洪水被害を招きましたが、急に水位が下がり、天候も回復してきました。人々が安心した時、大音響とともに四万十川沿いに激流が押し寄せ、大被害が発生しました。後になって分かったのですが、四万十川上流の東津野村で山崩れが起き、土砂が川の水をせき止めていましたが、貯まった水の量に耐えきれなくなり、せき止めていた土砂が崩壊して一気に下流に流れて、大被害をもたらしたということです。

アクセス　明治23年水害碑

- JR窪川駅より北西へ直線距離約２km
- 四万十町仕出原　高岡神社境内
- 緯度経度　北緯33度13分14秒，東経133度07分28秒

念仏堰（高知県黒潮町）

黒潮町の加持川の堰は、川の水が増えるたびに切れていました。そこで村人は人柱を立てることにしました。昔は堰が決壊するのは祟りのためで、人柱を立てて祈禱することにより堰が守られると考えられていたのです。村人は縦縞に横縞の継ぎ当てをした着物を着て通る人を人柱にすることに決め、あちらこちらの道の辻などへ立ち、縞の着物を着た人が通るのを待ちました。

毎日毎日捜しましたが、どうしても遭うことができませんでした。ところが三、四日たったある日の夕方、年配の遍路さんが足早に通りすぎようとしました。着物は縦縞でした。この人も横縞の継ぎなど当てているはずがない、と思いながら通りすぎようとする遍路さんを見ると、なんと横縞の継ぎあてをしているではありませんか。

村人は、その遍路さんの足を止め、事のいきさつを話し、人柱になっていただくことを祈る気持ちで懇願しました。遍路さんは天に向かって祈り始め、しばらく祈ってから急に口を開き、「私は天涯孤独です。この世に生きるだけ生きて来ました。もう残りわずかですから、大勢の皆さんのお役に立てることがありましたら、喜んでお引き受けしましょう」と言いました。村人はよろこび、その遍路さんを迎え入れ、丁重にもてなしをするとともに、その夜は涙ながらに別れを惜しんで夜を明かしました。

翌日、村人は堰のそばに大きな穴を掘り、遍路さんを入れました。穴からは節を抜いた大きな竹の筒が地上に出ていましたので、竹筒の底からは「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と読経が聞こえ、それに唱和して地上でも「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と竹筒の声が聞こえなくなるまで、三日三晩祈り続けました。こうして堰はできあがり、人柱の霊力により怨霊の怒りは鎮まり、大洪水でも絶対に堰が切れることがなく、大旱魃でも不思議に堰の水が涸れることがなくなりました。それ以来誰言うとなく、この堰を「念仏堰」と呼ぶようになりました。

背景

昔、高知県黒潮町の加持川の堰は、川の水が増えるたびに切れていました。村の人々は堰が決壊するのは祟りのためで、人柱を立てて祈禱することにより堰が守られると考えました。しかし、誰を人柱にするのかとなると、みな口をつぐんでしまいました。その中で、ある村人が、昨夜見た夢の中で、神様から「遠からずこの辺りを、縦縞の着物を着て、それに横縞の継ぎを当てた人が通る。その者に人柱として立つことを頼むが良い」とのお告げがあったことを話しました。村人はこの話に賛同し、縞の着物を着た人を待つことにしたのです。

アクセス　念仏堰（加持川）

- 土佐くろしお鉄道土佐入野駅より北へ直線距離約２km
- 黒潮町加持
- 緯度経度　北緯33度02分37秒，東経133度00分40秒

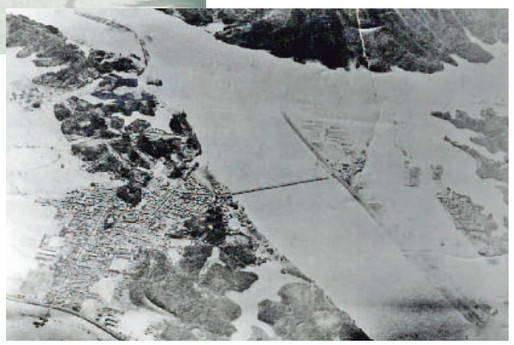
阿鼻叫喚の夜の避難（高知県四万十市）

「全没した中村の町は、阿鼻叫喚のちまたと化した」と昭和一一年（一九三六）幡多郡東山村（現在の四万十市安並付近）の助役は語っています。

「いよいよ大時化となったぞ」渡川と後川の増水がはなはだしいので、老人たちが「明治二三年（一八九〇）ほどの洪水になるぞ」と言いだした。水位はますます高くなる。拙宅（安並にあった自宅）の下の民家の荷上げの手伝い、豪雨の中の作業はみんな懸命であった。人は皆高い家に避難した。夕方になってその家が流れるというので、屋根へ上がって綱で近くの大木に繋ぐ。西久保の民家の二階がつかり、やがてその家も全部流れてしまった。このとき初めて家の流れるさまを見た。屋根の丸瓦が沈むまでは流れないが、屋根の瓦が見えなくなると浮いて流れる、無惨な光景であった。（中略）

それまでに二七日の夕方、急に後川右岸が破堤して、中村町（現在の四万十市中村付近）に洪水が流れる椿事が起こった。町の警察、消防団、幡多支庁、町役場は驚いて、警察は半鐘をならして緊急避難を伝えた。驚いた町民は夕方の雨中、奔流の中を古城山、一条神社、天神さま、土生山へ我先と避難。（中略）町の人達も明日は大水で堤防が切れるという警報に、死にものぐるいであったという。その晩公園山（古城山）その他では、野宿、町内全域停電で、真暗闇の中を懐中電灯をたよりに各自助け合いつつ避難した。夜中の懐中電灯の光とざわめきと叫びは夜の明けるまで公園山に続いた。阿鼻叫喚とはこのことか、後川を隔てた私の家には台風の中とぎれとぎれに聞こえた。今でも私の耳の中には、その声が聞こえてくるようである。

▲昭和10年洪水の浸水状況
（四万十市百笑）



昭和10年洪水の浸水状況▶
（四万十市中村）

背　景

昭和10年（1935）８月27日、台風による降雨が強まり、渡川（四万十川）と後川が甚だしく増水しました。具同では28日午前７時に3.70mの水位が、翌29日には最高12.07mに達しました。27日の夕方、後川堤防が破堤し中村のまちは全町水に没し、大海のようになりました。また、破堤したのが夕方で満水が夜中であり、死にものぐるいの阿鼻叫喚の中での避難にもかかわらず、一人の死者も出なかったことは全くの驚異であると伝えられています。

アクセス　一条神社

- 土佐くろしお鉄道中村駅より北西へ直線距離約1.5km
- 四万十市中村本町
- 緯度経度　北緯32度59分27秒，東経132度55分03秒

燃え上がった火の手（高知県四万十市）

昭和二一年（一九四六）当時、女学生だった人の記録に基づく話です。

ふと目が覚めました。置時計を見ると、四時でした。「まだ早いな」と思いながら、またうとうとし始めました。ガタガタと障子のゆらぐ音がして、少し揺れました。「地震だ」と直感したとき、ふすま越しに兄が「起きているか」と言って、庭に面したガラス戸を開け、外に出た気配がしました。少し心細くなって、私もついて外に出ました。寒かったので、思わず一枚の布団をかぶって出ました。

兄の傍（そば）まで行った時、突然大きな地の底からのような鳴動（めいどう）がして、大揺れが来ました。揺れはだんだんひどくなり、兄と抱き合ったまま地面に投げ出されました。足をすくわれ転がされたような感じでした。畑の中へころがりこみ、二人で頭から布団をかぶりました。この世の終わりかとばかり思われて生きた心地がしませんでした。

気がつくと、辺りはまた元の静けさに戻っていました。「あっ」と思わず声をあげました。私たちを呼ぶ母の声に駆け寄り、三人で一枚の布団にくるまりました。

「これで火事さえなかったら」と言っている近所の人に、あいづちを打っていた時、突然近くから火事が起こりました。火はみるみる広がりました。親を呼ぶ子、子を探す親、火の回りが早いため救出できずに生きながら火にまかれ焼け死んだ人など、本当にこの世の地獄でした。

母をかばいながら、安全な場所に避難しました。ようやく明けかけた町の姿は、昨日までとは全く違い無残な光景でした。

背　景

昭和21年（1946）12月21日午前４時過ぎ、大地震が地盤の軟弱な中村のまちを襲いました。当時の全町２千余の家屋のほとんどを全半壊させ、夜明けまでに町は廃墟となりました。間もなく町中から燃え上がった火の手が拡大し、町並みを焼き払いました。渡川鉄橋も両端を残して墜落して、中村の町は壊滅に近い状態になりました。この話は、当時、女学生だった人の記録に基づくものです。

アクセス　南海地震碑

- 土佐くろしお鉄道中村駅より北西へ直線距離約３km
- 四万十市中村　為松公園内
- 緯度経度　北緯32度59分49秒，東経132度55分47秒

おろよ、おろよ（高知県四万十市）

今から一〇〇年以上前の明治二三年（一八九〇）、四万十川沿いでの出来事です。

大暴風雨によって四万十川が大洪水になる恐れが出てきたため、屋敷の低い家屋は高台に家財道具や牛馬を避難させて、万一の大洪水に備えました。我が家では二階に上げていた米俵を、屋根を抜いて上の畑地に引き上げました。

米俵をあげてホッとするとき、つないでいた子馬が道からすべって、川に転落してしまいました。これを見た女たちは声を揃（そろ）えて、「おろよ、おろよ」（おろとは馬のこと）と必死の声を振り絞って呼びましたが、子馬は泳いで家に帰ろうとして、そのうち流れに流され出しました。

水泳達者な祖父も泳いで助けに行くことができず、人々は「おろよ、おろよ」と呼ぶほかはありませんでした。幸いにも子馬は親馬のいななきによって、頭の向きを変えて泳いで帰ってきました。

動物とは言え、あの大洪水に親馬のいななきによって、流されずに親の元に帰ってきた親子の絆は、この時の人々の感情に刻み込まれました。子馬が上がってくると、親馬は長い舌でなめまわし、子馬は救われたと喜んでいます。大暴風雨、大洪水の中での感動的な出来事でした。

背　景

明治23年（1890）は初夏から天気が順調で、作物は近年にない豊作でした。ところが、９月９日午後から降り始めた雨は10日にはやや激しくなり、さらに11日には豪雨となり、四万十川と後川の水量は増加しました。このため、中村のまちは、低地はもちろん、上町や本町辺りでも瞬く間に浸水しました。この洪水は昭和４年（1929）に着工される渡川（現在の四万十川）改修工事の計画の規模を決める洪水となりました。この話は、母馬（ははうま）のいななきによって子馬が救われた親馬子馬の話です。

アクセス　後（うしろ）川

- 土佐くろしお鉄道中村駅より北北西へ直線距離約２km
- 四万十市安並
- 緯度経度　北緯33度00分00秒，東経132度56分07秒

再起不能か（高知県四万十市）

昭和南海地震は、中村一万町民の暁の夢を破り、恐怖のどん底につき落としました。また、揺れる暗黒の家からようやく戸外に逃れ出た人々を霜の上にコロコロと転がし、怒濤のような物凄い音をたてて、全町二千余の家屋をほとんど全半壊させました。もうもうとたちこめた土煙は救いを求める悲痛の叫びを呑み込み、一瞬のうちに町を修羅の巷とさせ、夜明けまでには完全に町を廃墟にしてしまいました。

まだ明けやらぬ地震直後、あちこちで人家が火を発して人々を狼狽させましたが、いずれも周囲に空き地があって他への類焼を免れ鎮火しました。しかし、間もなく町中から燃え上がった火の手はみるみるうちに家々に燃え移り、猛火となって凄惨な光景を呈し、計六十余戸を焼き払ってようやく鎮火しました。

白日のもとに見る中村市街地は何と悲惨な光景だったことでしょう。焼け跡からはもうもうと煙が上がり、町中のほとんどの家屋が全壊、半壊の状態でした。国民学校なども無惨に倒壊し、渡川鉄橋（通称赤鉄橋）もトラス部分八径間のうち、両端を残して六径間が落橋していました。

中村は再起不能かというのが人々の実感でした。

▲南海地震で落橋した渡川鉄橋（提供：四万十市）

背　景

昭和21年（1946）12月21日午前４時過ぎ、突如襲った大地震とその後の火災は、中村のまちに壊滅的な被害をもたらしました。旧中村市の被害状況は、死者・行方不明者291人、負傷者1,065人、家屋の全壊1,919戸、半壊1,372戸、焼失163戸に及びました。人々は、中村の町は再起不能かと思うほどだったと言われています。

アクセス　赤 鉄 橋（四万十川）

- 土佐くろしお鉄道中村駅より西北西へ直線距離約２km
- 四万十市中村
- 緯度経度　北緯32度59分24秒，東経132度55分40秒

義民（ぎみん）・中平宗兵衛（なかひらそうべい）（高知県四万十市）

今から三〇〇年以上も前のことです。中筋川沿いの国見村（現在の四万十市国見付近）は元禄一三年（一七〇〇）、一四年（一七〇一）、一五年（一七〇二）と連続の大洪水で、村人は山を売り、田を売り、屋敷を売って、草の根まで食べて命をつないでいる状態でした。明けて宝永元年（一七〇四）、今年こそはと思っていると、七月に三度の洪水に遭い、絶望のどん底におちいりました。しかし、こんな年でも役人による検見は受けなければなりません。

宗兵衛は老役の弥助と相談して、検見役に凶作地ばかりを見せて、年貢を少しでも少なくしてもらうことを計画しました。検見役が来た時、二人は「国見の七まがり」という道の谷にある劣等地を見せたり、上作地の「森の松」と劣等地の「沖の松」を取り替えて、減免を願ったりしました。それは村人のための苦肉の策で、誰一人として密告する者はいないと思われましたが、その時、東の丘の上から「宗兵衛、弥助は森の松と称して検見方をだます者」と叫ぶ者がいました。役人は感づいて二人に詰問（きつもん）しました。

二人は、永年の凶作に村の困窮は極限に達していると述べ、特別のご慈悲を願いましたが、聞き入れられず、役人は二人を捕らえようとしました。弥助は逃げることができましたが、宗兵衛は捕らえられ、高知に護送され、宝永二年（一七〇五）二月一二日斬罪（ざんざい）に処せられました。

しかし、宗兵衛の死は、検見方を反省させることになりました。宗兵衛の訴えが聞き入れられ、国見の土地は捨地として明治九年（一八七六）の地租改正まで減免され、村人の生活に偉大な功績を残しました。村人は宗兵衛の徳を慕（した）い、社殿を建ててその霊を祀（まつ）りました。これが若宮神社（現在は天満宮に合祀（ごうし））です。

▲中筋川と国見地区を望む

背景

義民とは、一身を犠牲にして世のため人のために尽くした人のことです。中筋川流域では、昔から水害が多発して、農民は困窮（こんきゅう）していました。国見村の庄屋だった中平宗兵衛は村人に対して耕作に精を出すよう励ますとともに、藩に対しては田畑が浸水した時には捨地として年貢を納めなくてもいいように働きかけていました。三年連続の大洪水で村人が困窮している年に、またもや洪水が起こりました。この年の検見（役人が来てその年の作柄から税金を決めること）に際して、宗兵衛は村人のためを思い、検見役に凶作地ばかりを見せて、年貢を少しでも減免（げんめん）してもらうように計りました。

アクセス　天満宮

- 土佐くろしお鉄道国見駅より西へ直線距離約１km
- 四万十市国見
- 緯度経度　北緯32度58分49秒，東経132度52分48秒

救ったのは人のつながり（高知県土佐清水市）

平成一三年（二〇〇一）の高知西南部豪雨を体験した土佐清水市下川口浦の区長の体験談です。

私は下町に住む友人から浸水の知らせを受け、すぐに区長場に入り、マイク放送で下町と中町に避難命令を出しました。それは、九月六日午前四時過ぎだったと思います。

各戸に避難を大声で呼びかけながら、河口にある水門を閉めるため消防団員三名と向かいました。水門にたどり着きましたが、水門を閉めるのを諦めました。集落内の各溝（みぞ）を通じて大量の水が川に流れ出していたからです。地区内住民の安全確保のため、消防団員と連携しながら、全戸を歩いて避難を呼びかけました。

その時、下町と中町では床下浸水、床上浸水までの家も多くあり、住民は次々と避難所に集まって来ていました。消防団員は二、三人でチームを組んで住民の安否（あんぴ）確認のために巡視していました。独居老人宅を訪ね、一人、二人と救助しました。懐中電灯を手に、しのつく雨と稲光りの中での声かけでした。

明け方になって下川口橋に流木や家具、布団、畳等がかかり、川の流れを完全にせき止める形となり、その水が集落内に流れこんできました。下・中・上の各町筋が川となり、見る見る内に民家の一階部分まで水没し、堤防は決壊し、船だまりの小舟は流され、車は目の前を何台もが浮かんでは消えていきました。

住民の安否の確認のため、明るくなった地区内を首まで水につかりながら、全戸に声かけをしました。道路の中央部分を歩き、流れて来た三、四メートルもの竹を手にして、玄関や窓などをノックして回りました。

▲老人を背負って避難

背　景

この話は、犠牲者ゼロ水害の住民行動の様子を体験談に基づいて描いたものです。平成13年（2001）９月５日夜から秋雨前線が停滞し、翌６日未明にかけて高知県西南部では集中豪雨が発生しました。降水量は、大月町で総雨量577ｍｍ、24時間雨量520ｍｍ、時間最大雨量110ｍｍを観測するなど、記録的な大雨となりました。この水害は「寝耳に水」の危険な災害にもかかわらず、死者・行方不明の出なかった特徴的な水害でした。土佐清水市下川口浦の区長の行動から、一人の犠牲者も出すことがなかった要因をうかがい知ることができます。

アクセス　平成13年水害の碑（宗呂川）

- 土佐清水市役所より西へ直線距離約12km
- 土佐清水市下川口橋南詰め
- 緯度経度　北緯32度47分00秒，東経132度50分28秒

駐在さん、駐在さん（高知県土佐清水市）

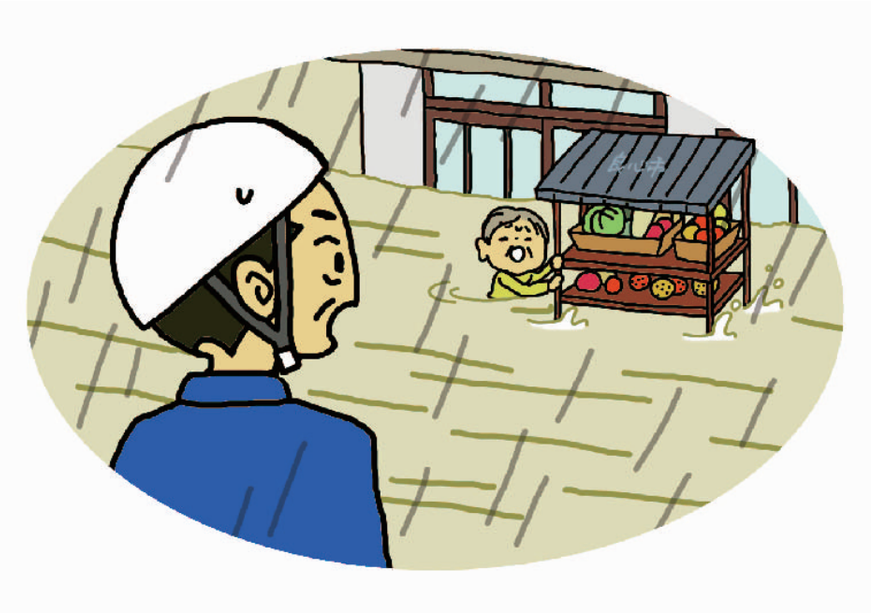
平成一三年（二〇〇一）の高知西南部豪雨を体験した駐在さんの話です。

私はパトカーを高くなった所に移動させ、すぐに駐在に戻りました。すると、外線電話が鳴り出しました。電話に出ると「前のおばあちゃんを見に行ってください」と叫ぶような声が聞こえてきました。

私はすぐに駐在の向かい側に住む八四歳のあのおばあちゃんのことだと思いました。このおばあちゃんは心臓を患（わずら）った独居老人で、いつも私に声をかけてくれるきさくな人です。この時、既に駐在所内の水深は一メートル位になっており、私は腰まで水に浸かりながら外に出て、おばあちゃんの家の方を見ました。するとおばあちゃんは自力で家から出てきたのか、家の前にある良心市（無人販売所）の棚につかまり、私の方を向いて必死に助けを求めて叫んでいました。

おばあちゃんの声は、雨と雷と付近の人の叫び声に遮（さえぎ）られ、私の耳に届くことはありませんでしたが、「駐在さん、駐在さん」と言っているように思えました。私はその姿を見た瞬間、無我夢中でおばあちゃんに向かって走り出していました。走り出すと言っても、駐在前の道路は既に私の胸の高さにまで水が増えていましたので、少しずつしか前に進めませんでした。

何とかおばあちゃんの元に辿（たど）り着き、おばあちゃんを右脇に抱え、胸の高さにまで増水して濁流のようになった道を泳ぐようにして駐在へ向けて進みました。既に道路に足のつかないおばあちゃんは、私の負担をどうにかして軽くしようと、八四歳の体力を振り絞って足を動かし、言葉にならない声で私に何か言っていました。その声は聞き取れませんでしたが、おばあちゃんの目を見れば、何を言わんとしているか分かりました。必死の思いでおばあちゃんを駐在の近くの支所に避難させ、急いで駐在に戻りました。



背　景

平成13年（2001）９月５日夜から秋雨前線が停滞し、翌６日未明にかけて高知県西南部では集中豪雨が発生しました。土佐清水市の宗呂川の水位は急激に上昇し、川沿いの県道もまるで川のような状態になりました。この話は、川のようになった県道の向こう側にいるおばあちゃんを救出した駐在さんの話です。駐在さんとおばあちゃんの無言の会話に、お互いを思いやる気持ちが表現されています。

アクセス　下川口駐在所前

- 土佐清水市役所より西へ直線距離約12km
- 土佐清水市下川口
- 緯度経度　北緯32度47分05秒，東経132度50分28秒

驚天動地（きょうてんどうち）の津波高（高知県宿毛市）

嘉永七年（一八五四）一一月五日、空はよく晴れ、寒気も厳しい朝でしたが、昼からは暖かく、よい天気でした。夕日が片島の上に落ちようとした時に、突然大地震が起こりました。

この後、日没までに二回、夜中に七、八回も地震があり、宿毛の町の家は、大半つぶれ、その上に火災が発生して、大変な騒動（そうどう）となってしまいました。家が潰れる度に土煙があがり、人々は火事だと騒ぎました。しかし、津波が来るといって皆が騒ぎ出したので、火を消そうとする者もなく、宝物一つ取り出す者もなく、皆が一目散に山上へ逃げ上がりました。

そのうちに、大きな潮音とともに津波が押し寄せ、八反（約九〇メートル）の大堤を通り越え、一丈（約三メートル）程も水田の中に潮が入り、日の入り頃までに宿毛の町の中にまで潮が来ました。この津波の騒ぎで、人々は山上に逃げており、出火をしても消すものもいなかったため、火勢はいよいよ盛んになり、本町、真丁、牛の瀬、沖須賀、仲須賀の大半は焼けてしまいました。

大島は四日の朝、小地震（注：安政東海地震が一一月四日に起きている。）で潮が差したので、注意していたため怪我人はありませんでしたが、津波は鵜（はいたか）神社の石段七段まで上がり、洞泉寺の障子端まで来ました。潰れた家は極めて多く、流れた家は一三、四軒でした。

六日も何回か小地震があり、津波も来ましたが、町の入り口までで大したことはありませんでした。

七日の昼過ぎ、かなり大きな地震があり、小地震は何回もありました。人々は和守（みこもり）神社の付近に仮小屋を建てて夜を過ごし、殿様は人々に炊き出しを行いました。夜中にも何回かの小地震があり、津波も来たので、人々は安心して眠ることができませんでした。

宝永南海地震の津波高を▶
表示している大島小学校

背景

嘉永７年（1854）11月５日の大地震は、この年が甲寅（きのえとら）の年であるため「寅の大変」と言われ、また11月27日に改元されて安政元年となったため「安政の南海地震」とも言われます。この地震については、宿毛市の浜田家に「甲寅大地震御手許日記（きのえとらだいじしんおてもとにっき）」という記録があり、当時の地震とその後の様子をうかがい知ることができます。なお、嘉永７年の地震では、津波は大島の鵜（はいたか）神社の石段７段まで上がったことが記されています。さらに宝永４年（1707）地震の津波はそれ以上に大きく、石段42段の高さにまで達したことが記録されています。

アクセス　鵜（はいたか）神社

- 土佐くろしお鉄道宿毛駅より南西へ直線距離約２km
- 宿毛市大島
- 緯度経度　北緯32度54分57秒，東経132度42分13秒

この話は、高知県で「土木神の化身」と呼ばれるほど堤防や堰、新田開発、港湾などの土木工事を行った野中兼山が宿毛のまちを洪水から守る堤防（総曲輪）を様々な工夫をして築いた話です。

総曲輪は、河戸堰から下流の松田川右岸を取り巻く堤防で、延長二、八〇〇メートル、幅員六～一〇メートル、高さ四～六メートルの大規模なものです。野中兼山の命により、幡多郡七万石の全地域から人夫を集め、宿毛の侍たちがその監督に当たって工事を行ったものです。

それまで宿毛を流れていた支流をせき止め、川幅を広げて一本の川にまとめるための工事は並大抵の苦労ではなかったに違いありません。伝承によると、兼山はどんなに寒い日でも仕事を休まさず、「荒瀬の川が凍ったら休ませてやる」と言い、人夫たちは「雪や降れ降れ、あられも降れ降れ、荒瀬の川が凍るまで」という絶望的な詩を口ずさみながら工事を続けたと伝えられています。

兼山は、宿毛側の護岸に水勢をはねかえす「はね」を設け、水勢を対岸の和田や坂ノ下に向けるように工夫をしていました。また、宿毛対岸の古川口に水越堤防を設け、和田・坂ノ下の堤防を、宿毛より二～三メートル低くして、洪水が氾濫した時は、先にこの堤防を越えさせ、和田、坂ノ下を水没させて水位を下げ、宿毛の安全をはかるようにしていました。このため、この工事以後、和田、坂ノ下両村の水害が絶えることがありませんでした。

藩政時代には領主の居る宿毛に抗議することは許されませんでした。和田の人々は高い台地に家を建てて、住家を水害から免れるように工夫していましたが、水田は年々被害を受けていました。このため、和田の人々の中に兼山の悪口を言う人がいるとも言われています。

背景

宿毛のまちを守るために、野中兼山は万治元年（1658）に松田川右岸に「総曲輪」と呼ばれる堤防を築きました。それと同時に、松田川左岸側の堤防を低くし、いざという時には左岸側に水が流れるようにして、宿毛のまちを守っていました。封建時代には左右岸の堤防の高さに違いを設けることにより、重要度の高い地域を守るための対策がとられていたのです。

アクセス　河戸堰（松田川）

- 土佐くろしお鉄道宿毛駅より北東へ直線距離約２km
- 宿毛市中央
- 緯度経度　北緯32度56分23秒，東経132度43分51秒

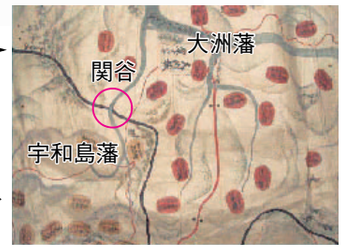
逆倒竹（さかしまだけ）（愛媛県大洲市）

ある年、大変な日照りが続いて、田んぼの稲は枯死寸前（こしすんぜん）という事態に陥（おちい）りました。こうなると、水の一滴は血の一滴です。水を惜しんだ久米川上流の宇和島領の農民は、川の流れをせきとめて、大洲領へは流れ込まないようにしてしまいました。困ったのは下流の農民です。水を分けてくれるようにと、たびたび掛け合いましたが、だめでした。なにしろ、死活に関する問題ですから、事がおだやかに済むはずがありません。おきまりの水争いとなり、けが人が出る騒動も絶えません。

このことを知った大洲の殿様は、「これほど大洲領の農民が難儀（なんぎ）をしているのに、水を分けてくれないというのなら、今後宇和島領の水は一滴たりとも大洲領には入れさせない」と、さっそく、関谷地区に大きな土手を造らせました。この土手が出来上がったときに、奉行がその様子を報告しますと、殿様は、わざわざこの土手の出来ぐあいを見に来られて「なかなかよく出来た。これならば、水は一滴ももれないだろう」とおっしゃりながら、手にしていた竹の杖を地面に突き立てられました。

その後、次第に雨も降りはじめましたが、今度は弱ったのが上流側の人達です。何しろ、関谷地区に大きな土手を築いて、水の流れをせき止められたものですから、水のはけ場がありません。川を溢（あふ）れた水が次第に溜まって、村全体が水没してしまいそうです。いまさらのように驚きあわてましたが、どうにもならないので、とうとう大洲の殿様にお詫びをし、今後はいっさい川をせき止めたりはいたしませんという約束をして、土手をとりのけてもらいました。

このあたりの竹は、大洲の殿様が堤防に突き立てた竹杖から根を出し、次第に茂ったものと言われています。殿様が竹杖を逆さまに付きたてたものですから、この付近の竹はみな枝葉が逆さまに出ているのです。



関谷周辺の古地図（「伊予一国之絵図」（大洲博物館保管）の一部、加筆）▶

背景

この話は、大洲市を流れる肱川の支流久米川の流域が舞台となっています。久米川は、大洲城の下流で肱川と合流しています。江戸時代には、久米川の流域は、上流が宇和島藩、下流が大洲藩の領地でした。しばしば、渇水になることがありましたが、両領民は久米川の水を分け合い、どうにか渇水を凌（しの）いでいました。この境界にあたる関谷は、両側から山脚が迫り、宇和島藩と大洲藩を分けていました。

アクセス　水争いを記録した石碑のある圓満寺

- JR西大洲駅より西へ直線距離約200m
- 大洲市阿蔵
- 緯度経度　北緯33度30分27秒，東経132度31分25秒

愛媛県大洲市の大洲盆地は、昔から水害の常襲地帯として有名でした。盆地内の集落は、洪水の被害をさけることを最も優先した場所が選ばれてきました。昭和四〇年ころまでの航空写真では、盆地の低地には集落はほとんど見られず、大部分が山すそに沿った比較的高い場所に帯状にならんで立地しています。大洲盆地の低地に開けた若宮の集落は、肱川の自然堤防上の微高地に立地していたため、洪水のたびに、多くの家が浸水する被害を受けてきました。

肱川沿川の集落では、地域を洪水から守ろうとする土手（小規模な堤防）を築きましたが、闘う相手が余りにも大きかったため、全村が水没するという水害からは解放されませんでした。そのため、ここに住む人たちは、家の石垣を出来るだけ高く積み立てるようにして浸水に備える生活を続けてきました。中でも若宮では洪水への備えが特に厳重で、全ての家が二階建てでした。また床を地面より七〇から八〇センチメートルも高くし、壁には腰板を張って保護し、一階は板張りの間として重要な家具は二階に置いた家が多くありました。また、大洪水に備えて、若宮の上組・中組・下組の地域ごとに二箇所ずつ神社や寺院、庄屋などの屋敷全体を高くして高石垣を築き、水をよける場所としていました。さらに避難用の船なども用意していました。

こうした高石垣の屋敷は地域が浸水した時の避難地の役割を担っていたのです。地域の中で最も高い造りとなっています。現在でもそのような「水防場」が多く残っており、大洲市若宮町にある須賀神社などがそうです。まさしく、水害に備えた究極の危機管理対策そのものであり、暮らしを守るために生まれた「暮らしの知恵」です。

▲水よけ場（須賀神社）

▲壁に腰板をはった民家（大洲市若宮）

背　景

この話は、あらがうことのできない肱川の洪水と共生するために生まれた水防の知恵に関するものです。肱川流域は手のひらのような形をしており、肱川が貫流する大洲盆地に多くの支流が流れ込んでいます。このため、大洲盆地には川の水が集中し、雨期にはいると毎年のように肱川が氾濫し、水害に見舞われてきました。この大洲盆地の集落では、定期のように襲って来る洪水への備えとして、家の床を地盤より高くし、壁には腰板をはったり、一階を板間だけにしたりする水防建築などの知恵を生みだしました。

アクセス　須賀神社

- JR伊予大洲駅より北北東へ直線距離約100m
- 大洲市若宮
- 緯度経度　北緯33度31分13秒，東経132度32分45秒

豫州大洲洪水噺（よしゅうおおずこうずいばなし）（愛媛県大洲市）

大洲藩の記録で肱川の水位が大洲で最大を示した文政九年（一八二六）の大洪水の時のことです。

この年五月二〇日より雨がしきりに降り出し、翌二一日にはさらに大雨となり、あたかも車軸を流すようになりました。夕暮より川の水がにわかに増加し、堤が二ヶ所崩れ、水が溢（あふ）れて三里に一里の広野が海のようになりました。前代未聞の洪水です。大洲城の東にある燕門という見上げるほどの大きな門に洪水が渦巻いて、とびらが二枚とも流れてしまいました。土地が低い所では、水に浸かった高塀の上を自由に舟が乗り越えるほどでした。

中町の川寄屋という酒屋は昔の丑寅の洪水のことを考えて石垣を高くしましたが、今度も水浸しになり、家財をすべて濡らしてしまいました。長門屋という酒屋では蔵の酒桶（さけおけ）が傾き、下人が残らずこれにかかり切りになり、畳はもとより衣類、道具、そのほか多くを水に浸し、脇差七〇腰が壊れました。大事な時なので、翌日から役所に出勤しなければいけないのに、脇差がないので徳の森屋という所で借りることになったそうです。塩屋町の松屋という紺屋（こうや）（染め物をする家）の打盤（うちばん）（衣類を棒でたたいて柔らかくする木製の台）は、長門屋の茶の間に流れ込んでいたので、後で四人がかりで引き取りにいきました。奈良屋という門屋（女子などが住む小屋）は居宅も蔵も壁が崩れて破れ、あらゆるものが流れ、客も家の者もようやく逃げて、命が助かる有様でした。

こういう状況ですので、みな二階または屋根の上にいて、のどが渇いても呑（の）み水もなく、男子は窓から小便をし、汚いこと極まりない状態です。家ごとに壁が崩れ落ち、囲いもまばらなり、油も切れ、灯心もなくなり、盗賊が徘徊（はいかい）する始末です。犬は水が増すにしたがい、屋根の上に登り、水が引いた後、下ろしてやる人がいないため、屋根の上をはい回り吠えていました。

背景

肱川には、大洲藩主の加藤家が元禄元年（1688）から万延元年（1860）の172年間にわたって、水番２人を置いて交代で昼夜水位を観測させた記録が残っています。この中で最大の水位を、文政９年（1826）５月21日の大洪水で記録しており、三丈三尺一寸（約10m）に達しました。この話は、この時の洪水の様子を描いたものです。

水位観測はその後、愛媛県や国に引き継がれ肱川には300年を超える水位の記録が残されています。

アクセス　大洲城

- JR伊予大洲駅より南南西へ直線距離約１km
- 大洲市大洲903
- 緯度経度　北緯33度30分34秒，東経132度32分39秒

人伝えの情報の大切さ（愛媛県大洲市）

平成一六年（二〇〇四）の台風一六号による水害発生当時、私は防災行政無線により水位状況や避難勧告に関する情報を伝達していました。その日は朝方から強い雨が降り始めました。夕方になると雨は一段と強くなり、肱川の水位は急激に上昇しはじめ、警戒（けいかい）を要する水位には一七時ごろ達しました。その後も水位は想定以上の速さで上昇し、二〇時頃には、さらに一メートル四〇センチも上昇し、河川による氾濫の危険がある水位に達していました。

二〇時五〇分に市全域に自主避難勧告を発令することになりました。しかし、その時にはすでに予想を超える高さまで水位が上昇しており、上流の三地区で放送の前に無線設備が浸水してしまい、その地区に避難勧告の情報を周知、伝達することができなかったということが、後で分かりました。

深夜一時に肱川の水位は最高となり、六メートル八五センチに達しました。警報施設は、平成七年（一九九五）の浸水実績を考慮して高さを決めていましたが、平成一六年の洪水はさらに一メートルも高く、戦後二番目の水位を記録しました。

今回一番考えさせられたのは、どうすれば災害に関する情報を早く正確に市民に周知、伝達できるかです。情報通信技術に依存する手段も考えられますが、やはり最終的に大切なのは、地区住民同士の共助の精神ではないでしょうか。区長や水防団の方々を中心に独居老人、障害者、子どもなど、どのような人がどのような場所に住んでいるかを把握（はあく）し、情報伝達に関するネットワークづくりをしていくことが一番大切であると感じています。

▲平成16年の洪水による浸水状況（大洲市東大洲）

▲平成16年の洪水による浸水状況（大洲市西大洲）

背　景

平成16年（2004）８月の台風16号は、大洲市に１日の雨量の記録更新となる179mmの大雨をもたらしました。肱川の水位が上昇し、肱川橋では危険水位（現在は、はん濫危険水位と呼ぶ）5.80mを超える6.85mを記録しました。このため、大洲市では床上浸水73棟、床下浸水91棟という被害が発生し、住民約200人が避難しました。この話は、当時大洲市で住民に避難勧告に関する情報を伝える役割を担っていながら、思うように伝達することができなかった人の体験談です。

アクセス　無線設備が浸水した付近（逆なげ橋（肱川））

- JR伊予大洲駅より南東へ直線距離約３km
- 大洲市菅田
- 緯度経度　北緯33度30分22秒，東経132度35分34秒

今は堤防ができていますけど、昔は地盤も低いし、護岸（ごがん）を痛めんように、竹藪（たけやぶ）を生やしておったんですよ。堤防がなかったから、川の水位が上がると、氾濫してこっちの土地の水位も川と高さが変わらんようになりました。

昭和一八年（一九四三）の時には家の二階まで水がつきました。本家が直線距離で一〇〇メートルほどの山手にあって、親父が舟に乗せてくれたのを覚えています。でも、うちも二階建ての家だったから、下が浸かっても上で居れる状態だったんで、そう何度も本家に避難することはありませんでした。

しかし、昭和二〇年の時には、本家に避難することになりました。親父は兵隊に行っていておりませんでした。今の堤防がある所に家があって、その裏の物置に水がついたら舟が浮くようになっていたんで、私が舟を出したんですが、子供だったからようあやつらなんだですよ。

堤防ができる前までは、年中行事みたいに浸かっていました。昭和一八年、二〇年だけじゃなくて、時々舟を出すことはあったですよ。

同じ五郎でも下が低いので、下から順々に水が来るんですよ。「来たな」という感じですよ。下と比べると、ここが浸かるまでは若干時間的には余裕があるんです。そのうち下からだけでなく、上流からも水が来て家の前辺りで合流し出して、やがて川と一緒みたいになるんですよ。その時代には父が「五郎では住めんようになりそうだの。高い所の人はええわな」と言っていました。

避難用の舟▶

昭和三〇年代以前

背　景

肱川は、愛媛県の北西部に位置し、その源流を愛媛県西予市の鳥坂峠（標高460m）に発し、宇和盆地、野村盆地、大洲盆地を貫流し、伊予灘に注ぐ愛媛県一の大河川です。肱川は、その名が示すように中流部で‘ひじ’のように大きく曲がっており、河川の延長は103kmあるのに対して、源流から河口までの直線距離は、わずか18kmしかありません。肱川は、大洲盆地に入ると勾配（こうばい）がゆるくなるため流れが弱くなり、洪水氾濫が昔から頻発（ひんぱつ）していました。

アクセス　五郎地区堤防（肱川）

- JR伊予大洲駅より北東へ直線距離約１km
- 大洲市五郎
- 緯度経度　北緯33度31分36秒，東経132度33分10秒

昭和南海地震では、津波により太平洋沿岸で甚大な被害が発生しました。津波は佐田岬を回りこみ瀬戸内海沿岸にも来襲しましたが、その記録は多くありません。これは、愛媛県大洲市長浜での津波の浸水の様子を当時学生であった人が記録した貴重な記録です。

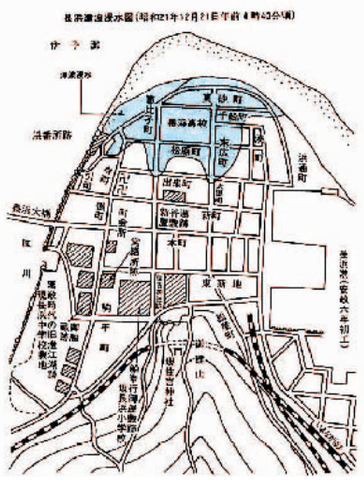
昭和二一年（一九四六）一二月二一日の午前四時過ぎ地震が発生しました。汽車で松山へ通学していた私は、いつも起きる四時過ぎに玄関へ出てみると、家の前には潮がさしていて、水深三〇～五〇センチメートルはありました。

通学のために家を出るのは、五時一〇分頃なので、朝食をすませて五時頃に、長靴をはいて表通りへ出てみると、やはり路面上二〇センチメートルはあります。静かに潮位が上がった感じでした。五時過ぎ駅へ向かおうと、遠まわりして潮が引いていると思われる道を選んで駅に向かったのです。

この潮位が一メートル上がった記録がどこにもないのが不思議です。それによる被害の話も聞いておらず、網納屋で網が濡れた程度です。

学校から帰って一人で歩いて痕跡調査をしました。町のあちこちに潮が来ていたことが分かりました。氷屋の証言から、実際には長浜港沿岸にも潮が上がったことが分かりました。

▲昭和南海地震で浸水した肱川河口部（大洲市長浜町）



▲昭和南海地震による津波の浸水記録
（「災害予防と防災知識」より引用、加筆）

背　景

東南海・南海地震により発生した津波は、日向灘（ひゅうがなだ）を通り、佐田岬を回りこみ、瀬戸内海に入ってきます。中央防災会議のシミュレーションによれば、東南海・南海地震により四国の瀬戸内海沿岸部で、高いところで２～５ｍ程度の津波が来襲（らいしゅう）することが予測されています。昭和21年（1946）の南海地震は、徳島県や高知県などの太平洋沿岸に大きな津波被害をもたらしました。ところが、その被害があまりにも大きいため、瀬戸内海の津波が取り上げられることはまれです。

アクセス　長浜港

- JR伊予長浜より西へ直線距離約200ｍ
- 大洲市長浜町長浜
- 緯度経度　北緯33度36分56秒，東経132度28分56秒

江戸時代の中ごろ、明和元年（一七六四）の夏、村の農民は台風のことが心配になり始めました。精魂こめて育てた稲も、台風が来て洪水になれば台無しです。下三谷村のある者が言いました。「下の南黒田村の連中が堤防をこさえたそうだ。洪水になったら、今度はわし等の田んぼが浸からんだろうか」この言葉を聞いた村人たちは急に心配になり始めました。ある晩の寄り合いで話は決まりました。八月二日の午後三時、下三谷村の村民七、八〇〇人が大谷川の南黒田村の堤防の両岸に立ち並び、大声をあげながら堤防を壊し始めました。南黒田村の村民はなすすべもなく、ただ見守るばかりでした。

もともと、大谷・八反地両河川が出合う堂ノ口あたりは水はけが悪い土地でした。しかも、南黒田が新谷藩領、下三谷村が大洲領に分けられ、大谷川の治水政策が統一的に実施され得なかったところに禍根(かこん)がありました。大洲領の上流の下三谷・北黒田村では嵩上(かさあ)げが行われましたが、新谷領の下流の南黒田村では、なんの対策も講じられませんでした。そのため南黒田は洪水があれば河水が氾濫し、人家や田地は大きな被害を受けていました。その被害を防ぐため、南黒田の人々は自力で堤防の嵩上げを行ったのです。しかし、先に述べたように自分たちが汗水ながして嵩上げした堤防は壊されてしまったため、下三谷村の理不尽さを藩でとりあげてもらうよう、南黒田の百姓一統が庄屋・組頭に嘆願した記録が残っています。

その後、大洲藩は自領である砥部庄大南村と、新谷藩であった南黒田村との替地を幕府に願って、天明元年（一七八一）許され、翌二年南黒田村は大洲領となりました。こうして、天明四年頃には、大谷川流域の築堤も完成し、水論の禍根は絶たれることになりました。

背　景

現在の伊予市立伊予中学校の前を流れる大谷川は、上流からの土砂の流出が多く、山地から低平地に出ると川の流れが弱まって土砂を堆積させるため、天井川となっています。このため、氾濫頻度は高く、大谷川の上流と下流の人々が水防をめぐって対立し、堤防を切り崩したり、堤防の嵩上げをしたりしていました。この地域は大洲・新谷両藩に分けられており、大谷川の治水行政が統一的に行われていなかったため、この対立は増幅されました。

アクセス　ウエルサンピア伊予公園前（大谷川）

- 伊予鉄郡中線新川駅より東へ直線距離１km
- 伊予市下三谷1761-1（ウエルサンピア伊予）
- 緯度経度　北緯33度46分13秒，東経132度42分51秒

世のため人のために一身を犠牲にして尽くした人のことを「義民」と言います。

明和八年（一七七一）夏は大干ばつでした。六月八日、八倉・徳丸・出作・宮之下・上野の下五ヵ村の農民七〇〇人が堰を切り落としたため、上麻生村の二〇〇余名と矢取川で乱闘となりました。この乱闘で死者二名と多数の重傷者を出しました。

水争いに関係した村々は、上麻生村と八倉村は大洲藩領、下麻生村は新谷藩領、徳丸村と出作村は松山藩領、そして宮ノ下村と上野村は幕府領でした。騒ぎが大きかったことと、天領から死者が出たため、一二月には勘定奉行から、関係者を備中代官へ差し出す命令が下されました。各村の庄屋・組頭・百姓代など三七〇余名が、翌明和九年（一七七二）二月に役人付き添いで郡中港を出発し備中へ出頭しました。当時、備中代官所陣屋は倉敷にあり、出張陣屋が笠岡に設けられていました。

吟味（ぎんみ）を受けた者のうち、上麻生村と下麻生村の者は初めから加害者扱いで牢舎（ろうしゃ）につながれましたが、他の者はいずれも宿預かりという形でした。乱闘の際のことですので、首謀者も加害者も明らかになるはずもありませんが、審理が長く続く中で、下麻生村の組頭兵右衛門が自分が首謀者であると名乗り出ました。村のみんなを助けるために我が身を犠牲にしたのです。

安永三年（一七七四）二月二三日、倉敷の判決で兵右衛門は死罪となり、その刑は即日執行されました。三五歳でした。砥部町八倉集会所前には兵右衛門の辞世の句碑が置かれています。

「如月（きさらぎ）のあわれたずねよ法の道」

背景

明和８年（1771）、上下麻生村（あそうむら）と下五ヶ村（八倉・徳丸・出作・宮之下・上野）の水争いが起こり、死傷者が出ました。宮之下村と上野村が幕府領でしたので、裁判は幕府が直接備中（現在の岡山県南西部）で行いました。上下麻生村の者ははじめから加害者扱いされ、審理は長く続きました。この中で、下麻生村の組頭・窪田兵右衛門は郷里のことを考え、一身を犠牲にして首謀者（しゅぼうしゃ）と名乗り、倉敷の刑場で処刑されました。兵右衛門は義民として、砥部町八倉集会所裏の墓地に手篤（てあつ）く葬られています。この明和水論を契機として、赤坂泉がつくられました。

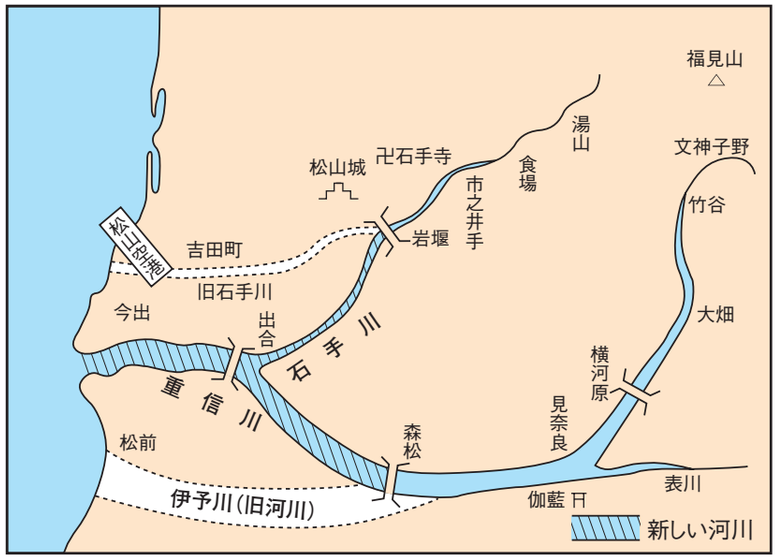
アクセス　窪田兵右衛門の墓と碑

- 松山ICより南西へ直線距離約1.5km
- 砥部町八倉210　砥部町の八倉集会所
- 緯度経度　北緯33度47分12秒，東経132度46分29秒

四〇〇年も前の昔の話です。当時の松山道後平野は伊予の国の中心地でした。この松山平野は毎年のように水害が発生し、住民達はほとほと困り果てていました。そこに新しい殿様としてやってきたのが、加藤嘉明（よしあきら）公です。殿様は住民達の苦労をみて、すぐに家来に川の改修を命じました。当時、重信川は伊予川と呼ばれていました。

川の改修を命じられたのは足立重信という重臣です。足立重信は川の改修のすぐれた技術を有していました。それでも伊予川は名うての暴れ川です。そのため改修工事は困難を極めました。中流から流路を北へ移すとともに、松山市の石手寺の近くにある岩堰（いわぜき）と呼ばれる場所の固い岩盤を掘り割って石手川の流れを変える工事は大変でした。何せ岩盤を人力とツチ（ハンマー）とノミで打ち砕いていきますから一日かけても少ししか割れません。暑い日も寒い日もみんなで力を合わせて何とか岩盤を掘り終わった時の喜びようと言ったら歓声が天に届くほどのものでした。このような努力を積み重ねて、川の改修工事は無事に終わりました。その後、何年かして、今まで降ったことがないような大雨に見舞われました。住民達は大洪水が起こるものだと観念しました。しかし、一夜が明けて青空の下、堤は全然壊れていません。この光景を前にして住民達はみんな驚きの声を上げました。

これ以降、松山平野は大した洪水に襲われることもなくなったので住民達は大いに感謝しました。そして、いつとはなしに伊予川を重信川と呼ぶようになりました。これは暴れ川を治めた足立重信に心より感謝してのことです。人の名前がついた川は全国でも唯一です。そして今でも地元の人たちは足立重信の墓の掃除とお参りをかかしません。足立重信の功績は今でも人々の心に深く焼き付けられています。



▲重信川・石手川の付け替え（加筆）
（「四国の先覚者とその偉業」から引用、加筆修正）

背景

松山を流れる重信川は、愛媛県東温市東三方ヶ森（標高1,233m）を源流とし、延長36kmの河川です。司馬遼太郎は、「街道をゆく～南伊予・西土佐の道～」の中で重信川についてこう記しています。「日本の河川で人名がついているのは、この川だけでないか。……領内の重要な河川に家臣の名をつけるなど、よっぽどのことであったろうと思われる」

重信川の流域には松山市をはじめ東温市、伊予郡が広がり、古くから社会・経済・文化の中心地であり、治水施設が整備される以前は甚大な土砂災害が発生していました。

アクセス　足立重信の墓所

- JR松山駅より北東へ直線距離約２km
- 松山市御幸1-525　来迎寺境内
- 緯度経度　北緯33度51分22秒，東経132度45分58秒

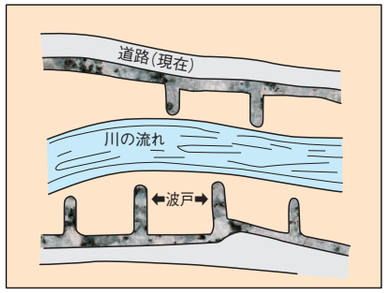
重信川の由来にもなっている足立重信は、松山藩の居城を松前城から今の城山である勝山に移すにあたり、城下を流れていた石手川の氾濫による災害から城下を守るために、石手川を岩堰（いわぜき）から新たに川を掘って出合で重信川に合流させました。

重信は、掘削をせずに両側に堤防を設け、浅く川幅の広い川にしました。しかし、石手川は急流で洪水時には水とともに大量の土砂が流れてきます。このため、土砂が川の中に堆積し度々川浚（かわざら）えが必要となり、また川の流れが堤防を削り、水害をもたらしていました。

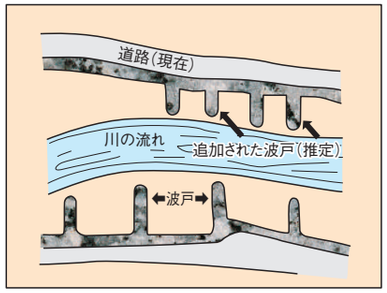
石手川が付け替えられておおよそ百年後の享保二年（一七一七）、西条の浪人であった大川文蔵が松山藩に召し抱えられました。最初は、石手川の川浚えの普請組（ふしんぐみ）として見習いの立場にあったようです。

享保六年、七年に大洪水があり、手腕が認められて大川文蔵が改修をまかされました。文蔵は石手川筋を見渡し、川が深ければ水害を免れることができると考えました。そこで、享保八年から一四年にかけて従来からあった千鳥掛けの波戸（はと）（堤防から川の中央に向かって出した構造物。水制）を、両岸から一ヶ所に突き出す波戸に改修しました。この結果、文蔵が予想した通り流水は川の中央を流れ、堤防を痛めることなく次第に川が深くなっていきました。

以降文政八年（一八二五）の洪水被害まで百年間ほど大きな被害がなかったようです。大川文蔵の川の特性を考慮した河川改修によって、今日の石手川があると言われています。



▲千鳥掛けの波戸（推定）



▲文蔵によって改修された波戸

▲現在の石手川

背　景

石手川は重信川の支川で延長は28kmあります。石手川は古くは城山の北側・城北地区を流れていたこともありますが、足立重信による付け替え工事が実施された時には道後公園から松山東高校付近を流れ、城山の南側の二番町を経由して市役所付近を通り、そこからほぼ真っ直ぐ西へ流れて松山空港付近で伊予灘に注いでいたようです。付け替え工事後に旧河道は、埋め立てられ耕地となってしまいました。上流には、石手川ダムがあり、洪水調節と松山市民の水を担っています。

アクセス　波　戸

- 伊予鉄石手川駅すぐ
- 松山市立花　石手川公園内
- 緯度経度　北緯33度49分47秒，東経132度46分04秒

重信川には菖蒲堰があり、そこから田んぼの水を取っていました。菖蒲堰には、上堰と下堰がありました。渇水の時には、上流の上堰で水を取ってしまうので、下流の下堰では水が取れなくなってしまうことが度々ありました。そこで、渇水の時には下堰側の集落は、上堰側の集落に依頼して、上堰の取水を控えて下流に水を流してもらう「大落水（おおおちみず）」という取り決めがありました。明治九年（一八七六）の水争いは、下堰側が請求した大落水が、上堰側の都合で遅れたことに原因がありました。

六月三〇日、上堰の落水が遅いため、下堰側の農民は怒り、数百人が堰を切り崩すという実力行使に出、双方に負傷者が出ました。早速、巡査や戸長らが仲裁に入りましたが解決に至りませんでした。七月四日になって巡査本署から仲裁案が提示されましたが、上堰側は「全ての田んぼの灌水（かんすい）は不可能で、苗も枯らせてしまう」として応じませんでした。そこで七月七日に下堰側の村々は、愛媛県権令岩村高俊（いわむらたかとし）に解決を依頼しました。

愛媛県は調査を行い、上堰側に対して「八月三日の午後六時から同月七日午後五時までの九六時間、三カ村へ大落水を執行せよ」と命じ、八月一〇日には今後の大落水について下堰側に対して「菖浦堰分水は従来からの明確な規定はなく、年々臨時処分をして分水する慣行であるので、そのままこれを据えおくことにする。しかし、今後は役場が指導して、上下の水勢を見計らい、水量を加減して配水をし、特別に用水が不足すれば大落水を実施する」というような通知を出し、また上堰側にも「下堰側に用水が特に不足したときに臨時差配をするよう区長にも達しておいたので、その指示に従うこと」というような指示をしました。

背　景

堰からの取水は当時の農民にとっては死活問題で、水争いが繰り返されてきました。そうした対立の中で生まれた約束が「大落水」です。「大落水」は、四日四夜を一区切りとして行うもので、その請求は何度でもできましたが、その執行権は上堰地区にありました。この話は、明治９年（1876）の菖蒲堰（しょうぶぜき）をめぐる水争いの様子を伝えたものです。

この他に、堰の修理についての約束もありました。昔の堰は、土砂と木で作られていたので、水漏れがありましたが、この漏れた水も下流にとっては大切な水だったからです。

アクセス　菖 蒲 堰（重信川）

- 川内ICより北へ直線距離約３km
- 東温市山之内
- 緯度経度　北緯33度49分25秒，東経132度54分03秒

大崩壊物語（愛媛県東温市）

自然への畏敬の念を忘れぬこと

昔、音田に気立ての優しい娘がいました。娘が一八の春、河之内金比羅さんの縁日に友達と参詣に出かけました。参拝の帰り道、雨滝神社にも立ち寄りました。娘達は渕のほとりでしばらく休憩しましたが、そのうち、娘は大切にしていた櫛を思わず渕の中に落としてしまいました。しかし、拾うことはできず、後ろ髪を引かれる思いで帰りました。

ある夜、娘の家に見知らぬ若者が櫛を持って訪れました。男は色白で面長の美青年でした。娘は大喜びで、両親も快く若者を家に入れてもてなしました。若者と娘の間にはほのかな恋が芽生え、若者は毎夜のように会いに来るようになりました。しかし、なぜか若者のまなざしは鋭く、どこか冷たく漂う妖気があることに娘は気づきました。不審に思った娘は、ある夜意を決して男の肌を傷つけました。驚いた若者は闇の中に逃げ去りました。娘はことの次第を両親に打ち明け、血の跡をたどっていくと、雨滝の渕のそばで消えていました。

その頃、娘は身ごもっていました。やがて生まれた子は、蛇の子でした。驚いた一家は、思案の末に皿ヶ森の麓に葬ってしまいました。そのことを知った雨滝の蛇の精は嘆き悲しみ、黒雲を呼んで竜となって天に昇りました。すると一天にわかにかき曇り、雲は雨を呼び、竜の口は稲妻を吐き、号泣は雷となって天地にとどろきました。豪雨は七日七晩降り続いて、皿ヶ森に地鳴りが起こり、その後山津波が山裾を襲い、人家を押しつぶしました。

人々は竜神様に一心不乱に祈願しました。すると、豪雨が止み、土砂も流れ去りました。人々は竜神様の加護を信じ、祠を建てて祈り、その悲話を後世に伝えています。

背景

松山自動車道で松山から高松に向かうと、桜三里パーキングエリアを越えてしばらくして左手（北側）に皿ヶ森（標高634m）が見えてきます。この付近を中央構造線が通っており、たいへん脆い岩質となっています。今から200年前、この地域を襲った豪雨により皿ヶ森の南斜面で大崩壊が発生しました。崩壊した土砂は土石流となって下流の音田の集落を飲み込み、本谷川をせき止めました。

アクセス　竜神を祀った祠

- 川内ICより北東へ直線距離約５km
- 東温市松瀬川地区
- 緯度経度　北緯33度48分53秒，東経132度56分58秒

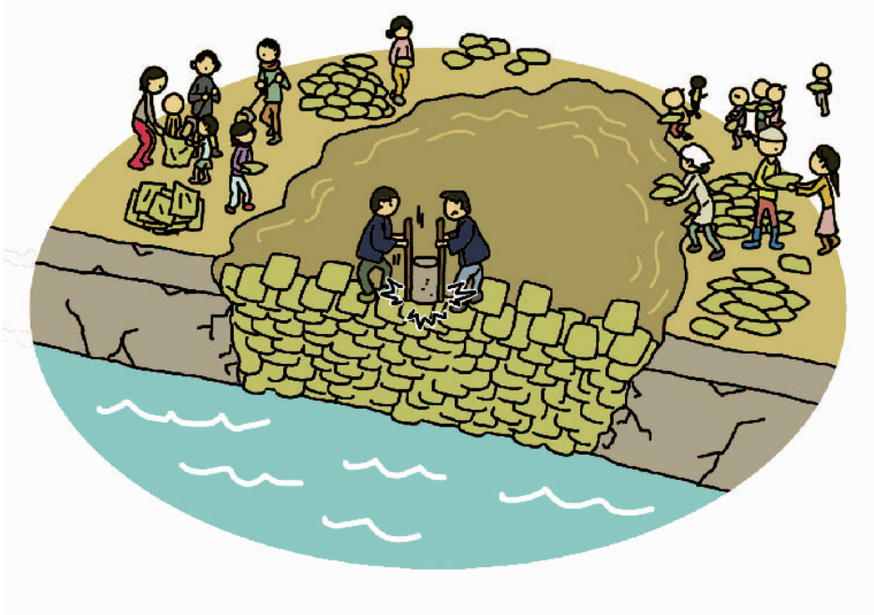
四度目の成功（愛媛県西条市）

昭和二五年（一九五〇）、日本の国土が敗戦で荒廃しきっていた頃の出来事です。キジア台風と呼ばれる大型の台風によって、愛媛県西条市の広江川口の海岸堤防が決壊しました。決壊した堤防から海水がどんどん流入し、街中に流れ込んで、家々に浸水し始めました。

堤防からの浸水を阻止（そし）するために、消防団員を中心として町の女性や子どもに至るまで総動員して土のうを投げ込みました。しかし、積み上げた土のうは想像を絶する波力の前に瞬（まばた）く間に破壊され、また大量の海水が流入し始めました。消防団員たちは落ち込む暇もなく、土のう作りを再開し、再度、堤防に積み上げました。今度はしばらく持ちこたえたもののやはり自然の猛威（もうい）の前に破壊しつくされました。さらに三回目に積み上げた堤防も同様でした。

三回も積み上げて、消防団員たちの体はさすがに疲労の極に達していました。誰もが、これはもう無理ではないかと思い始めていました。しかし、最後の力を振り絞って、四回目の土のう作りと投入に取り組みました。やっとの思いで堤防を積み上げたとき、人々にもう力は全く残っていませんでした。みんなは祈るような思いで修復した堤防を見つめていました。

台風の荒波に今にも壊れそうになりながらも堤防は持ちこたえることができました。これを見守っていた人たちから誰とは無しに歓喜の声が上がったのは言うまでもありません。



背　景

昭和25年（1950）９月13日、中心気圧940hPaのキジア台風が九州に上陸し、その後、中国地方の西端から日本海を北東方向に進み、九州・四国に甚大な被害をもたらしました。昭和21年（1946）の南海地震による地盤沈下のため海岸堤防の補強が十分できていなかった頃で、台風による高潮のため海岸地帯に大被害が出ました。この話は、堤防決壊のため大被害を受けた広江地区などの様子を記したものです。

アクセス　広江川河口

- JR壬生川駅より東へ直線距離約３km
- 西条市広江
- 緯度経度　北緯33度55分29秒，東経133度07分03秒

平成一六年（二〇〇四）の台風二一号の時、西条市の水防本部で対応に当たった人の体験談です。

今まで経験したことがない大雨の中、西条市の水防本部の電話は鳴りっぱなしです。「道路が土石流で壊れて逃げ出せない」、「家の裏山から滝のように水が流れ出して、今にも山が崩壊しそうだ」、「家の前の川があふれて家の中に流れ込んでいる」などとせっぱ詰まった声で市民からの救援依頼が次々に飛び込んできます。未曾有（みぞう）の大災害です。

その中で谷の出口にある障害施設からの電話は深刻なものでした。「谷の沢水がものすごく増水している。今にも土石流が発生しそうだ。土石流に襲われたら施設の多くの入居者が犠牲になる。施設の担当者だけではどうにも避難させられない。一刻も早く助けに来て欲しい」とのこと。

「そうだ、あそこは確かに危険だ」ということで水防本部では、この電話を受けるやいなや消防団や地域の人たちにすぐに応援を求めました。そして、「土石流に襲われる前に何とかしなければ。とにかく間に合ってくれ」と天にも祈る気持ちで急いで救助に向かいました。

現場に着くと水は深いところでは、すでに胸の高さまで達しています。施設の入所者は恐怖で一様に青ざめて震えています。その人たち一人一人を背負っての危険な避難です。洪水の流れの中での避難は本当に怖く、泣き出す人が何人もいました。このような状況の中で施設の入所者に一人の犠牲者も出なかったのは奇跡としか言いようがありません。これはみんなが心を一つにして、困難に立ち向かったからだと心から思っています。

▲消防団による復旧作業（提供：西条市）

背　景

平成16年（2004）９月の台風21号では、愛媛県内でJR予讃線、松山自動車道、国道11号が寸断されるなど大きな被害が出ました。西条市では、鉄砲水が民家を襲い住民が亡くなったほか、土砂崩壊等により家屋、公共施設などに甚大（じんだい）な被害が発生しました。

アクセス　砂防施設（大浜地区）

- いよ西条ICより南東へ直線距離約1.5km
- 西条市大浜
- 緯度経度　北緯33度54分09秒，東経133度13分36秒

新居浜市には全国的にも有名な太鼓祭りがあります。新居浜市出身者は正月に帰省しなくても、太鼓祭りには帰ってくるほどの祭り好きが多くいます。莫大な制作費がかかる巨大な太鼓台を維持できるのは地域の強い結束力があるからです。

この新居浜の町を襲った平成一六年（二〇〇四）の台風災害は今までに経験したことがないほどの大規模なものでした。山から流れてきた泥水は床上まで達しました。その泥水が引いた後には細かな泥が場所によっては二〇センチメートルもの厚さでべったりと貼（は）り付いています。もちろん布団や家具なども水浸しで使えません。被災した人達は、「これだけの被害を受けて、今からどうしたら良いのか分からない」と途方に暮れていました。

その時です。比較的被害の少なかった地域の人たちが、自分の家の片づけもそっちのけで、「大変な災害が起こったものだ。とにかく家の片づけを手伝いましょう」と駆（か）けつけてくれました。また、新居浜市の洪水災害がニュースで流れると、地元の人たちは言うまでもなく、遠くは関西などからも多数の人がボランティアに駆けつけてくれました。また、受験を控えた地元の高校生までもが床下に潜（もぐ）り込んで泥まみれになりながら復旧に取り組む姿が多く見られました。その姿を目の当たりにして、途方に暮れていた人たちは涙を流さんばかりに喜び、「地獄に仏とはまさにこのことです」と口々に感謝の言葉を述べました。地域の人たちの強い繋（つな）がりが災害復旧に大いに役立ちました。

▲ボランティアによる復旧作業

背　景

平成16年（2004）、愛媛県新居浜市は相次ぐ台風襲来で多大な被害を受けました。９月の台風21号では、大生院（おおじょういん）などで土砂崩れが発生し、JR土讃線や松山自動車道、国道11号などの幹線交通網が寸断されるなどしました。この時には四国と本州を結ぶ瀬戸大橋やしまなみ海道が、山陽自動車道などとともに、遮断（しゃだん）された幹線交通の代替ルートの役割を果たしました。この話は、交通遮断の状況の中で、被災後に被災状況の調査と復旧活動に当たった連合自治会長さんの体験談です。

アクセス

土砂崩壊により松山自動車道が寸断された大生院付近

- いよ西条ICより東へ約２km
- 新居浜市大生院
- 緯度経度　北緯33度54分33秒，東経133度15分41秒

真っ暗な中の明かり（愛媛県新居浜市）

災害時の明かりは人を元気づけることを知ること

時は明治三二年（一八九九）、所は愛媛県の別子山村（現在の新居浜市別子山付近）でのことです。別子山村には世界でも有数の銅山があり、多くの人が働いていました。掘り出した銅を含む鉱石を溶かして銅を作る（精錬）過程では、有毒な亜硫酸ガスが発生します。そのため近くの山々の木々は枯れ、あたり一面はげ山が広がっていました。山が荒れてしまったため、人々は大雨が降ったら鉄砲水が出て、ひどいことになると口々に言っていました。

その不安が的中する日を迎えました。その日は朝から降り続いた豪雨が夜になっても止むことなく、ますます激しくなりました。はげ山となり保水機能の乏しい山肌を滝のように雨水が流れ、あちらこちらで山肌が崩れ、恐ろしい土石流となって村々を襲っていきました。別子山村の医師である高原清二郎氏は、これは多くのけが人が出ると考え、胸に浸かるほどの洪水の中を病院に急ぎました。真っ暗な中をやっとの思いで辿（たど）り着くと既に多くの人達が避難してきています。怪我をした人も多数避難してきており、真っ暗な中で人々は打ち震えていました。なんせなんの明かりもない真っ暗闇の中で、土石流や洪水が流れ下る音だけが異様な怖さを伴って聞こえてくるだけです。

これではかわいそうだと思った高原医師は病院のどこからともなく使い古した包帯を集めてきました。そして、石油をふり掛けて火をつけるとあたり一面をパッと照らし出しました。まさに地獄に仏で、不安に打ちひしがれていた人たちの顔がすぐに輝き始めました。それとともに、明かりは後から後から避難してくる人たちのいい道しるべになりました。

背　景

吉野川の支流銅山川の最上流に位置する別子山の別子銅山は、江戸時代の元禄３年（1691）に銅の採掘を開始しました。最初の坑口は新居浜市街とは反対側の南斜面にあり、「歓喜坑（かんきこう）」と名づけられました。明治の頃はこの付近が別子銅山の中心で、採鉱と精錬が行われていました。この流域で、明治32年（1899）に土砂災害により、死者513人にのぼる大水害が発生しました。その後、採掘の中心が北斜面に移り、昭和７年(1932)に廃止することになりました。廃止にあたり開発のため伐採された森林を元の緑の森に戻すため植林が行われ、現在は鉱山の遺構（いこう）は木々に覆われています。

アクセス　別子銅山遭難流亡者碑

- JR新居浜駅より南へ直線距離約３km
- 新居浜市山根町　瑞応寺境内
- 緯度経度　北緯33度55分07秒，東経133度17分59秒

山向こうの水をこちらに（愛媛県四国中央市）

先人の努力の積み重ねにより得た水利用の歴史を忘れぬこと

宇摩平野は細長い帯状をなして瀬戸内海に傾斜しているため、川はみな短く、農民はため池と井戸水に頼るしかありませんでした。このため、昔から三年から五年を周期に、干ばつに見舞われてきました。

安政二年（一八五五）も大干ばつでした。井戸は涸（か）れ、池も底をつきました。農民は万策尽きて、一勺（いっしゃく）（二ミリリットル）の水にも血を流すほど真剣になりました。しかし、峰一つ越した銅山川には水がとうとうと流れています。あの水をこちらに通すことができたらと、農民が思い詰めたのも無理はありませんでした。

この農民の悲痛な願いに、三島・中曽根・松柏・妻鳥の庄屋たちが立ち上がり、連名で三島代官所に「大川河水利用目論見書」を差し出しました。これはノミと鍬（くわ）で法皇山脈をくり抜こうとするもので、代官から一蹴（いっしゅう）されましたが、銅山川疎水（そすい）の着想はこの時が始まりです。

その後、幕末、明治・大正時代にも、代官や地元有志や企業などによって銅山川疎水計画が立てられましたが、利害調整などもあり、いずれも実現には至りませんでした。愛媛県は内務省などにも働きかけ、昭和一一年（一九三六）に徳島県との間で銅山川分水協定が調印され、事業が開始されました。しかし、戦争のため中止を余儀なくされ、工事開始は戦後まで待たなければなりませんでした。

昭和二五年（一九五〇）八月二四日、通水式が行われました。安政二年以来、九六年が経過していました。山の向こうの水が法皇山脈をくぐり、流れ込んで来ました。ワッとあがる歓声、涙をたたえて手で水をすくう老人、一升瓶（いっしょうびん）に水を詰めて持ち帰る人、まことに感激の一瞬でした。

背　景

愛媛県の宇摩地域は、昔から水不足に悩まされてきました。この地域では、法皇山脈を越えた向こうには銅山川が流れ、吉野川に注いでいます。山の向こうの水をこちらに引いてきたい。宇摩地域の人々は江戸時代末期以降、銅山川の分水を本格的に考え、さまざまな困難を経て、ついに昭和25年（1950）に銅山川の水が宇摩地域に流れ込みました。今日では、柳瀬ダム、新宮ダム、富郷ダムの連携（れんけい）により、宇摩地域への水の安定的な供給が図られています。戸川公園には銅山川疎水組合功労者頌徳の碑があります。

アクセス　戸川公園

- JR伊予三島駅より東へ直線距離約2.5km
- 四国中央市上柏町
- 緯度経度　北緯33度58分27秒，東経133度33分57秒

平成一六年（二〇〇四）に観音寺市を襲った台風豪雨では、あっという間に川の水位が上がりました。今にも川の堤防を越えそうな勢いです。消防団は急いで土のうをつくりに出かけました。「恐ろしい、堤防が揺れている。こんな洪水は初めてだ」と一人が叫びました。確かに洪水の力で河川堤防が振動しています。そんな中で力を合わせて何とか土のうを積みあげました。

「土のうで洪水を防げそうだ。とりあえず、これで一安心だ」という安堵の声がする一方で、「流木が橋にひっかかりそうだ。大変だ」との叫び声が上がりました。確かに洪水に混じって沢山の流木が流れています。山の斜面が壊れた際に土砂とともに倒れた樹木が土石流と一緒に流れてきているのです。あっという間に橋が流木で塞がれてしまいました。そして、次から次に流木が引っかかって自然のダムが出来上がりました。

「危ないぞ。橋の両岸から水があふれるぞ」との声が上がったと思うと、濁流が荒れ狂ったように流れ出しました。川の両岸を越えた濁流は一気に家に流れ込んで、すさまじい破壊力で家々を壊してしまいました。

「最近は山の手入れをしないから、洪水がひどいな」と消防団員の一人、「そうだな、保水力もないし、樹木の根の張りが悪いから山が壊れやすい。沢山の流木が洪水災害を引き起こすし、山の手入れが必要だな」ともう一人の声。今まで経験したことがないような凄まじい自然の猛威を目の当たりにして、治山治水の重要性を痛感させられました。

▲破壊された町道
（「証言　あの日を忘れない」平成16年香川県土砂災害の記録より引用）

背　景

平成16年（2004）９月の台風21号の影響により、28日夜から香川県内全域で雨が降り始め、翌29日夕方には気象台から県下全域に大雨・洪水警報が発表されました。台風が最も接近した19時前後には、観音寺市栗井で１時間に66mm、観音寺市大野原町で65mmの非常に激しい雨が降りました。この話は、当時消防団長として台風を体験した人の証言です。

アクセス　災害現場付近（大西川にかかるJRの橋）

- JR箕浦駅より西南西に約800m
- 観音寺市豊浜町箕浦
- 緯度経度　北緯34度02分39秒，東経133度36分43秒

土下座（どげざ）の説得（香川県観音寺市）

平成一六年（二〇〇四）台風二一号を消防団長として経験した人の話です。

土石流の危険性のあるところで生活している住民には、役場から自治会長に連絡を入れるなどして避難するよう促（うなが）しました。ほとんどの住民は指示に従ってくれましたが、避難してもらえない人が一〇人くらいいました。再度、自治会長さんが連絡してくれたり、地元の消防団員が行ったりして説得したのですが、最後の一人は説得に応じようとしないとの連絡がありました。

「心配せんでもええ。この土地に何十年住んどると思うんや。ここの地形などは、わしはよう知っとるんや。お前ら下から来た者が何を言よんぞ。わしは残って自分の家を守るんや」と、いくら説得してもだめだとのことでした。そこで、私が直接、家に行って説得に当たりました。「言われることも、家を守りたい気持ちも本当によく分かります。でも、今度の台風はもの凄い雨を降らせます。土石流が出たら逃げられませんので、何とか避難して頂けませんか」と一〇分か一五分くらい話しました。それでも応じてもらえないので、最後には土下座してお願いし、何とか避難していただきました。

日本全国でいろいろな災害が起きていると新聞等で見聞きしても、それはよその事で、ずっと昔から災害等のない土地なので危機意識がなかったのです。今でも実際に中位の土石流に遭った経験のある人でも危機意識は低い。この前は、ここまでで止まって被害がなかったのだから、次回もそこまでは心配ないだろうと思っている人がいるのです。

まず避難勧告を住民が守ってくれることが一番だと思います。

背　景

平成16年（2004）９月29日に鹿児島県に上陸した台風21号は、四国を通過し、近畿、北陸、東北と日本を縦断（じゅうだん）しながら各地に被害をもたらしました。香川県内では29日午後に台風本体の雨雲がかかり始め、19時前後には観音寺市などを中心に時間雨量が60mmを超える豪雨となりました。この豪雨により県内各地で土石流などによる土砂災害が発生し、家屋や農地等に甚大な被害が出ました。しかし、死者、負傷者等の人的被害はありませんでした。この話は、当時消防団長として危険箇所の住民の避難誘導に関わった人の証言です。

アクセス　砂防堰堤群（大野原地区）

- JR豊浜駅より東南東へ直線距離約５km
- 観音寺市大野原町萩原地区
- 緯度経度　北緯34度03分45秒，東経133度40分27秒

「警報が出たけん、避難せい」そう言っても、酪農家は牛が心配なので、「おる」と言っていました。牛が家計の収入源ですから。

平成一六年（二〇〇四）台風二三号の記録的な豪雨により、かつて国有林を買収して高度成長時代にミカンを植えた農地が崩れました。その下には酪農家があり、牛舎と新築の家を構えていましたが、牛舎が土砂にやられてしまいました。

翌日、うちの自治会は六〇何戸あるのですが、全部召集して、とにかく牛を助けないかんからと、五〇人ぐらいで、人間への危険性がない範囲でこの日にやれることはやったんです。

かわいそうに、牛は土砂の中に四本足で埋まってるじゃないですか。腹までつかえていました。手がつけられる状態ではありませんでした。助けられないのです。小さい機械やらユンボを持ってきて、土砂をのけ、後は手作業でのけて、二時ぐらいまでかかりました。

一頭は救出したときには生きていたのですが、足が折れたとかで、残念でしたが屠殺場に送りました。鉄骨の牛舎だったので、歪んだだけで、壊れませんでした。鉄骨がなければ住家も被災していたと思います。住んでおられた方は、「恐ろしい、もうあないとこに住みとうない」と言っていました。

背　景

平成16年（2004）10月19日、台風23号の接近に伴い秋雨前線が活発化して雨が降り始めました。一旦は小康状態になりましたが、20日朝から夕方にかけて台風本体の雨雲により豪雨となりました。この大雨により香川県内各地で土砂災害、河川の氾濫などの被害が発生し、死者11名、全半壊家屋405棟などの大災害となりました。この話は、土砂が牛舎に入り込み、地域の人々が埋まった牛の救出に努力するという話です。

アクセス　災害現場付近（山脇集会場）

- JR讃岐財田駅より南東へ直線距離約１km
- まんのう町山脇
- 緯度経度　北緯34度07分18秒，東経133度49分21秒

平成六年（一九九四）は歴史的な渇水の年でした。

七月二日の梅雨明け以降、綾南町（現在の綾川町）の町民は、猛烈な暑さと異常な渇水のため焦燥感を感じていました。七月二四日に早明浦ダムの貯水率はゼロとなり、別枠の発電用の用水に頼ることになりました。二日後に台風七号の接近により慈雨がもたらされ、貯水率は三一パーセントにまで回復しましたが、その後再び貯水率は低下し、危機的な状況となりました。この危機を救ったのが八月一六日の台風一四号と九月三〇日の台風二六号でした。

この歴史的な大渇水を乗り切ることができた要因の一つは、香川用水が命の水を送り続けてくれたことです。渇水に心をいためた期間、住民は、毎日テレビに映し出される早明浦ダムの風景を食い入るように見つめていました。あのダムに残された水だけが、香川県の、そして綾南町の住民の命を支えてくれていたからです。台風によって早明浦ダムに勢いよく流れ込む水を見て歓声を上げるような気持ちとともに、今更ながら、先人の果たした偉業に驚嘆する思いでした。「四国は一つ」の言葉を実感したものでした。

この年以降、香川県の中学一年生は、遠足に香川用水関連施設を見学することが恒例となり、早明浦ダム周辺に中学生の手で植樹を実施するような風景も見られるようになりました。

▲子どもたちの植樹

▲早明浦ダム

背　景

平成６年（1994）は異常な渇水の年でした。綾南町では、水不足の危機的な状況の中で、無形文化財としてではなく、真剣に雨の到来を祈念して滝宮天満宮で念仏踊りの奉納が行われるほどでした。また、町民は、町の呼びかけに応じて連帯して懸命に節水に努力しました。大渇水をしのぐことができた要因の一つとして、綾南町では、こうした町民の努力の他に、先人が築いたダムと用水路による「命の水」があったことを伝えています。

アクセス　香川用水記念公園

- 国道32号道の駅「たからだの里さいた」より西南西へ直線距離約３km
- 三豊市財田町財田中2355
- 緯度経度　北緯34度06分01秒，東経133度45分51秒

昭和四〇年代以降

萱原周辺は水利の便が悪く、用水確保に苦労していました。このため、ため池が多く築かれ、水田が開かれていましたが、日照りがあると稲は立ち枯れになることもありました。

久保太郎右衛門は、延宝四年（一六七六）萱原村（現在の綾川町萱原付近）に生まれ、二〇歳で庄屋になった人です。太郎右衛門は、農民の苦しみを何とかして救済しようとして、綾川の水を水路に入れ、多くの溜池に注ぐことを考えました。自ら測量をし、山田村（現在の綾川町山田付近）の正末から大羽茂池に達する用水路の計画を立てました。

この計画を高松藩庁に願い出ましたが、許可はすぐには出ませんでした。重ねて願いをしていると、太郎右衛門が二八歳の元禄一六年（一七〇三）、一部について許可が出て、数ヶ月で工事を完成しました。しかし、水は池に届かなかったので、藩主に直訴してもとの計画を認めるよう嘆願しました。そこで太郎右衛門は捕らわれ、投獄されました。

太郎右衛門の妻は金比羅さんにお参りし、太郎右衛門を父母のように慕っていた村人も釈放を懇願しました。釈放後、太郎右衛門は藩老に用水路計画の事情を涙ながらに訴え、その志に藩老は感激して、宝永四年（一七〇七）、太郎右衛門に許可が下りました。太郎右衛門は早速用水取り入れ口からの水路の工事にかかり、その年のうちに完成しました。三二歳でした。

この萱原用水の完成によって、村々は綾川の恵みに浴することになり、開拓も進みました。

▲萱原用水を導水した大羽茂池

▲大久保大明神

背景

萱原用水は、綾川町正末で綾川の水を取り入れ、大羽茂池に達する14kmの用水で、綾川町萱原周辺の灌漑用水源です。かつてこの辺りは干害に苦しめられることが多く、特に元禄10年（1697）から連続して干害に見舞われ、元禄14年（1701）には270人が餓死しそうになったそうです。この窮状を救うために奮闘したのが、萱原村の庄屋であった久保太郎右衛門です。大正９年（1919）に建立された太郎右衛門の彰徳碑は、今日も地域の人々に大切にされています。

アクセス　萱原用水の碑

- 琴電琴平線滝宮駅より東へ直線距離約１km
- 綾川町萱原
- 緯度経度　北緯34度14分46秒，東経133度55分50秒

旧浅野村一帯（現在の高松市香川町浅野地区）は稲作りに必要な灌漑用水が少なく、干ばつに悩まされることがたびたびでした。村人たちはため池をつくる計画を立て、藩に願い出ました。その陣頭に立って指図をしたのが矢延平六でした。平六は、村の西を流れる香東川の水を引き入れることを考え、多くの人々が力を合わせ、ついに新池という大きなため池を築きました。村人は喜び、平六は村人たちに心から慕われていました。

しかし、世の中はままならず、「新池を造ったのは高松城を水攻めにするためのもの」などというわさが広まりました。このため、平六は八月三日、裸馬にのせられて阿波国へ追放の身となりました。

恩人を慕う村人たちは八方手を尽くし、平六を探し求めましたが姿を見付けることはできませんでした。そこで、平六のご恩に報いるため、高塚山に平六を祀り、巡りくる収穫期ごとに祭りを行い、追慕の念を高めてきたのです。

この祭りは古くから浅野地区の人々によって継承されており、神具はすべて農作物や家庭用品などを中心に整えられています。

▲高塚山から新池を望む

背　景

高松市香川町の新池では、旧暦の８月３日に実った農作物でおどけた姿をつくり、新池までの道を練り歩き、最後は皆がため池に飛び込むという「ひょうげまつり」があります。「ひょうげまつり」とはひょうきんなまつりという意味で、昔、地域の人々のために新池をつくった矢延平六のご恩に報いるためのお祭りです。香川県の無形文化財に指定されています。新池を見下ろす高塚山には、矢延平六を祀った新池神社があります。

アクセス　新池神社（高塚山）

- JR高松駅より南へ直線距離約12km
- 高松市香川町浅野
- 緯度経度　北緯34度14分54秒，東経134度02分57秒

昭和一四年（一九三九）は大干ばつに見舞われました。

高松市川島地区では、四箇池の潤す田以外では田植えのできなかった田もありました。また、田植えのできた田地も、八月中旬ごろから溜池の水が底をつき、稲田は真っ白になり、地面は亀の甲のように割れてきました。見るに見かねた農家の人は、出水や四箇池の水路から夜を徹して水を汲み上げ、出穂前の稲を助けようと懸命の努力をしました。ポンプ用のガソリンも不足し、共同で円座・仏生山・平井まで買いに歩きましたが、その労も実らず、高台では四分の一の収穫しか得られませんでした。

七月二三日には、香川県の藤岡長敏知事が、自ら祭主となって滝宮天満宮で雨乞い祈願をし、八月一日より三日間、城山神社でも降雨祈願をしました。また、県は各市町村に対し、雨乞いをするよう通達を出しました。由良山・土佐山でも三度ほど雨乞いの火を上げました。九月には、学童が日の出と日没前に土びんで稲に水をかけるよう、各学校へ通達を出したほどです。

この年の米の収穫量は、県で平年一三万七、八〇〇トンのところ、五四パーセントの七万四、六〇〇トンしかありませんでした。農家では、供出米が納められず、保有米もなく、苦しい生活を余儀なくされました。県では一〇月、白米食の廃止、七分づき米の常用・雑穀との混食・粉食励行、麦食奨励の条例を制定したほどで、米価は急激に高騰しました。

背　景

昭和13年（1938）10月から14年９月までの１年間の雨量は、675.7mm（多度津測候所）で、例年の約半分に過ぎませんでした。高松市川島地区では６月14日未明に少し降ってからは空梅雨の状態で、９月11日まで雨らしい雨がありませんでした。このため、県知事が雨乞い祈願をするとともに、県は学童に対して「土びん」で朝と晩に稲の根元に水をかけるよう学校に通達を出したほどでした。

アクセス　滝宮神社

- 琴電琴平線滝宮駅より西へ直線距離約300m
- 綾川町滝宮
- 緯度経度　北緯34度14分59秒，東経133度55分09秒

時計のない時代に、少ない水をできるだけ公平に田に引き入れるために、人々は工夫をしました。

高松市の多肥では、平池の用水配分に、大正の頃まで、香を焚いて水の配分をしていました。長さ六〇センチメートル、横三五センチメートル程の香箱の中に灰をつめ、中に竹節を欠いた二つ割の竹を三個、箱の長い方に平行させて置き、その竹樋の中に線香の粉を入れ、その粉に火をつけ、その燃えて行く寸法を測定して、田の給水時間を決めたものです。

香を焚く時には、人手が最低限三人は必要でした。二人は民家にいて香を焚いた香箱を見つめます。時間が来ると、太鼓で合図をします。もう一人は股守（水路の切り替え）に出掛けます。これを「水ばし」または「井手ばし」と呼びました。これに当たった者は枕蚊帳などを持参して水路の端で待機をしていました。

太鼓の合図にこたえて股守に出た「井手ばし」はあらかじめ持参をしている鉦をたたいて「わかった」と合図をします。そして、水路を切り替えて次の田に水を流しました。

こうして、平池の用水が流れるようになると、順番に田に水を引き入れるために、香箱の中で香を焚いたものでした。

▲香水箱

背　景

四国の中でも特に雨が少ない香川県では、現在のように香川用水ができて吉野川から水が供給されるまでは、満濃池に代表されるため池が多く造られ、水不足に備えていました。池の水が少なくなると、たいていの土地では、できるだけ渇水被害を小さくするため、池の水を順番に配水していく「番水」が行われていました。しかし、時計のない時代に、公平に田に水を引くためには工夫が必要でした。そこで使われたのが「香箱」です。香箱で線香を燃やして、決めた長さごとに太鼓で合図をして引水を交代していたのです。

アクセス　平　池

- JR高松駅より南へ直線距離約９km
- 高松市仏生山町
- 緯度経度　北緯34度16分17秒，東経134度02分43秒

消防だけでは太刀打ちできない（香川県高松市）

平成一六年（二〇〇四）は古来稀にみる年で、台風が日本に一〇個、四国には六個も上陸し、瀬戸内海側の香川県、愛媛県でも大きな被害を受けました。中でも台風一六号の際には、香川県においては台風通過が大潮の満潮時刻と重なったため、これまで記録されていた最高潮位を五〇センチメートル超える未曾有の高潮が発生し、高松の中心街など約二万二、〇〇〇戸が浸水しました。その時、消防署員として救出活動に携わった人の証言です。

台風一六号では警報発令後、日新小学校区へ急行しました。その時の光景は忘れられません。「なぜこんなことが」と思うほど壮絶で、道路を水が流れる中、現状確認に行こうとするのですが、手すりにつかまっていても足元がすくわれて押し戻される状態でした。各家庭を回って小さなお子さんやお年寄りを抱えて安全なところまで誘導するにも深夜で何も見えず、危険でした。一軒一軒確認しながら取り残された人たちを救助するのは、とにかく時間がかかります。消防では太刀打ちできない災害があることを実感しました。

大災害になればなるほど被害は甚大で、すぐに救助に向かえない場合もあります。どの家に取り残されている人がいるという情報があるかないかで、救助までのスピードが違います。被害を最小限に抑えるために、また二次三次の被害を招かないために、地域と連携をとっていかなければと痛感しました。

▲高潮で浸水した高松市内
（高松市松島町国道11号）

高潮で浸水した高松市内
（高松市松島町）▶

背　景

平成16年（2004）８月の台風16号では、激しい雨と大潮の満潮が重なり、記録的な高潮が香川県沿岸の各地を襲い、住宅などの建物は浸水被害に見舞われました。高松港では観測史上最高の2.46ｍの潮位を記録するなど、県内各地で最高潮位を更新しました。この結果、高松市を中心に、床上・床下浸水が約22,000戸と戦後最大となりました。

この災害で、多くの方が高松市など瀬戸内海沿岸部の土地が高潮に弱い大地であることを認識し防災を考えるきっかけになりました。

アクセス　浸水現場（旧四国地方整備局前）

- JR高松駅より東南東へ直線距離約２km
- 高松市福岡町4-26-32
- 緯度経度　北緯34度20分28秒，東経134度04分03秒

八栗の峯くずれる（香川県高松市）

香川県高松市牟礼町に空海が唐に渡る前、八つの栗を埋めたことから命名された四国霊場第八十五番札所・八栗寺があります。この八栗寺の背面にそびえる山は、もともと五つの峯があることから「五剣山」と名付けられていました。

宝永四年（一七〇七）は天変地異の多い年でした。三月一日には大地震が発生し、七月一〇日にはほうき星が月を横切りました。八月一二日に大雨、一七、八日は大風雨で洪水、一九日は大風でした。九月一二日は大洪水で、庵治の海岸の堤防が切れ、家が倒れ、田畑が流れました。そして、一〇月四日のことです。旧暦の一〇月は今の一一月頃ですが、それなのにこの日は大変暑く、人々は着物を脱ぎ、笠をかぶって綿を摘んだり、稲を刈ったりしていました。

午後二時頃大地震があり、地鳴りは雷のようで、地は裂け、水が湧きだし、浜辺の砂地は音を立てて揺れました。五剣山の東の端、庵治から左の端に見えていた峯が崩れ落ち、その音は二〇キロメートル余り遠くまで聞こえました。家は倒れ、塀が壊れ、井筒が跳び出ました。その上、二メートルほど津波が押し寄せたので、海岸一帯は潮に洗われました。

地震がいつまでも続き、人々は「また大地震が来る、大津波が来る」と言って、山や藪の中に小屋をつくって暮らしました。一〇月二三日には富士山が噴火して宝永山ができました。

八栗寺はこの地震で大破し、二年後に全部改築して、ほぼ現在の姿になりました。

▲現在の五剣山

▲宝永南海地震以前の五剣山の山容（「四国霊場記」より引用）

背　景

南海地震、東南海地震、東海地震の３つの地震が同時に起こった日本史上最大といわれるM8.6の宝永地震の大きさを象徴する痕跡が香川県内で有名な山に残っています。

それが、私たちが普段見慣れている五剣山で、宝永地震により東の峯が崩れて、今では「四剣山」になっています。今後30年間で高い確率で発生するという東南海・南海地震も、我が国で発生する最大級の地震であり、その地震動による被害は、香川県でもこのような甚大なものになると想定されています。

アクセス　五 剣 山

- 琴電志度線六万寺駅より北へ直線距離約２km
- 高松市庵治町・牟礼町
- 緯度経度　北緯34度21分41秒，東経134度08分27秒

昭和五一年（一九七六）の台風一七号の時、地区総代として土砂災害を経験した人の証言です。

たたきつけるような豪雨の中で、「土石流が起こった。家がつぶされ、多くの人たちが生き埋めになっているかもしれない」との第一報が入ったのに続いて、土石流災害発生の知らせが次々に入ってきます。小豆島の全ての沢という沢で土石流が発生してしまったのではという感じさえ受けるほどです。想像も付かない、とんでもない規模の土砂災害が発生したということだけは分かりました。しかし、各種の情報が入り乱れる中、どれだけの人達が犠牲になっているのか正確な人数さえ分かりません。とにかく行方不明者の捜索を急がなければいけません。そこで、陸海自衛隊、県警機動隊、消防団員、その他、地元自治会など各方面に緊急の協力依頼をしました。

行方不明者の捜索は困難を極めました。土石流で流れ出した大量の土砂はドロドロの状態で堆積しています。そのため膝までぬかるんで、歩くのがやっとの状況です。それでも一刻も早く全員が発見されることを一心に願いながら一生懸命に捜索に取り組みました。そして、「おうい、最後の一人が見つかったぞ」という声が響いたときには、疲労困憊の中で皆が心から手を合わせました。「見つかって本当に良かった、この感慨は一生忘れることができない」と誰とはなしに口をついて出ていました。

小豆島は瀬戸内海に浮かぶ風光明媚な島で、壺井栄の小説「二十四の瞳」の舞台となったところとしても有名です。典型的な瀬戸内海気候で豪雨災害の発生など考えられない小豆島で、これだけの規模の土砂災害が起こったことは、三〇年経った今でも信じられないことです。

▲捜索活動の状況
（提供：小豆島町）▶

背　景

昭和51年（1976）９月の台風17号による集中豪雨は、香川県全域に被害をもたらしました。その中でも、小豆島町池田の四方指観測所では９月８日12時から９月13日15時までに1,400mmという１年分に匹敵する降雨量を記録しました。この豪雨により、随所で土砂災害が起こり、小豆島町池田の谷尻地区で24名の死者を出すなど、県内各地で合わせて死者50名にのぼる大災害となりました。

アクセス　災害現場付近（砂防ダム（蒲野地区））

- 小豆島町役場池田庁舎より南南東へ直線距離約５km
- 小豆島町蒲野地区
- 緯度経度　北緯34度26分25秒，東経134度15分01秒

おそろしかった３日間（香川県小豆島町）

昭和五一年（一九七六）台風一七号が来たときの話です。

九月一一日の朝、雨の中、隣のおじさんが大声で「上流の公民館が流れてくるぞーっ！」とみんなに知らせに来ました。私とお姉さんは、何も持たず、犬二匹を連れて、急いで避難しました。お母さんはお金を持って後から逃げて来ました。お父さんは消防へ行っていました。私たちは黒島のおばちゃんの所へ避難をするのです。停電なので真っ暗な中を、雷は鳴るし雨は降るし、とっても怖かったのです。私とお姉さんはびっちゃんこになりながら、犬を必死に抱いて逃げました。何かにつまずいて転んだ私にお姉さんが「何しよん、早よ立ち、早よっ」ときつくいいました。お姉さんがあんなにきつく言ったことはあまりなかったので、私はびっくりしてすぐ立ち上がりました。

一二日朝、雨が小降りになったので、私とお姉さんとお父さんとで家へ大事な荷物を取りに帰りました。すると家の中は、水と土が膝の少し上まで来ていました。

夜、ごはんを食べた後、ローソクの下で、大人の人たちは死ぬことばかり言っていました。「もう最期やから賑（にぎ）やかにいかんか」などと言っています。お姉さんは、「どうせ死ぬんやったら」と言ってよそ行きの服を着て寝ました。私は死にたくないと思いました。お父さんはお酒をたくさん飲んで、「どうせ死ぬんやったら、ぐっすり寝てなんにもわからずに死にたい、苦しみの中で死にたくない」と言ってました。そんな話が続いて、とうとう夜が明けました。

「うわっ、助かった！」誰もが言いました。太陽が光り「ああ助かったんやなあ」と思いました。家を流されたり、つぶされた人もいます。亡くなった人もいます。とても恐ろしい三日間でした。

背　景

昭和51年（1976）９月、台風17号は小豆島に年間降雨量に匹敵する1,400mmもの豪雨をもたらしました。香川県全域の被害は、死者50名、重軽傷者127名、家屋の全壊274戸、半壊317戸、床上浸水4,477戸、床下浸水15,224戸にのぼりました。この話は、小豆島の小豆島町の小学校５年生の女子が体験した３日間の台風記録です。子どもの視点で、台風の怖さと助かった時の感動が記されています。

アクセス　小豆島町役場

- 小豆島町役場内海庁舎
- 小豆島町内海
- 緯度経度　北緯34度28分42秒，東経134度18分54秒

昭和四九年（一九七四）の台風八号の時、消防署員として、次から次へと土砂災害の悲惨な現場を目の当たりにしながら、土砂に埋まった人の救出に当たった人の証言です。

「生き埋めがおるから来てくれ！」との大声で最初に向かった現場は、橘地区の斜面に建つ住宅密集地でした。現場は上方より幅五〇メートルにわたり原型を止めず流失し全壊していました。付近一帯にガスが漂い、汚物の激臭が鼻を突く中、急な斜面を不明者が多くいると思われる上方を目指し駆け登りました。

ようやく私たちが辿り着いた最高所の家は半壊し、この家の上方にあった数軒の民家の残骸の一部がもたれかかっていました。地元の人々が必死に救出作業を続ける家の合間から、うめき声が聞こえました。キャップライトの光に入ったものは、土塊と化した被災者の姿でした。二畳くらいの場所に木と土砂に埋もれ二人の重傷者が出ており、その二人に重なり合うように骨折し、流血した遺体がありました。私たちは地元の人々と共に必死に救助作業を続けるとともに、無線で医師の要請をしました。

そして、私たちは息つく間もなく次の現場へ向かいました。土砂の撤去作業を開始しましたが、根がついたままの大木と土砂に埋もれた石に、作業は難航を重ねました。しばらくして隊員の一人が水浸しの土砂の中から手指の一部を見つけ、早速発掘にかかりました。作業が進むにつれてやや横向きの遺体は徐々に全容を現しましたが、木と石とにはさまれた遺体を傷つけないよう気づかい、素手での作業が主となり大変難航しました。

すぐ横で変わりはてた母親を待つ女子高生の手には真新しい毛布が用意され、取りみだすことのないその姿があまりにも痛々しく映りました。

背　景

昭和49年（1974）７月６日夜、台風８号による集中豪雨が小豆島一帯を襲い、大きな被害をもたらしました。小豆島町橘地区、福田地区、岩ヶ谷地区等では死者29名、重軽傷者21名、家屋の全半壊249棟という大惨事に見舞われました。

アクセス　砂防堰堤（橘地区）

- 小豆島町役場内海庁舎より東北東へ直線距離約３km
- 小豆島町橘
- 緯度経度　北緯34度29分28秒，東経134度20分25秒

村の庄屋矢田助右衛門は、深谷川という谷に土手を築いて水を溜め、下流の未開拓地に五〇町歩の水田をつくる計画を立てました。これを時の高松藩主に許可を歎願（たんがん）したところ、普請（ふしん）奉行が下検分（したけんぶん）の結果、築堤付近の岩盤はその肌が傾斜しているから貯水が無理であるという理由で許可になりませんでした。

検分使が帰った後で、諦（あきら）めかねて助右衛門は、意を決して裸馬に跨（またが）り役人の後を追いました。やっと屋島付近で追いついて重ねて心情を訴え許可を歎願しました。その時いわゆる腹切り問答がなされました。それは、「もし水を溜めることができなければ、腹かき切って詫（わ）びる」というものでした。この自信と決意が通じて工事はついに許可されました。

助右衛門は悲壮な覚悟で工事に着手しました。工事は至難な大工事でしたが、命をかけた助右衛門の至誠が工事に携わる人に通じないはずはなく、監督する者もされる者も、ただ成功の一点を目指して働き抜きました。こうしてついに完成したのが今日の白川原大池です。

助右衛門の死後、この偉大な業績を讃え、末代の受益を感謝して、村人たちは助右衛門の屋敷裏に再び池を築きました。干ばつの年、白川原池が「おはらい」する前にまずこの池に導水して、矢田家所有の田だけは干ばつから守ってあげようというのです。名付けて能徳池と言います。

人々の感謝の気持ちは、地域に伝わる歌に示されています。「白川原大池干潟（ひがた）になろと、能徳池には水絶つまいぞ」

▲白川原池

背　景

香川県さぬき市志度町に白川原池というため池があります。300年以上も前に、庄屋が村人のためを思い、腹切り問答の末、藩から築堤の許可を得て完成させた池です。そして、この庄屋に感謝して、干ばつ時にも庄屋家の田だけは水を絶えさせまいと、村人たちが築いた小さなため池があります。能徳池と言います。二つのため池は今も立派に機能し、ため池をめぐる人々の思いやりの心を伝えています。

アクセス　能 徳 池

- 津田寒川ICより北へ直線距離約３km
- さぬき市志度町鴨部
- 緯度経度　北緯34度19分15秒，東経134度13分55秒

昭和六二年（一九八七）の台風一九号を経験した警察官の話です。

一〇月一六日一九時二〇分「暴風雨波浪洪水警報」の発表を受け、全署員を非常召集して、台風に備えました。次第に強まる風雨の中、被害の出ないことを願わずにはいられませんでしたが、二十一時過ぎ以後は、ひっきりなしに住民からの窮状を訴える一一〇番がかかってきました。さらに出動中の署員からの報告とあわせ、ただならぬ事態の発生を知りました。

「急に水が来てしまった。年寄りがいるんです。何とかして」

「川の堤防が切れかかっている。すぐ男の応援を」

「水が家まで入ってきた。外も水が一杯でどこも行けん。ボートを」

「橋が流され、車ごと転落したんです」

「住宅住民が避難中ですが、一名見当たらない」

普段おとなしい新川が「毒に苦しむ大蛇」のようにのたうち回り、一夜にして三木町内に大きなつめあとを残したのです。

不幸中の幸いというべきか、三木町では、一名の犠牲者も出すことなく、悪夢のような一夜は明けました。

背　景

昭和62年（1987）10月17日午前零時頃、台風19号は高知県室戸市付近に上陸し、四国南東部を北東に進みました。この台風により、三木町はわずか２日足らずで年間雨量の半分近い471mmという記録的な豪雨に見舞われました。香川県は温暖な気候で、まさか三木町に災害はないと思っている人が多いため、一旦、水害が起きると、ひっきりなしに110番の電話が鳴り続けました。この災害を経験した警察官は、何でも警察に頼らざるを得ない状況に対して警鐘を鳴らしています。

アクセス　災害現場付近（大宮橋（新川））

- 琴電長尾線池戸駅より北北東へ直線距離約700m
- 三木町池戸（主要地方道小蓑前田東線）
- 緯度経度　北緯34度17分05秒，東経134度07分25秒

電信柱に救われる（香川県さぬき市）

平成一六年（二〇〇四）の大型の台風二三号は今までに経験したことがないような雨量をもたらしました。家の外を見れば前の畑からどんどん水が家の庭に流れ落ちてきています。「これは大変だ。倉庫に入れてある米俵が水に浸かる」という思いがとっさに脳裏を横切りました。この秋、収穫したばかりの米をまだ倉庫に貯蔵していました。まさか倉庫を水浸しにするほどの大雨があるとは思いもしませんでしたので棚の上にはあげていません。

家の前の泥水の水位は膝の下あたりでしたので、まだ倉庫に行けると判断して、土砂降りの中を外に出ました。その時、小石をふくんだ大水が一気に流れてきて、足を取られて流されました。目の前に見えた電信柱に無我夢中でしがみつきました。

その時、「おーい、この棒をつかめ」と知人の声。差し出された棒につかまってやっとの思いで家に戻りました。「ありがとう。危なかったよ。それにしても洪水は怖い」と心から感謝しました。その後、何とか倉庫にたどり着き、米俵を階段や棚などの上に載せたときには本当にホッとしました。水に浸かったら一年間の汗の結晶が水泡に帰してしまうのです。

一晩中、雨は降り続き、家の外ではゴウゴウと音を立てて流れていて、怖くて眠れませんでした。明るくなってから、あたりを見渡して驚きました。家の裏を走っている道路は川のようになっていて、何トンもありそうな大きな岩がごろごろと転がっています。私を救ってくれた電信柱は流されて跡形もありません。電信柱がなかったら今頃、洪水に流されていたであろうと思うと今更ながらゾッとしたことは言うまでもありません。

背　景

平成16年（2004）10月の台風23号は香川県内に大きな被害をもたらしました。県全域で死者11名、負傷者28名、家屋の全壊48戸、半壊357戸、床上浸水4,431戸、床下浸水13,336戸に及びました。この話は、さぬき市大川町で米を棚上げするために倉庫に向かおうとした人が、突然襲ってきた大水に足元をとられた時の体験談です。必死で電柱にしがみつき、人の手助けを受けて、危うく難を逃れることができました。

アクセス　災害現場付近（砂防堰堤（森行地区））

- 大川ダムより東へ直線距離約２km
- さぬき市大川町森行地区
- 緯度経度　北緯34度13分45秒，東経134度15分51秒

真鈴（ますず）の水（香川県まんのう町）

暑い日の盛り、讃岐の山奥に一人のお坊さんがやってきました。お坊さんは、おばあさんに「すまんことだが、お茶を一杯いただけないものかな」と言います。おばあさんは、

「このごろは日照り続きで水は少ないのだけど、お坊さんがあがるくらいの水はあるわな」と快く水を差し出しました。おいしそうに水を飲まれたお坊さんは、

「そんなに、水が不自由なのかい」

と言いながら、杖を突いて屋敷の周りを歩かれ、ある一点で歩みを止め、地面を杖で突くと、不思議や水がどんどん湧（わ）いてきます。おばあさんは、お坊さんにお礼を申さねばと思い、辺りを見回しましたが、お坊さんの姿はもう見えませんでした。

「ありがたいことじゃ、ありがたいことじゃ」

と、おばあさんは喜びながら、水に手を入れてみました。すると、水の中で、お坊さんが持っていた鈴のような音が「ちろん、ちろん」とかすかに響きます。真鈴（ますず）と呼ばれるようになった由来です。

隣村から、少し水を分けてくれないかと言ってきました。おばあさんは、

「水がないのは不自由なことだ。いくらでもくんでお帰りよ」

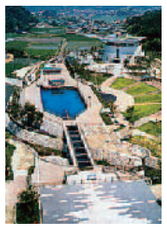
と親切そのものです。隣村といっても、県境に位置するところなので、阿波の大屋敷からも水をもらいに来ました。水を担（にな）い桶（おけ）（天秤棒（てんびんぼう）にぶら下げて運ぶ杉と竹でできた桶）に入れて一荷（いっか）にし、国境を越えて帰って行きます。そして、お礼にそば一升。水とそばを交換して仲良く暮らした山の村でした。

背　景

真鈴は徳島県との県境に近い香川県の山奥の集落です。この話は、日照りで水がなくて困っていたところに、お坊さんがやってきて水を所望（しょもう）されるので、おばあさんが快（こころよ）く水を差し上げると、飲まれたお坊さんが地面を杖で突き、水があふれ出てくるようになったという話です。同様の弘法大師信仰の話は四国各地にあります。今日、香川用水をめぐって県を越えた人々の複雑な感情もあると考えられますが、自然が与えた水の恵みを、県境を越え思いやりの心で分け合うことの大切さをお大師様が伝えているとも言えます。

アクセス　香川用水記念公園

- 国道32号道の駅「たからだの里さいた」より西南西へ
  直線距離約３km
- 三豊市財田町財田中2355
- 緯度経度　北緯34度06分01秒，東経133度45分51秒



3　四国の自然災害

四国には険しい山地が多くあります。なぜでしょうか。それは、フィリピン海プレートが押してきて、四国の下で潜り込んでいるため、四国の陸地が隆起しているからです。また、気象的には四国山地を境にして、太平洋側は日本でも有数の豪雨地帯であり、瀬戸内側は日本で最も雨の少ない地域の一つとなっています。このような地形・地質の条件と気象の特性から、四国では次のような自然災害が起こります。

◆豪雨災害（水害・土砂災害）

集中豪雨は梅雨前線・秋雨前線や台風によりもたらされます。最近では、平成一〇年（一九九八）九月の高知豪雨災害と平成一三年九月の高知県西南部豪雨災害、平成一六年と平成一七年の台風災害と立て続けに豪雨災害が発生しています。特に、平成一六年には多くの台風が四国に上陸、もしくは影響を与え、大変な災害が発生しました。

台風災害が発生するのは、四国は山地が急で、地盤が弱く、大雨が降れば、山の斜面が壊れて土石流や鉄砲水が発生し、川は洪水で溢れてしまうからです。

▲ランドサットから見た四国の姿

◆地震災害（地震・津波）

四国に大きな災害をもたらす地震には、二つのタイプがあります。一つはプレート境界型の南海地震で、もう一つはプレート内（活断層型）地震です。南海地震は、高知県沖で一〇〇年から一五〇年の周期で発生する大地震です。震度六強という強い揺れと最大で一〇メートルを超えるような大津波が併せて発生する世界でも珍しい地震です。前回の南海地震は昭和二一年（一九四六）に発生しており、既に六〇年が経過しています。そのため、今後三〇年間の地震発生確率は五〇％以上と言われています。活断層型地震は、鳴門市から三好市、新居浜市、そして松山市から伊予市を通っている中央構造線などの活断層が動くことにより起こるものです。兵庫県南部地震は活断層が動いたことにより発生しました。

◆高潮災害

高潮とは海水面が高くなって、防波堤などを乗り越えて海水が浸入してくる現象です。高潮は台風や発達した低気圧により、気圧低下に伴う海面上昇と強い風による海水の吹き寄せで発生します。高潮が発生する場所は、湾の奥やゼロメートル地帯、河口部などです。昭和三四年（一九五九）の伊勢湾台風では数千名もの方が亡くなっています。また、平成一六年（二〇〇四）の台風一六号では、高潮により高松市を中心に二万戸以上の家屋が浸水しました。

◆渇水災害

北四国の瀬戸内側では年間降雨量が一、一〇〇ミリメートル前後と非常に少ない上に、人口が多く、産業活動が活発なので慢性的に渇水災害に悩まされています。特に、平成六年（一九九四）の渇水災害は深刻で、松山市では四～五ヶ月も時間断水となりました。讃岐平野には、ため池が無数に点在しています。水で苦労した先人達の汗の結晶です。今は、吉野川から分水されていますので、少しは水不足が解消しています。

4　調べてみよう

この冊子「四国防災八十八話」は、「はじめに」でも触れましたように私たちが住む四国各地に伝わる地震や津波による災害、台風や大雨、渇水などの気象災害、地すべりや崩壊と言った斜面災害などが発生した年月日や災害のようす、さらには被害を最小限に食い止めるための先人の工夫や知恵をまとめたものです。こうした自然災害は、四国各地で数多く発生しています。それらの自然災害の中から時代や地域に偏りがないよう考慮して八十八話を選びました。ですから、読まれた皆さんの身近な場所で発生した自然災害や災害にまつわる言い伝えがこの冊子には取り上げられていない話がたくさんあると思います。

そこで、ぜひ、お父さんやお母さん、おじいさんやおばあさん、地域のことをよく知っている大人の人から、皆さんの住んでいる場所にまつわる災害や災害から身を守った体験談を聞いて文章や図にまとめてみてください。また、昭和の南海地震など四国各地で被害がでたものもありますので、この冊子に紹介されている災害についても、皆さんが住んでいる場所ではどういった被害がでたのかを大人から聞き、同様に文章や絵、図などにまとめてみてください。そのときにどういう内容のことを聞けばよいのかを次に書き出します。参考にしてください。

①皆さんが住んでいる場所でこれまでどういう自然災害があったのか。地震とか津波、洪水、地すべりなど、について聞いてみてください。

それら一つ一つの

②話してくれた方の住んでいた場所（地図に示す）や災害の発生した場所、発生した時代（年月日）。

その時、話してくれた人は何歳だったのか。あるいは、その人も誰か別の人から聞いた話なのか。

③どういった状況で、どのような被害がでたのか？　家が倒れたとか半分がこわれた、あるいは家が流された、家が水につかった、というような被害のようす。被害を受けた戸数など。亡くなった人やけが人が何人いたか。くわしい人数がわからない場合は、おおよその人数。

④その時、住んでいた人たちは、どう助け合ったのか。そして、どうその災害に立ち向かったのか。

⑤その災害からどういうことを学んだのか。そして後世へどういった教訓を伝えたのか。今生きている私たちは何を学ばなければならないのか。

⑥この時の災害を後世に伝える石碑や文章（古文書や新聞記事）などの記録や災害の爪痕が残っているかどうか。残っていたら記録を分かりやすい言葉に書き直し、災害の痕跡などが残っている場所を地図に示す。痕跡が残っていなくても災害が発生した場所へ行って、現在の様子を見てスケッチしたり写真にとっておくことも大切です。どういった場所が危険かがわかりますから。

以上を参考に、地域のことをよく知った大人から話を聞き、皆さん自身の言葉で文章と絵、図にまとめてみてください。紙芝居にするのもおもしろいと思います。こうした作業をとおして、住んでいる地域のどこがどう危険なのかが理解できると思います。そして、まとめたものを災害が起こったことを知らない人たちへ、その場所に住むためにはどういった災害への注意や備えが必要かを教えてあげてください。

例

①昭和の南海地震　　一九四六（昭和二一）年一二月二一日早朝

②四国中央市××町〇〇に住んでいる

近所のおじいさん（関川石太郎さん、七〇歳）当時九歳

③夜が明け切らない朝方、ミシミシと家が揺れるので目を覚ました。隣に寝ていた母親にしがみつき、真っ暗な中、ふるえていた。父親が「大きな地震だ。じっとしとれ」と興奮した大声で言った。長い間揺れ

た。揺れがおさまったので、家の外に出ると近所の人も出てきた。さいわい私の家では屋根瓦が数枚落ちたのと土壁が二ヶ所壊れただけであった。近所の家もたいした被害はでなかった。その後も地震（余震）が何度も起こるので、家族みんなが庭でたき火をしながら昼頃まで外で過ごした。

④近所の人と「だいじょうぶか」とか「なんともなかったか」と声かけをして、お互いの無事を確認しあった。真っ暗な中、声をかけ返事があると地震のこわさが薄らぎ、心が落ち着いたように思う。

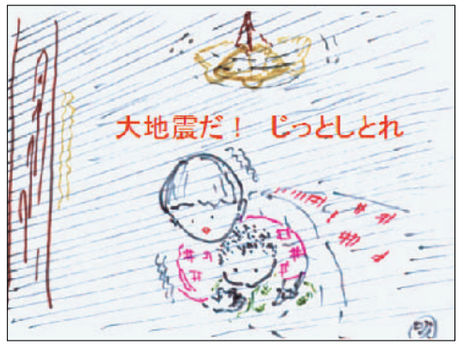
⑤地震は突然起こるのでこわい。こんなに大きな地震が来るとは誰も思ってもいなかった。地震について知っていればもう少し落ち着いておれたのではないかと思う。真っ暗な中にいると非常にこわい。庭でたき火をすると寒さをしのげただけでなく、たき火の明かりでみんなの顔が見え心が安らいだ。近所の人との声かけも恐怖心が薄らいだ。手元にマッチがあり、軒下に積んでいたマキがあったので、たき火ができた。これらがなかったら寒くて外に出ておれなかっただろう。

⑥地震があったことや被害の様子は「〇〇町史」や「××市史」に出ているし、昭和二一年一二月二二日付けの「△△新聞」にも出ている。戦争中に松ヤニをとった海岸の松林は、地震後、地盤沈下により海水が松の根元をあらい、次々に枯れてしまった。確かに戦前、海岸を写した写真には松林が広がっていて、その奥（北）に海がある。

紙芝居

①

②



③

④

⑤

⑥

参考文献（引用文献を含む。）

この本は、ここに記した文献を参考に作成しました。
一部書き換えたものを記載している場合があります。

第一話　**吉野川下流域の高地蔵**　「高地蔵探訪ガイドブック」（建設省徳島工事事務所、平成一〇年）
第二話　**蔵珠院の洪水痕跡**　「四国三郎物語」（建設省徳島工事事務所、平成九年）
第三話　**川贄さん**　「名東郡史（続編）」（名東郡史続編編集委員会、昭和四六年）
第四話　**印石**　「四国三郎物語」（建設省徳島工事事務所、平成九年）
第五話　**愛宕地蔵**　「四国三郎物語」（建設省徳島工事事務所、平成九年）
第六話　**割腹した稲垣監物と監物堤**　「四国三郎物語」（建設省徳島工事事務所、平成九年）
第七話　**三王神社**　「四国三郎物語」（建設省徳島工事事務所、平成九年）
第八話　**日本一の水防竹林**　「四国三郎物語」（建設省徳島工事事務所、平成九年）
第九話　**浸水時の知恵**　「阿波の語り部」（徳島県老人クラブ連合会、昭和六三年）
第十話　**ひでり続きでほこり立つ**　「阿波の語り部」（徳島県老人クラブ連合会、昭和六三年）
第十一話　**危機一髪**　住民公募
第十二話　**百度石に刻まれた教え**　「南海地震の碑を訪ねて」（毎日新聞高知支局、平成一四年）
第十三話　**目の当たりにした凄さ**　「昭和南海地震体験談に見る徳島市の姿と知恵」（徳島市消防局、平成一五年）
第十四話　**お亀千軒**　「阿波の民話集　お亀千軒」（飯原一夫、平成元年）
第十五話　**九死に一生を得る**　「昭和南海地震体験談に見る徳島市の姿と知恵」（徳島市消防局、平成一五年）
第十六話　**百畳敷のお寺**　「水害～治水と水防の知恵～」（宮村忠、昭和六〇年）
第十七話　**万代まで続け、「万代堤」**　「那賀川歴史文化紀行ガイドブック」（国土交通省那賀川工事事務所、平成一三年）
第十八話　**寅年の水**　「タウンニュースなかとみに載ったわたしの町のむかし話」（「加美乃木」神木悟、平成一二年）
第十九話　**大水がくるぞ**　「タウンニュースなかとみに載ったわたしの町のむかし話」（「加美乃木」神木悟、平成一二年）
第二十話　**堰をめぐる上下流の争い**　「タウンニュースなかとみに載ったわたしの町のむかし話」（「加美乃木」神木悟、平成一二年）
第二十一話　**亡き父の教え**　「阿波の語り部」（徳島県老人クラブ連合会、昭和六三年）
第二十二話　**地盤沈下の苦しみ**　「恐怖の大津波」（鵠津波を語り継ぐ会、平成一五年）
第二十三話　**もどった　おやくっさん**　「上那賀のむかし話」（上那賀町、昭和五八年）
第二十四話　**あの時すぐ逃げていれば**　「南海道地震津波の記録　海が吠えた日」（牟岐町教育委員会、平成八年）
第二十五話　**ごっついぞ**　「阿波の語り部」（徳島県老人クラブ連合会、昭和六三年）
第二十六話　**お母ちゃん行けんもん**　「南海地震津波の記録　宿命の浅川港」（海南町、昭和六一年）
第二十七話　**はよう逃げ、はよう逃げ**　「南海地震津波の記録　宿命の浅川港」（海南町、昭和六一年）
第二十八話　**両親からの言い伝え**　住民公募
第二十九話　**古よりの警鐘「震潮記」**　「阿波国宍喰浦　地震・津波の記録　震潮記」（田井晴代、平成一八年）
第三十話　**堤防が吹っ飛んだ**　「平成16年災害体験集　未曾有の災害と戦った四国各地の声」（四国建設弘済会・四国建設業協会連合会、平成一六年）
第三十一話　**お別れぞね**　「'98高知大水害の記録」（高知新聞社、平成一〇年）
第三十二話　**繁藤の豪雨**　「土佐山田町史」（土佐山田町教育委員会、昭和六二年）
第三十三話　**結いの文化**　「高知新聞」（平成一六年八月二二日）
第三十四話　**避難なんてできやせん**　「'98高知水害被害障害者調査報告集　あのとき　私は……」（高知水害被害障害者調査委員会、平成一一年）
第三十五話　**非常事態宣言**　住民公募
第三十六話　**裏山から土石流**　住民公募
第三十七話　**寸志夫**　「土佐市史」（土佐市、昭和五三年）
第三十八話　**真覚寺地震日記**　「四国の地震」（岡野健之助、昭和六三年）
第三十九話　**先人が残してくれた教訓**　「土佐市史」（土佐市、昭和五三年）
第四十話　**弟のおかげ**　「防災を考えよう㉒」（春野町仁西郵便局、平成一七年）
第四十一話　**みこしの漂流**　「須崎史談　第14巻」（須崎史談会、昭和四九年）
第四十二話　**宝永津浪溺死之塚**　「須崎史談　第25巻」（須崎史談会、昭和五一年）
第四十三話　**長女が津波に奪われた**　「南海チリ地震津波録　海からの警告」（須崎市、平成七年）
第四十四話　**突然の激流**　「窪川町史」（窪川町、平成一七年）
第四十五話　**念仏堰**　「大方町史」（大方町、平成六年）
第四十六話　**阿鼻叫喚の夜の避難**　「渡川災害史と治水運動史」（森栄著、昭和六二年）
第四十七話　**燃え上がった火の手**　「南海大震災の記録～裂けた大地」（土佐民話の会、昭和五六年）
第四十八話　**おろよ、おろよ**　「渡川災害史と治水運動」
第四十九話　**再起不能か**　「中村市史　続編」（中村市、昭和五九年）
第五十話　**義民・中平宗兵衛**　「土佐史談　第61号」（土佐史談会、昭和一二年）
第五十一話　**救ったのは人のつながり**　「平成13年9月6日高知県西南部豪雨災害体験集　救ったのは人のつながり」（四国地方整備局・高知県、平成一四年）
第五十二話　**駐在さん、駐在さん**　「平成13年9月6日高知県西南部豪雨災害体験集　救ったのは人のつながり」（四国地方整備局・高知県、平成一四年）
第五十三話　**驚天動地の津波高**　「宿毛市史」（宿毛市教育委員会、昭和五二年）
第五十四話　**総曲輪**　「宿毛市史」（宿毛市教育委員会、昭和五二年）
第五十五話　**逆倒竹**　「大洲市誌」（大洲市誌編纂会、平成八年）
第五十六話　**水よけ場**　「肱川　人と暮らし　川の文化誌」（横山昭市編著、財団法人愛媛県文化振興財団、昭和六三年）
第五十七話　**豫州大洲洪水噺**　「豫州大洲洪水噺」（大洲市立博物館所蔵資料）
第五十八話　**人伝えの情報の大切さ**　「平成16年災害体験集　未曾有の災害と戦った四国各地の声」（四国建設弘済会・四国建設業協会連合会、平成一六年）
第五十九話　**避難用の舟**　「写真で見る『肱川の水害』」（大洲河川国道事務所、平成一六年）
第六十話　**瀬戸内海の津波**　「災害予知と防災の知恵」（小川豊、平成八年）
第六十一話　**大谷川の水除け争い**　「松前町誌」（松前町、昭和五四年）
第六十二話　**義民・窪田兵右衛門**　「伊予市史」（伊予市、昭和六一年）、「松前町誌」（松前町、昭和五四年）
第六十三話　**人名がついた重信川**　「重信町誌」（重信町、昭和六三年）
第六十四話　**大川文蔵と石手川改修**　「伊予史談　第103号」（伊予史談会）
第六十五話　**菖蒲堰の水争い**　「重信町誌」（重信町、昭和六三年）
第六十六話　**大崩壊物語**　「川内町新誌」（川内町、平成四年）、「らんどすらいど20号」（日本地すべり学会関西支部、平成一七年）
第六十七話　**四度目の成功**　「東予市誌」（東予市、昭和六二年）
第六十八話　**災害弱者の避難を的確に**　「平成16年災害体験集　未曾有の災害と戦った四国各地の声」（四国建設弘済会・四国建設業協会連合会、平成一六年）
第六十九話　**地獄に仏のありがたさ**　「平成16年災害体験集　未曾有の災害と戦った四国各地の声」（四国建設弘済会・四国建設業協会連合会、平成一六年）
第七十話　**真っ暗な中の明かり**　「新居浜史談　第100号」（新居浜郷土史談会）
第七十一話　**山向こうの水をこちらに**　「伊予史談　189～191合併号」（伊予史談会、昭和四三年）
第七十二話　**治山治水が大事**　「証言～あの日を忘れない～　平成16年香川県土砂災害の記録」（香川県、平成一八年）
第七十三話　**土下座の説得**　「証言～あの日を忘れない～　平成16年香川県土砂災害の記録」（香川県、平成一八年）
第七十四話　**土砂に埋まった牛**　「証言～あの日を忘れない～　平成16年香川県土砂災害の記録」（香川県、平成一八年）
第七十五話　**四国の水がめ**　「綾南町誌」（綾南町、平成一〇年）
第七十六話　**庄屋・久保太郎右衛門**　「綾南町誌」（綾南町、平成一〇年）
第七十七話　**ひょうげまつり**　「讃岐のため池誌」（香川県、平成一二年）
第七十八話　**土びん水**　「川島郷土誌」（高松市立川島公民館、平成七年）
第七十九話　**番水と香箱**　「多肥郷土史」（高松市立多肥公民館、昭和五六年）
第八十話　**消防だけでは太刀打ちできない**　「平成16年災害体験集　未曾有の災害と戦った四国各地の声」（四国建設弘済会・四国建設業協会連合会、平成一六年）
第八十一話　**八栗の峯くずれる**　「庵治町史」（庵治町、昭和四九年）
第八十二話　**小豆島の土砂災害**　「昭和51年9月台風17号の集中豪雨による災害と復旧の記録」（池田町、昭和五四年）
第八十三話　**おそろしかった3日間**　「昭和51年9月台風17号による集中豪雨、四〇〇ミリの爪跡」（内海町、昭和五二年）
第八十四話　**真新しい毛布**　「昭和49年7月台風8号による集中豪雨　災害の記録」（内海町、昭和五〇年）
第八十五話　**大小二つのため池**　「志度町史　下巻」（志度町、昭和四五年）
第八十六話　**まさか三木町に**　「昭和62年10月台風19号災害と復旧の記録　まさか三木町に」（三木町、平成二年）
第八十七話　**電信柱に救われる**　「証言～あの日を忘れない　平成16年香川県土砂災害の記録」（香川県、平成一八年）
第八十八話　**真鈴の水**　「琴南町誌」（琴南町、昭和六一年）

あとがき

災害の体験談などとして出版されたことはあっても、四国の防災話が一冊の刊行物にまとめられたのは、おそらく本書が最初のものと思います。

この企画は、長いスパンで見れば確実に発生する自然現象である地震等の大規模災害に対して、四国に暮らす多くの人々の防災意識が希薄であるとの防災担当者の危機感から生まれました。四国地方には昔から災害に対処する知恵が防災文化として育まれてきましたので、それを多くの方々に伝えるのが私たちの使命であると考えました。

これまでに集めてきた災害に関する伝説、郷土史、災害記録などの文献、災害史跡の記録などの整理、住民の皆さんに対する防災話の公募を行うとともに、様々な方々のご協力をいただき災害に関する新たな資料の収集や現地調査を行いました。現地を歩く中で、涙が出るような悲惨な話や地域を守った先人の献身的な活動などを知り、私たちは改めて多くのことを感じ、学ぶことができました。

本作りに当たっては、多くの方々に取材や資料提供などでご協力いただき、四国防災八十八話検討委員会、編集委員会の委員各位には熱心にご指導いただきました。ご尽力いただいた方の名を列挙して感謝の意を表します。

監修をいただいた四国防災八十八話検討委員会（委員長 村上仁士氏（徳島大学名誉教授））他一一名の委員の諸先生方、冊子の編集をしていただいた編集委員会（委員長 鳥居謙一氏（愛媛大学教授））の諸先生方、防災話に応募していただいた多くの住民の方々、現地調査に協力いただいた㈶日本システム開発研究所の山本基氏、資料提供や写真撮影などに便宜を図ってくださいました田井晴代氏、井上徹氏、資料提供に快く協力いただいた図書館や自治体の関係者の方々など、多くの方から献身的なご協力をいただきました。皆様に心からお礼申し上げます。

四国防災八十八話検討委員会事務局

四国地方整備局企画部

松尾 裕治【環境調整官（危機管理連絡室長）】
藤川 昌幸【防災対策官】
山本 博久【防災課長】
丸岡 孝【防災課長補佐】
瀬戸 寿和【計画係長】
梶本 泰司【調整係長】
石川 智也【技官】
橋田 貴士【技官】

「四国防災八十八話」検討委員会委員

（順不同、敬称略）

委員長	徳島大学	名誉教授	村上仁士
委員	徳島大学	教授	岡部健士
	徳島大学	准教授	中野晋
	香川大学	教授	野田茂
	香川大学	教授	長谷川修一
	愛媛大学	教授	矢田部龍一
	愛媛大学	教授	高橋治郎
	愛媛大学	教授	鳥居謙一
	高知大学	教授	大年邦雄
	高知大学	教授	笹原克夫
	高知工科大学	教授	那須清吾
	国土交通省 四国地方整備局	企画部長	菊池良介

愛媛大学「四国防災八十八話」編集委員会委員

（順不同、敬称略）

委員長	愛媛大学	教授	鳥居謙一
委員	愛媛大学	教授	矢田部龍一
	愛媛大学	教授	高橋治郎
	愛媛大学	教授	松尾芳雄
	愛媛大学	准教授	千代田憲子
	愛媛大学	准教授	川瀬久美子
	(財)日本システム開発研究所	主任研究員	山本基
イラスト	漫画家		岡野小夏
事務局			津守玲子

先人の教えに学ぶ
四国防災八十八話

平成二〇年三月二五日発行

企画・発行　国土交通省四国地方整備局
〒七六〇－八五五四
香川県高松市サンポート三番三三号
電　話　〇八七－八五一－八〇六一（代表）
ＦＡＸ　〇八七－八一一－八四一〇

監　修　「四国防災八十八話」検討委員会
編　集　愛媛大学「四国防災八十八話」編集委員会
印　刷　セキ株式会社